川柳塔

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
平成二十八年八月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通巻一〇七一号

日川協加盟

No.1071

八月号

第22回 川柳塔まつり

と　き　**平成28年10月1日(土)**

開場：午前11時　出句締切：正午　開会：午後1時

ところ　**ホテル・アウィーナ大阪　4階　金剛の間**

大阪市天王寺区石ヶ辻町19-12（近鉄上本町・地下鉄谷町九丁目下車）　電話 06-6772-1441

《同人総会・議事》午前10時より

平成27年度事業経過報告・同決算報告・会計監査報告
平成28年度事業計画・同予算案・役員人事・その他

《各賞表彰式・記念句会》

表彰式　路郎賞・川柳塔賞・愛染帖賞・檸檬賞・一路賞・各地柳壇賞

おはなし	「老いを詠む」	川柳塔社	木本朱夏氏
兼題	「芸」	奈良	居谷真理子 選
	「マニア」	島根	竹治ちかし 選
	「うっかり」	和歌山	三宅保州 選
	「届く」	大阪	山本希久子 選
	「ぶらり」	鳥取	新家完司 選
事前投句	「みどり」**(9月1日必着)**	川柳塔社 主幹	小島蘭幸 選

◎各題2句・勝手ながら欠席投句は拝辞させて頂きます
出句締切　正　午（午後5時頃終了予定）　※各題の「天位」に賞呈
◎会　費　2,000円（当日頂きます）ご昼食は各自でお済ませください
◎　呈　記念品

《懇親宴》

と　き　平成28年10月1日(土)　午後5時～7時

ところ　ホテルアウィーナ大阪　3階　葛城の間

☆会　費　7,000円（会席料理）　先着申込み 130名様
☆宿　泊　ホテル・アウィーナ大阪　8,000円（朝食付き）

＊事前投句および懇親宴のお申込は**チラシに刷りこみのハガキ**（ご希望の方は事務所）にて9月1日(木)までに本社事務所宛、お送りください。
＊懇親宴のご送金（句会費除く）は同封の振込用紙でお願い致します。

主催　**川柳塔社**
大阪市天王寺区大道1丁目14−17−201
〒543-0052　☎・FAX 06−6779−3490
振替 00980−4−298479

あれから15年

小島蘭幸

麻生路郎、葭乃句碑建立除幕式は平成13年7月7日、午前11時から路郎先生のふるさと尾道文学公園で行われました。あれから15年、今でも目を閉じるとあの日の情景が鮮やかに浮かんできます。路郎先生の命日の7月7日今年もおのみち川柳同好会の皆様と一緒に、麻生路郎七夕句碑まつりを開催致しました。

短冊に一句を書いて笹竹に飾り、文学碑を囲んで記念撮影をしました。いつもと同じ行事でしたが、15年という歳月の重さをしみじみと感じることが出来ました。尾道文化振興課から取材に来られ、7月10日付の地元の山陽日日新聞に写真入りで、「尾道出身川柳作家麻生路郎を偲んで」―七夕に寄せて句碑まつり―の見出しで次のように紹介しています。

―麻生路郎は川柳六大家の一人として知られ、本名は幸二郎、明治21年に十四日元町（とよひもとまち）に生まれ10歳の時に大阪へ移住、大阪電信局や、毎日新聞記者など様々な職業を経た後、大阪の地で「川柳雑誌」を創刊（大正13年）現在の川柳誌「川柳塔」へ継承される。生来の剛直と情熱をもって現代川柳の社会化と質的向上に努めました。「川柳は人間陶冶の詩である」と標榜され、「いのちある句を創れ」を提唱して、個性豊かな多数の門下生を育成されました。―

路郎翁あなたのリズム今日も詠む　宗彦

地の酒をささげ晴れ晴れ句碑祭り　（大本）和子

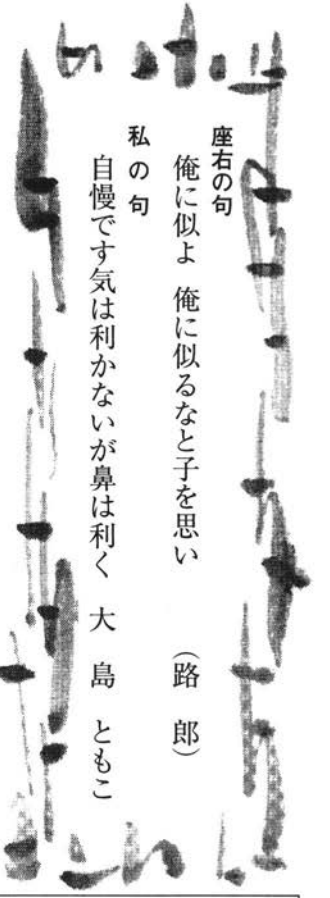
坂の街路郎の句碑に手を合わす　正信

生涯の伴侶は酒と愛し妻　（村上）和子

路郎忌に生まれた孫と星まつり　蘭幸

句碑まつりの後、市内のホテルで昼食会をして、来年も又、会う約束をしました。

さて今年も路郎賞・川柳塔賞の応募の時期になりました。7月号表紙裏に応募要綱を掲載しております。今一度、応募資格を確認して、8月号刷り込み用紙に5句を楷書で書いて、8月10日必着でご応募よろしくお願い致します。あなたの作品が路郎賞、川柳塔賞に選ばれることを心から願っています。



座右の句

俺に似よ　俺に似るなと子を思い　（路郎）

私の句

自慢です気は利かないが鼻は利く　大島ともこ

川柳塔　八月号目次

題字・中島生々庵／表紙きり絵・前田　尋「志摩安乗崎灯台」

■巻頭言　あれから15年……小島蘭幸…（1）
披講愚考……都倉求芽…（2）
川柳塔（同人吟）……小島蘭幸選…（4）
川柳塔の川柳讃歌 ⑭⓪……木津川計…（44）
新川柳鑑賞 ⑤③……麻生路郎…（45）
自選集……（46）
温故知新……（49）
水煙抄……川上大輪選…（50）
橘高薫風句抄……（70）
英語 de Senryu ⑤⑥……吉村侑久代…（71）
誹風柳多留一二篇研究 38……（72）
愛染帖……新家完司選…（74）
檸檬抄　「ゴール」……三浦強一・長浜美籠共選…（78）
■句集紹介『ふたり傘』岸本宏章　岸本孝子　共著……池澤大鯰…（81）

披講愚考

都倉求芽

あちこちの句会へ出席すると多様の方の披講を拝聴することになる。字面だけで見るのと耳から入るのでは句意の伝わり方が全く違う、とは誰しも初歩の頃、教えられることである。その大事な披講であるが各地の句会で披講される選者の中には、どんな句でも同じ調子で終始する方があるのには考えさせられる。

○五七五すべてに力を入れてリズムに欠ける。

○上五に力が入りすぎて中下が尻すぼみになる。

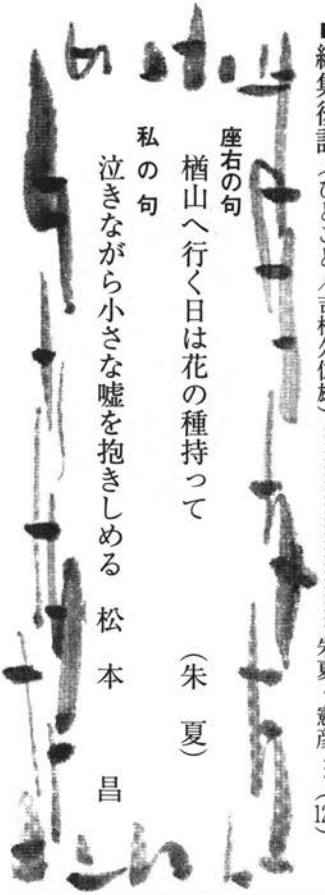
○下五だけヤケに力を入れて押さえ込む。

○楽しい句もやるせない句も同じ調子。

○下五になると脇取へ向いて声が届かない。

等々が間々見受けられて感受性が半減することがある。言うまでもなく句はリズムと情感である。それをゴツゴツ読まれたり画一的では折角の入選句や秀句が台無しになってしまう。朗々と、しっとりと、あるいは格調高く、それなりに披

一路集（「備える」……酒井真由選……（82）
「　数　」……初代正彦選……（83）
初歩教室「チャンス」……山口光久……（84）
インスピレーション・ナビ　印象吟……大西泰世……（86）
川柳塔鑑賞……小川てるみ……（88）
水煙抄鑑賞……加島由一……（90）
せんりゅう飛行船㊽……新家完司……（91）
『麻生路郎読本』余滴㊱……桒原道夫……（92）
■エッセー　マルクスとスミス小判を数え合い……仁部四郎……（94）
全日本川柳愛媛大会結果……（95）
路郎賞・川柳塔賞　選考規定……（96）
七月本社句会……（98）
句会燦燦……岩崎眞里子……（102）
各地柳壇（佳句地十選／牧野芳光・矢倉五月）……（103）
八月各地句会案内……（116）
柳界展望……（118）
■編集後記（ひとこと／吉村久仁雄）……朱夏・憲彦……（120）



座右の句

楢山へ行く日は花の種持って　（朱　夏）

私の句

泣きながら小さな嘘を抱きしめる　松本　昌

講してほしい。次に橘高薫風先生の句を並べてみる。

牛の背で笛吹く恋がしてみたし
恋人の膝は檸檬のまるさかな
月冴えてくる酒冴えてくる独り
人の世や嗚呼にはじまる広辞苑
人生の終りぴったりした棺

こうしてみるとそれぞれ違う句風が感じられる。これを柳話などに引用される場合、どれも同じ調子に読む方があるだろうか。

終りに小生の句を持ち出して恐縮ながら当時がっかりしたのを感じていただきたい。ある句会で

ジャジャジャジャン運命なんて冗談だ

という句を抜いていただいたが、その披講には

ジャ、ジャ、ジャ、ジャン、運命なんて、冗談だ

と、ほかの句と同じように一語一語、力を入れて句切られた。言うまでもなくベートーヴェンの運命をあしらったつもりだから、多少の音階もリズムもつけて一気によんでほしかった。これも思い出です。

川柳塔

小島蘭幸選

母は子の港でいつも凪いでいる
黒髪の少女に席を譲られる
逆上がり出来た児とするハイタッチ
母子草一本残し溝浚え
そよ風を生み少女らのランニング
連覇して横綱ふわり浴衣かけ

豊中市　水野黒兎

まみどりの空気は眼から吸うてみる
クールビズ早六月の貌をして
こう見えてジューンブライドですわたし
ブラウスの胸に溜っている吐息
青虫のままで助走もままならぬ
ゆすったら手強い枝が伸びて来た

岡山市　永見心咲

ほめられて微かな燠で発火する
町おこし津軽訛を崩せない
正直が過ぎて歪な楕円形

青森県　松山芳生

割り箸を割る瞬間に風通る
四季咲きのバラにあしたを所望する
許されて夕陽を連れてゆく小径

鳥取県　斉尾くにこ

捨ててしまう優しさ何度でも拾う
おみやげに娘にあげたのはエール
曇天にきみは大きな熱気球
あじさいと初夏の乳房の等高線
美しい嘘も年齢積んだから
カピバラとおんなじ顔で露天風呂

倉吉市　牧野芳光

石段を数えるほどに長くなる
雷が鳴っているのも僕のせい
ナァナァでならぬところが芯になる
毎日が宝のように見えてくる
介護施設で昔々が生き返る
廃線の電車銀河へ迷い込む

桜井市　安土理恵

聞き分けのない耳ちょっと噛んでやる
あの頃に少うし触れてから眠る
目覚めるとあなたはいつも後ろ向き
ちがう人の背中になってしまったね
首根っこ押さえて幾夜泣いただろ
静脈の浮いたこの手を離せない

藤井寺市　太田扶美代

借景の後におわす父と母
嘘まじりのポエムわたしの宝物
紫陽花の碧に染っているコップ
疲れたらズシリと音のするいのち
脇役に見せて主役もつとめます
ブランコを押してもらった人と居る

岡山県　田中恵

言い訳をするには尻尾邪魔になる
点々とつまみ洗いが増えてくる
縦糸が時々緩む癖がある
カナブンも天道虫も雨宿り
疑った自分の心詫びている
母の日の紫陽花雨の色に咲く

出雲市　伊藤玲子

ひっそりと生きるつもりが泣き笑い
街角のコーヒーの香に君偲ぶ
握る手を握り返したありがとう
初物を食べまだ長居するよろしくね
焙りイカ裂いて出不精誘いだす
諦めず歩いた褒美虹が出る

和歌山市　木本朱夏

水無月の魚の匂いのすることば
カーテンで仕切るわたしの小宇宙
夢うつつ合歓に抱かれていたような
眠り姫になりたや夜の始まりは
薫風忌のレモンに覇気のない寒さ
追憶の川を辿って誰に逢う

松江市　石橋芳山

打楽器の男は無駄なことばかり
期待などしないさ月は遠すぎる
逃げ込んだ森で寝床を探してる
リセットもできずにきつくなる捻じれ
寄り添ってゆっくり溶けてゆく時間
くだらないくだらないねと唐辛子

羽曳野市　三好専平

気休めにわけのわからん薬飲み
酒場から医者へとハシゴつけ替える
身代わりになってくれるという地蔵
仮の世といえども仮設住みがたし
神様も人が作ったお人形
七冠を重圧とせず碁は無限

沖縄県　森山文切

反抗期の子にあんぱん食べさせる
理由などないが足音は立てない
せせらぎが聞こえる辛くなんかない
少年の奇声の内にある真理
無理をして立てた親指から孤独
無機質な立方体に咲くリボン

大阪市　古今堂蕉子

梅雨空をパッとアジサイのお通り
スペードのエースを使い忘れてる
還暦から生えた羽です今日も留守
大は小兼ねない靴も愛情も
こぼれるように詠めたらいいな五七五
脈なしとみたらアハハと諦める

三田市　久保田千代

車椅子乗ってた過去は伏せてある
人真似はできぬ私はわたしだね
このシミもあの傷もみな語り草
何故と問うこと止めてから生き易し
今更に両手合わせて父母よ
老人会増えて派閥が誕生し

堺市　加島由一

死ぬ前にお別れいいに来ましたの
いい笑顔何かを持っている大和
女性から熱い視線がいつも来る
銀河系中心にいる君と僕
飽きもせず男やもめの炊くおでん
仏壇にロトシックスが置いてある

鳥取市　森山盛桜

沸点が低くて軽く見られがち
どう耐えるさて人生の渇水期
日本語の妙を操る偉い人
ままごとの大人に悪人は居ない
正論を吐いて味わうアウェー感
蔓という宿命とりあえず絡む

大洲市　中居善信

妥協した色かも知れぬねずみ色
黒枠の中でも君は男前
幸せか吠えない犬の首飾り
おっとっと本音だろうが言い過ぎだ
ブルースのリズムで昭和生きてきた
イチローは手柄にしない石を積む

大阪市　谷口義

今はもう消化試合をしています
今日中に治さなくても良い患者
先着順があるのか猫が走り出す
ここだけの話に雨がポトポトポト
おばあさんは年季のはいった坐り方
お花の先生は近所のおばさん

弘前市　高瀬霜石

真空パックみんなでしよう核兵器
平和論柿の種でももの申す
朝起きて九条　日暮れても九条
天国も地獄も自動ドア らしい
悪者は皆殺しだぞモデルガン
カタカナで通すヒロシマとナガサキ

岸和田市　岩佐ダン吉

愚痴を言うたびに淋しくなっている
残照が汗流したか問うてくる
振り返るやはり迷っているんだね
聞き上手の君に何度か救われる
一歩いっぽ汗で登ってきたらしい
今にわかるたったひとりの手を上げる

鳥取県　竹信照彦

小学生卒業したらゼロの地区
卒業した校舎みな無くなって喜寿
人生の卒業み仏は許す
年齢と共に引力重くなる
重い憲法軽くする亡者がいる
七十年続いた平和伸ばそうよ

大阪市　栃尾奏子

夢を食べ虚とじゃれあって中二病
寝たふりで聞いていたのねハンモック
これでもかと夜へ漕ぎ出すのは若さ
現実を愛せずにいるのはおとこ
夏の夜の夢と決別したおんな
夜が明けて海は輪郭取り戻す

羽曳野市　宇都宮ちづる

断捨離の手始めカード整理する
終活の進み具合を友が聞く
趣味多彩行く先々で義援金
スーパーは夫より十歩前歩く
空梅雨にあじさい愚痴を言うまいぞ
繁茂するドクダミ干して健康茶

米子市　吉田陽子

見たくないものを見ている真正面
等身大の縮みをもはや避けられぬ
無糖ではまずい微糖は甘すぎる
人間に戻ると傷が癒えていた
ハートりんりん逢いたい人に鳴らしてる
飴玉を買い足すわたくしの緩さ

寝屋川市　冨山ルイ子

二階に上る手摺りを持って一歩づつ
転ばぬよう転ばぬように踏みしめて
何時逝ってもおかしくはない年になる
駆け足で過ぎるひと日もひと月も
夜中のテレビバレエコンクール見る
交際費増えてもいいと削らない

札幌市　小沢　淳

失うものないと決めたらふり向かず
短命で儚いものに情を寄せ
道半ば八十路の坂は手恐いぞ
ヒロシマにオバマさん来て棘が抜け
プライドが正解のない詩を追い

札幌市　三浦強一

犬も歩けば街でティッシュを渡される
しゃあしゃあと反省ばかり鉄面皮
ラーメンが好き飲んだ後もっと好き
喧嘩にも節度があった昭和っ子
新ネタのジョーク出番を待っている

黒石市　相馬一花

腹七分長寿遺伝子動き出す
愛の字を書いて眠れぬ女偏
ロボットが美女の隣りでVサイン
逢う度に愛しているとくり返す
男性は飲みすぎるから早世す

弘前市　稲見則彦

深緑の橅の森から気をもらう
林檎園昔の君はいやしない
晩酌の前だ少しは草むしる
ミスねぶたミスねぶただとややこしい
好奇心くすぐる古希の坂の上

弘前市　岡本花匠

仏前にシャクヤク供えお念仏
充電に夢を広げる二人旅
新緑の癒しをもらう十和田湖へ
入浴のあれこれとどく介護愛
真田丸芸術わざの鍔さばき

弘前市　今愁女

天変の先駆け五月に真夏日が
朝のスクワット健康寿命へ百十回
熊出没山菜採りも命懸け
草抜きに馳走とビール待つノルマ
菜の花畑にも迷路つくって人を呼び

弘前市　須郷井蛙

ベランダの菜園家族ひとつにし
皮膚科には叱られました白髪染
手編した衣をほめられて忙しい
心までいやしてくれるマッサージ
昼寝した元気でこなすスケジュール

弘前市　福士慕情

振り向けば別な景色も見えてくる
振り逃げという手もあって生き延びる
バット振る音から違う四番打者
マイナンバー付され個性が消えてゆく
青空へ届けブランコ押してやる

さいたま市　星野育子

一度は上から見たい泰山木
元素には弱いが興味「ニホニウム」
外れ良し被災地支援宝クジ
助け舟いらないと言う九十三
なせばなる予定通り事運ぶ

東京都　川本真理子

姉を追う妹のくつ大きすぎ
弟と少し背伸びをした兄と
親しらず抜くことになる老母元気
心の奥ムーミンがふてくされてる
行き過ぎた所で来ない人を待つ

東京都　まえで　とよこ

炊きたてのごはんよろこぶ自炊の子
イタリアでもほめてはります日本米
ごいっしょに蕎麦すするのも介護です
十八歳の足音をまつ参院選
なんのご用か近づいてくる軍艦は

横浜市　菊地政勝

さわやかな存在感に座が和み
見て見ない振りも嫁へのエチケット
無い袖を振りたい人の虚栄心
心から詫びて過去とは縁を切る
正直に生きて近道選ばない

富山市　島　ひかる

亡き妹の良いことばかり聞かされる
弟よわたしの先に逝かないで
夫にはわたしの先に逝って欲し
親子四人元気なうちにする話
次世代へ重い荷物は残されぬ

可児市　板山まみ子

凡ミスも笑って許す草テニス
爆睡が特技なうちはやせられぬ
気まずくて重い空気を破るベル
金婚にまだ切れてない赤い糸
遠出するハンドル軽い若葉風

愛知県　早川遡行

五色豆食べるに彩の好き嫌い
温泉へ気のない返事気に入らぬ
苦労した人だな苦労語らない
大好きな酒とも暫くの別居
野菜やら愚痴やらいつもすみません

犬山市　金子美千代

幸せな今日を反芻して眠る
初恋の人と夢で会ったのかんにんね
自然治癒という有り難いお恵み
旅行日に合わせリハビリ粛粛と
紫外線たっぷり浴びた手を隠す

犬山市　関本かつ子

犬好きは犬の匂いに気付かない
子育てと同じ手間ひま農作業
あじさいの紙面今日から梅雨の入り
二万歩も忘れて尾瀬の水芭蕉
消費税盾に円陣組む総理

京都市　清水英旺

払っても落ちない老いという埃
妻の絵に批評がましいこといわぬ
ひび割れた夫婦茶碗は歴史秘め
へとへとになるために行く行楽地
漱石も喜んでいる猫ブーム

京都市　高島啓子

素直になるまでわたしを茹でこぼす
縺れ糸ごめんと言うとほぐれだす
断層は二千名前を持っている
手打ち蕎麦日本の夏もいいものだ
外出の口実になる墓参り

京都市　藤井文代

口でなく目でコメントの日本文化
聞くと聞き流すためにも耳掃除
壁々々ライバルの背は高すぎる
金婚式支障なかった低い鼻
歳重ね口も萎えたし爪を研ぐ

京都市　桝本宏子

旅に出てゲームに夢中宇宙人
あじさい寺こっそり努力した新種
幸不幸世間の風はよそ事で
中国製里のみやげにまぎれ込む
心地よくひとりの夜の缶ビール

京都市　三宅満子

あたりまえが幸せ地震から学ぶ
墓参りビッグニュースはありませぬ
各停に乗ると川柳湧いてくる
きっぱりと貸し借りなしで続く仲
猫だってやさしい人が好きらしい

長岡京市　山田葉子

喜寿越えて義母の思いも身に沁みる
ちょっと無理しないと何処も行けません
無理したら元へ戻すの一週間
明神池太古の昔映し出す
湿原にいつかなりそう田代池

八幡市　今井万紗子

生きる事忘れぬように息を吐く
ゆうらゆら今日一日が動き出す
子の寝息そっと明かりを消してやる
母も逝き急く事もない街明かり
小枝にひょいエプロン掛けて二三泊

老鶯に一と時癒さる畑の昼
白鷺が青田に小首かしげ佇つ
リオ五輪超期待する日本勢
白百合のただ一輪が凛とする
数え歌孫に教えて過去想う

大阪府　桑田　ゆきの

上下見ず今の暮しを楽しんで
長寿より好物食べて今日の幸
駄句の山命を繋ぐため登る
思い出を紡ぎ懐温める
親の恩忘れずしかと子へつなぐ

大阪府　野田　栄呼

存在感白百合の香の強さ
名も知らぬ野の花摘んで心和ぐ
来し方の長さとこれからの長さ
ジューンブライド鈴蘭のブーケの眩し
赤とんぼ歌って廻る収集車

大阪府　米澤　俶子

サクランボ晴れて子供が狩りに出る
厳島穴子の味は忘られず
逆さ富士一瞬の絵に通う旅
バスツアー帰りみやげに満ち溢れ
汽車の旅駅でゆっくりお買い物

大阪市　池上　清治

そこそこの暮しそこそこの幸せ
挑戦に拍手喝采おくりたい
真っすぐに走った昭和凄かった
崩れない人ですが気が抜けません
命より大切ですかそのスマホ

大阪市　内田　志津子

睦まじくほどよい距離の空気感
ゆるいカーブ私に似合う遠まわり
梅雨の晴れ間しめった心天日干し
出入りにすかさずついて蚊がふわり
さわやかな風をもらいに墓参り

大阪市　宇都　満知子

やんわりに弱い男ですぐしなる
疲れても五時間以上眠れない
ある程度お金があれば悩まない
元気だなよく食べてよく喋る口
人間から煩悩とれば腑抜けする

大阪市　江島谷　勝弘

毎日が夢のバカンス飽きました
西暦で言われて歳が解らない
核産んだ誤算を神も嘆いてる
お財布をがんじがらめにする同居
千羽鶴つばさ欲しいと泣き出した

大阪市　榎本　日の出

大阪市　榎本舞夢

春なのに暗いニュースが多すぎる
貰い種どんな花かと水をやり
ウォーキング動物園もいいもんだ
初月給夕食おごる孫電話
学んでも学び切れない五七五

大阪市　大川桃花

切磋琢磨していた頃のエピソード
堂々と万引悲しい認知症
藺草香る部屋に大の字畳替え
訴訟社会生きにくい世になりました
ゴリラからすれば遊んであげただけ

大阪市　奥村五月

縄のれん目掛け駆け込む雨宿り
父の日は息子にもらい孫に出す
折角の料理の時は午前さま
若者に付いていけない衣更え
ガラスでも母の形見は光ってる

大阪市　笠嶋恵美

会いたかった友にばったり会う奇遇
手術後の坊様御経しんどそう
手術成功友から電話止まらない
母の日の花にやさしく童歌
電子辞書三度通ってやっと決め

大阪市　川端一歩

無口だがふところ深い友といる
踏み台になっていいよと友が言い
人好きになって人間丸くなり
どの彩で今日一日を飾ろうか
生き方は下手と言われて八十路すぎ

大阪市　熊代菜月

友の名を川柳塔に見る安堵
チョッピリと甘えて見たい今朝の雨
年金が私を計算高くする
真夜中に目覚めて今夜も五七五
好きですと言わせないでね私から

大阪市　近藤正

居てほしいせめて漱石二人ほど
十八歳未来見つめて投票所
身勝手な税と福祉のリンク論
きかん気の孫はやたらと口が立つ
船底の板外された舛添氏

大阪市　坂裕之

すばらしい事いっぱいの店に立つ
働いている友がいて遣る気でる
人は人みんな自分が大事そう
きっとよと言ったあなたにまだ会えぬ
想い出はいい事ばかり法事の座

大阪市　佐藤忠昭

詠み込み句多い句報は読み辛い
詠み込み句議会答弁そっくりだ
詠み込み句避けて悔しい全ボツに
原因は選者の好みか兼題か
嗚呼ダメだ言ってはいけない事言った

大阪市　田浦實

妥協して流され上手老いの知恵
時間薬怒り悲しみ癒します
苦の種があって家族は引き締まる
こつこつとやるこつこつとしかできぬから
熊本城傷つきながら凛と建つ

大阪市　津村志華子

朝のモカ今日一日の糧となる
露草のいとしさ思い出が募る
老いるとは気力体力無為無策
忍耐と不安独りにある掟
押し車ちょっと木陰でひと休み

大阪市　津守なぎさ

ガーデニング眺め散歩をする至福
次の旅予約へ元気取り戻す
梅ラッキョウ梅雨のたのしみ出来る幸
派手な服抵抗なしに着る独居
梅雨晴間布団叩きも姦しい

大阪市　寺井弘子

出発はゼロ何とかなるという若さ
エピソードはらはらさせる祝辞聞く
悔しいと言える望みがまだ残り
不満だけ言えば気のすむ間柄
季節感花も緑も駆足で

大阪市　寺本実

まだ元気三度の飯は忘れない
冤罪を願って選ぶ第三者
すっぴんで若いキレイと言われます
清純派それは昭和で消えました
気がつくと記憶の糸が切れている

大阪市　中井萠

悠々と生きていくには小さ過ぎ
嫁姑いつもブレーキ踏む準備
久々の出合いにはしゃぐ一張羅
必ずや死への覚悟がまだ出来ぬ
時々は自惚れ鏡覗いてる

大阪市　原田すみ子

余所行きを着ても普段は見えてくる
やさしさが目立つほんとは強い人
ロマン追う男眩しく見た昔
風に触れ地に触れ素足笑う夏
人の欲ごはん炊けたら汁も要る

大阪市　板東倫子

期待する戦争知らぬ十八歳
食べて寝て肥った日々をなつかしむ
スパイスに負けて素材の味が失せ
すり切れた大和魂目をさませ
地獄見た人の心は死んで居る

大阪市　平嶋美智子

置き場所を決めても他に置き忘れ
名が出ない何時も会ってるご近所の
色あせた思い出仕舞う場所がない
兄弟が寄れば方言宙を舞う
里便り故郷の四季を胸で追う

大阪市　藤田武人

九九言えた三歳の鼻高くなる
カプセルを開けて私の夢を読む
真っ直ぐにもっと素直になれ胡瓜
ロングからショートへパパは気付けない
ため息をついて天見る抽選日

大阪市　藤原千恵子

少年がきらきら光る夢語る
万病に温泉水を飲んでおく
トラックを運転してる可愛い娘
記念館心の内の雑記帳
優しい人おそらく芯の強い人

大阪市　升成好

やさしい名だから好きです菜種梅雨
私まだ開けねばならぬドアがある
古里のあの日を追えば風光る
自慢など一つもないと言う個性
血糖値つれて八十路の坂登る

大阪市　松尾柳右子

暑くなり水が欠かせぬ友と会う
飛ぶ小鳥街路樹青し空高し
二階窓開けて作句の昼下り
リハビリの路地の猫とも友となり
友と会い会話が弾むティータイム

大阪市　吉内タカ子

広島に折り鶴みやげオバマさん
昭和の子核ない平和一歩出る
暑い日を越えて又来た越えてやる
気の緩み小さいお告げ助けられ
蘭の花いろ艶きそう庭で癒え

大阪市　若本安代

嬉しくて日傘くるくる逢いに行く
悲しい日傘は斜めに深くさし
同じ夢見ていた頃の古い鍵
思い出を繋ぐ映画の持つ力
焦らずに歩幅を守る靴えらぶ

許されようたた寝少し酒少し
うたた寝に少し悔いてる昼の酒
百均の傘ブランドの服守る
相合傘夫婦に遠慮などはない
隠しごとなしでは夫婦続かない

堺市　奥時雄

ハッタリで世論あやつる選挙戦
マドンナが幹事欠席とは書けぬ
故人への借りを返している弔辞
レジ袋下げた夫の反抗期
ええとこの子には無縁のアメ細工

堺市　柿花和夫

ツバメの巣を支援している商店街
手持ち無沙汰で包丁を研いでいる
長いこと鼻血出ていず還暦や
いちじくを食べすぎなさけなくなった
梅雨の夜の恋愛論は悲観論

堺市　桒原道夫

夏野菜植えて梅雨入りタイムリー
体調管理出来る間は独り住む
終活は断捨離からと決めている
リフォームのドレスで八十路闊歩する
就活の孫仏前に手を合わす

堺市　源田八千代

紫陽花をほめてくれはる元気出る
毎日がせこい都知事でうんざりだ
もしもなどありえないけど夢を持ち
カルチャーの後の茶店で元気沸き
子と孫が祝ってくれたバースデー

堺市　齋藤さくら

核なき世界叫ぶ焼け跡のゼロ
人間も脱皮をしたい熱帯夜
ガラムマサラ利かして夏をぐいと飲む
アナログの身には馴染まぬ皆スマホ
加齢とややっと分かってきた傘寿

堺市　澤井敏治

守らねばならぬいのちに救われる
しあわせでいるのが怖くなる余生
どん底で得た正直が武器になる
平成が育ち昭和がとおくなり
腹減って動かなかった餓鬼の頃

堺市　遠山唯教

紆余曲折あったが最後妻の勝ち
助手席の指示に従う定年後
吊り橋は弱い人ほどよく揺らす
おお恐い右向け右で皆右へ
妻のお許しでTシャツ派手にする

堺市　内藤憲彦

他人の恋はほっておいてと思う記事
カレーしか頼まないのにメニュー見る
ペットにも幼児ことばで話す妻
流行を追う娘らに無い個性
女房が寝込んでパニックってる家事

堺市　村上玄也

あんたしか無いと重たい事言われ
生きてたらこんな事あり胸のバラ
偉い友持ってる人とお友達
ささやかに晩酌独り居にも慣れ
飾らへんだから誰でもウェルカム

堺市　矢倉五月

葉桜の風爽やかに蘇る
喧嘩売る元気も今は語り種
仏前に祖母の仕草の甦る
メロンより西瓜好物盆供養
送り火の揺れて今年も夏が往く

堺市　山本半銭

ジャンケンの一声先行きが決まる
出来ることだけしかしない日々となる
買いました季節外れのさくら餅
あいまいな記憶ネコジャラシが揺れる
麦わら帽夏へ一直線の風

池田市　栗田久子

体のネジ緩んで咳が出始めた
脚光を浴びた女に近寄れぬ
娘が嫁ぐ前に仲直りしておこう
天丼と決めてから見るお品書き
友の愚痴聞ける余裕も無い私

和泉市　横山捷也

譲られた席うれしとも無常とも
良心に恥じぬ尺度で生きている
核の傘借りて核廃絶叫ぶ
何でもない親に隠しているいじめ
銀行のカメラに何故か落ちつかぬ

茨木市　島田誠一

運だけで取った椅子だと言う他人
寝不足は康成に酔う午前二時
胸のばらはしゃぎ過ぎてる控室
飽食の罪胃カメラに裁かれる
左遷地を耐える地酒が慰める

茨木市　藤井正雄

晴れ女出掛けに雨が止んでいる
気温差にあたふた衣更えをする
断捨離の出来ぬ理由も取って置き
万歩計昨日と同じ人に逢い
最後には転ばないでと子の電話

大阪狭山市　矢野梓

貝塚市　石田　ひろ子

紫陽花の威厳不在の家守る
歳時記の情緒薄れていく恐さ
ヨイショする嫁の御蔭で弾む趣味
菜園の虫がわたしの師匠です
公園の深緑鬱を吸い上げる

河内長野市　植村　喜代

朝が来てたったついでにお茶を入れ
たったついでがトイレまで今日終る
施設の空気吸って来ました十日間
101歳おばあさん阪神ファンに驚いた
回り見て歩けないのは私だけ

河内長野市　大島　ともこ

偶然を装う僕の名演技
はにかんだ視線の先に淡い恋
木漏れ日が君をいっそう引き立たせ
赤い糸何処へ消えたか絡んだか
あの人の笑みと言葉を今日も待つ

河内長野市　梶原　弘光

ガラケーでまだ充分に足りてます
虐待にしつけとルビを振る輩
暴君も窘められる下り坂
しあわせねいつも宴会状態で
解釈を曲げてオイラの海と言う

河内長野市　木見谷　孝代

一粒も無駄には出来ぬ父の汗
脳のネジきりきり巻いて活性化
緩んだら巻き直してる赤い糸
ご近所が一緒にしつけ良き時代
のろまでも独立独歩マイペース

河内長野市　黒岩　靖博

歳の功せっかちも消え円くなる
親の背を越えると努力修業の身
子宝で酒煙草やめギアチェンジ
家長の座世代交替若き獅子
最敬礼背を丸めて老婆いく

河内長野市　坂上　淳司

たった四桁の暗証番号すぐ忘れ
ＡＴＭに番号違い叱られる
ゼンマイを巻かれ喜ぶ古時計
どっちみち死ぬのにお金貯めてはる
維持装置どうしますかに皆無言

河内長野市　谷　久美子

控え目に咲いて健気な山野草
言い訳はみっともないと奥歯噛む
夫が居るただそれだけで落ち着く日
梅ジュース梅酒梅干つくり終え
俎板の音がマックス嫁の朝

河内長野市　辻村ヒロ

梅雨晴れ間慌てて捜す夏帽子
しがらみを脱ぎ捨て自由味見する
薬の数自慢のように話し合う
私らしく脱皮できぬ厚い殻
じっくりと迷いきったら光り差す

河内長野市　藤塚克三

惚けたのか本音がすっと出てしまう
相談後仲間に弱み握られる
二人暮らし付録のような我が立場
自分史を書いて読んだらこれ俺か
いい一日しみじみ浸かる仕舞風呂

河内長野市　松岡篤

落し処考えてから手を上げる
猫の手も借りたい時に亭主居ず
おばちゃんも上り階段では静か
孫が居ぬ私は猫を自慢する
富士登山天保山から足固め

河内長野市　村上直樹

結び目も溶けてのびのび三回忌
谷底で触れた温うい人の情
やりとりは無言スマホの都市砂漠
躾けられ主夫と秘書なら狎れたもの
鰻丼のパワーで夏を迎え討ち

河内長野市　山岡冨美子

折り鶴と約束がある少女像
フラッシュバック脳裏に消えぬ黒い雲
余震なお止まぬ彼の地も雨季に入る
年輪の重さに関節の疼き
坂道を登って降りて歯科眼科

河内長野市　山室光弘

鈍行の人生いずれラストラン
クールビズ胸の谷間が自己主張
泣かされた亡母のしつけがいま宝
へそくりがパナマ文書にのっている
視聴率一番とれるいま都知事

岸和田市　雪本珠子

花一輪暮しに風情添えている
転んだら色んな風が吹き抜ける
悲しみが深いと涙出て来ない
生きてればなんてついつい口に出る
スタンスを変えても一度跳んでみる

四條畷市　吉岡修

おとといも昨日も今日も会議中
成人式たった一日着る晴着
うんざりですお好きなようにその噂
人間を上げ底にする靴をはく
厳しいが庇ってくれたのも恩師

吹田市　太田　昭

デイサービス幼児のように扱われ
横文字に疎くて迷う道しるべ
拗ねてみたが誰も相手にしてくれず
気楽とはさみしいものよ独り者
紅ひいて外出用の顔になる

吹田市　木下敏子

百歳に向かって提げる万歩計
梅雨明けもすっきりしない消費税
五千歩で傘寿の坂を良しとする
デュエットの姉はわたしを置いて逝き
淋しさを忘れ指折る五七五

吹田市　須磨活恵

薫風に誘われ京の街歩く
踝を信じて結ぶ靴のヒモ
捻ったり絞ってみたり知恵袋
美しく私を騙す万華鏡
友からの電話うれしい雨の午後

吹田市　野下之男

安倍さんの黒髪をまだ見たい
おこられた思い出忘れまた涙
締め切りと思えば元気出てきます
あの人を忘れはしない広島だ
北海道どうしてくれるこの暑さ

吹田市　山本希久子

築城と崩壊歴史くり返す
作り手の素顔の見えるお弁当
どう繕うてみても傘寿の背なである
実力が足りぬ努力も限界だ
胸奥にそっと秘めてる好き嫌い

高石市　浅野房子

琴線にふれる事なく散った句よ
手間を惜しまず料理する母でした
医者で待ち薬待ち来ぬ人を待つ
探し物疲れた頃にやっと出る
川柳にしっかりしがみ付いている

高槻市　井上照子

子を守る固い拳は隠してる
初夏の午後眠くなったらねむります
水飲んで熱中症から逃げている
杖ついて来し方思い歩を進め
十五歳大人も及ばぬ知恵を出す

高槻市　指宿千枝子

一昨日が白いページの日記帳
来てうれし帰ってうれし孫四人
別れ際のタッチにもらう温かさ
洗濯機フル回転の置き土産
陰干しの秘密大事にまた仕舞う

高槻市　片山かずお

棚の奥から古い順です冷蔵庫
男の力女性の口に敵わない
小麦色の肌に部活の汗キラリ
ＩＴの進歩私を置き去りに
お互いにゴメンと言えと揉めている

高槻市　初代正彦

改革の旗に古参も泥まみれ
いい夢を見過ぎた後の胸騒ぎ
勝勢に帯をきりりと締め直す
聴診器医者の言葉に耳立てる
躓いてやっときっぱり諦める

高槻市　島田千鶴子

寝付かれず句作重ねる午前二時
解体の古家に残る柿若葉
ホテルランチメニューは女性好みです
蛍舞う地上に浮かぶ天の川
猛暑続き夕日も少し疲れ気味

高槻市　杉本義昭

初恋がカリッとかじる金平糖
母の命日花と話をして帰る
余生にもパワーがほしいアマリリス
子供会気持がつなぐリサイクル
玉砂利を踏んでお伊勢のＧ７

高槻市　富田美義

プライド源また減る年金トホホのホ
古希過ぎりゃその日その日が誕生日
子の躾け涙も嘘も付け加え
口約束だけじゃ返事はこんなもの
金の要る誘い何時でも生返事

高槻市　富田保子

泣く子にも声が掛けられぬこの時世
ほっこりの年金暮らし夢でした
輪になった笑顔も咲いた花の下
オルゴール　チンチロリンと虫が鳴く
可愛そう棚に残ったパンを買う

高槻市　原洋志

私をすっぽり入れて切手貼る
ソムリエの話リッチな酔い心地
題名はないけど無事に今日終わる
格子窓少し理屈がくどくなる
いざという時の荷物が多すぎる

高槻市　安田忠子

矢の如く生きまだ走る古希の坂
何事もプラス志向で粋な人
頭では分かってるのに出ぬ言葉
ＯＢ介肩書通り席に着く
どっちみち最後は皆同じ壷

豊中市　江見見清

お悔やみの言葉さがしてまわり道
宝くじの幸運だけは縁遠い
出入口閉まり話を逃げられず
隠してる間に太ってた噂
枯れたって信念曲げぬ老いの意地

豊中市　藤井則彦

まだ傘寿自分探しの旅途上
常識にこだわり過ぎて墓穴掘る
税務署の二つ返事にふと不安
生きてゆくパワーは象もぼうふらも
ポケットに心のゴミもふと溜まり

豊中市　松尾美智代

言葉忘れ右も左もスマホです
少しずつ慣れてきているスクワット
愛想笑い見ぬけなかった有頂天
温度差が違う夫婦の辛い夏
愚痴ひとつ削れば風はおだやかに

富田林市　片岡智恵子

子育ての一生だった亡母を恋う
生かされて米寿へ向かうフルコース
深刻な話湯豆腐煮えたぎる
ありがとうたった五文字で角がとれ
いい仲間笑い合う目線は同じ

富田林市　関よしみ

わくわくの心を今日も持ち歩く
不発弾まだ埋まってて今平和
この釘が私を守り見つづけた
空からの縄梯子花火が終わる
それぞれの運命演じ切って宙

富田林市　中井アキ

ひとときを癒す小さな美術館
約束が真正面からやってくる
姑と云う定規小さくなりました
感性の瑞瑞しさに負けている
終章に似合うフェルメールの陽ざし

富田林市　中崎深雪

ばかだなあ澄んだお空に叱られる
ポケットにいつも入れてる夢のタネ
お出かけはしないがお洒落して遊ぶ
ふんわりとハグしてくれる友の文
弱者には世の中の嘘よく見える

富田林市　肥山一文

あの人の心を開ける鍵がない
古い鍵心の中で眠ってる
再生をはかる心に鍵をかけ
傘一つ暗闇の中落ちていた
借りた傘又も電車におき忘れ

富田林市　山野寿之

梅干しの壺に真っ赤な妻の愛
てにをはに凝って一日文学者
イタリアの土産もメイドインチャイナ
腹八分二分はお酒の指定席
爽やかな応対線路越し会釈

寝屋川市　籠島恵子

足音に合わせていては追いつけぬ
また一つ歳を重ねて見た桜
酒を出す事を忘れている家族
走馬灯あざみの花が咲いている
思い出し笑いは麦秋の彼方

寝屋川市　伊達郁夫

サンダルの素足が夏を追いかける
風を食べ玉虫色で生きてます
真っ白な画布に私の虹を描く
一歩引く位置で結び目緩くする
愚痴ひとつ流して今日も介護する

寝屋川市　平松かすみ

昨日今日自分に喝を入れている
お手玉も剣玉もしておばあちゃん
子に返り遊べば脳も活性化
どなたかと聞かれて孫は大ショック
義父亡くし娘やさしくなりました

寝屋川市　森茜

しみじみと披講を聞いたかぶりつき
ゆとりない財布がしのび笑いする
私の少女に着せているフリル
ベランダから蛍火孤独くゆらせる
休耕田れんげ畑になりました

羽曳野市　安芸田泰子

年金を一寸奢った土用丑
盃の底にたまっている不満
思い出せぬことあれあれで通じ合う
試着室ぴったりでないのは財布
バラよりもトマト選んだ植木鉢

羽曳野市　徳山みつこ

天体ショーを消してしまった摩天楼
つい喋り底の浅さをさらけ出す
閻王の過労案じておりまする
ガイダンスに従う脳がぶち切れる
底知れぬ力大地に跪く

羽曳野市　中川ひろ介

蜘蛛の糸光る紫陽花雨の粒
健康法父は夜明けの溝掃除
古き佳きうまいもん屋に鯨カツ
父の日を冷し中華で祝われる
子は父の夢を追っかけ川柳塔

羽曳野市　永田章司

報告書悪いデータは抜いておく
東京五輪傘寿迎えてあといくつ
サミットで乾杯の酒高値よび
手に汗握り期待と不安二面もつ
立憲主義あわてて辞書を引いてみる

羽曳野市　藤原大子

広い世にわたしの命ただ一つ
ロスタイムここから光る底力
慣れるって凄いと思う恐いとも
単純で上手と言われ好きになる
言いわけを並べて冷えていく空気

羽曳野市　吉村久仁雄

勝負服ポケットごとに武器を入れ
断りの返事に人となりが見え
合掌のすき間に欲が潜り込む
継ぎ当てが目立つ夢だがなお捨てず
削り削って残る言葉は愛でした

東大阪市　北村賢子

あたたかい昭和を偲ぶ丸ポスト
合掌の思いどんどん増える老い
モノクロの遠い昭和がぬくかった
ライトも浴びず満ち足りているカスミ草
忠実に生きて誇らし夫の背

東大阪市　佐々木満作

おしゃれして街も華やぐ春の色
じわじわと晩節忍び寄ってくる
伊勢参り柏手厳かに響く
ゆったりと余生楽しむ趣味ひとつ
分相応世に恥じぬよう来た謙虚

枚方市　海老池洋

コーヒー一杯これでエンジンかかる朝
ぴったりの言葉を探す広辞苑
人類へ謝罪せんかという地球
大仏殿の屋根で足踏みするカラス
心まで枯らしてならぬ聖書繰る

枚方市　小林わこ

世間しらず幾度も泣いた一人っ子
磨き足りぬ朝の鏡に叱られる
何歳と聞かれ少しのさばをよむ
支え合う力ちょぼちょぼ車椅子
なるようにならぬ時間がいとおしい

枚方市　丹後屋肇

技能賞丸い土俵と馬が合う
初入選しどろもどろになる呼名
どっちかに挙げねばならぬ行司役
ネット時代下流老人天の邪鬼
落魄を美学が凜とさせている

枚方市　寺川弘一

年取れば皆老人になるんだね
年を取るのは時計の針が動くから
無音で無風あの世はきっとこんなもの
神さまの似顔絵誰も信じない
他人だが医者の言葉は信じよう

枚方市　二宮山久

病む右手元気で走る作句道
隣から息子夫婦の笑い声
趣味多忙できる幸せ今日も生き
締切りが間近に迫る書斎部屋
つがい鳥今年も来たか庭の枝

枚方市　二宮紫鳳

旅プラン掲げて元気取り戻す
幸せがガーデニングに咲きほこり
暑気払い小腹を満たすわらびもち
老い二人新茶香りて雨の午後
リフレッシュ緑に染まる古都ウォーク

藤井寺市　伊藤アヤ子

打ち水に感じる心地良さの風
あの人の顔を浮かべて飲む新茶
新茶の香り届けと亡母さんへ
同じ時間共に過ごした五十年
これからも迷わない様見守る手

藤井寺市　鴨谷瑠美子

拭いて拭いても鏡の中の蜃気楼
焦らずに行こうワルツのオルゴール
にんげんを振りかざすからややこしい
そんなこんなが嫌いでいつも最後尾
約束の場所に咲いてた雨季の花

藤井寺市　鈴木いさお

わたくしの原風景を探す森
とっておきの台詞を胸に秘めている
「娘よ」を歌うとどうしても泣ける
引退の花道に咲く未練花
今ここでやめれば悔いが残りそう

藤井寺市　髙田美代子

数独に振り回されて小半日
ゆで玉子きれいにむけぬ日の焦り
大げさに今日の運など考える
私が主役わたしのお葬式
あやまって駄目なら開き直ろうよ

藤井寺市　田付絹枝

入院で終止符打つかバタバタ症
新築の病室ラッキーホテル並み
リハビリで人体不思議目が覚める
数々のリハビリメニュー叱咤する
リハビリも進みお別れ車椅子

藤井寺市　津田　シルク

社交辞令頭の上を通過する
楽天家と言われ天然になりきる
無信心のまんまに古稀も半ばなり
口止めはご無用もう忘れました
物忘れも笑って済ます婆の知恵

藤井寺市　吉田　喜代子

雀来て暫し遊んで帰る庭
梅雨晴れ間ゴミ収集車軽やかに
はな子逝く哀しいぞうの命得て
誰からも小言はなくて朝寝坊
夫婦来る参院選の始まりか

藤井寺市　若松　雅枝

父の日はせめて父子で映画でも
鍬を振る傘寿の父にある気迫
木槿咲く一日花にあるいのち
干渉が過ぎて子らにも疎まれる
試されているのか長く待たされる

松原市　森松　まつお

安静を保つ食後の十五分
午後三時カスミかかってきた頭
やせたいわ妻がぼそっとつぶやいた
ちょっとした段差辛そう妻の足
ゆったりと流れるドラマ小津を観る

箕面市　酒井　紀華

若かった速達便の愛おくる
惚れっぽいの甘い言葉に蓋をする
甘い言葉が阿呆な女に夢をくれ
人生は不平等なり草むしる
介護日誌母の脈とる細い腕

箕面市　出口　セツ子

前向きに生きても病気やってくる
病名に困らないなと夫笑う
淋しがりやだからやってるボランティア
一期一会大切にする余命表
負けへんで笑うと元気くれる陽だ

箕面市　広島　巴子

奈良の鹿神の使いと背を撫でる
認知症介護で気付く家族愛
前向きな友とワンツーウォーキング
ミニトマトもっと大きくなれと孫
雨続き猫を相手にニラメッコ

八尾市　髙杉　千歩

英霊よ父よ母よ八月雲晴れる
要介護もう昔へは戻れない
前向きに生きボールペン太字
立候補戦争知らぬ人ばかり
防犯カメラ避けてベンチでひと休み

八尾市　寺川　肇

値切る僕しりめに女房遠ざかる
逃げ隠れ出来ぬところで会釈され
瞬発力萎えて気だけが先走る
取りたての妻に乗せられハイウェー
大胆に暴いて稼ぐ週刊誌

八尾市　宮﨑　シマ子

ごちそうさま箸と茶碗に言うひとり
残り物があるものだなあ冷蔵庫
老いの灯は太く明るく使いきる
カサブランカ蕾が三つ今朝開く
母の頭に四季の備えがつまってる

八尾市　村上　ミツ子

通訳なしでおしゃべりしてる首脳
核ボタン持参で慰霊碑へ献花
ラジオに合わせうたう原爆許すまじ
水だけで生きぬいた男児のメンタル
水におびえるルーブルもオルセーも

八尾市　山根　妙子

時を超え星条旗行く被爆の地
予定の日暦に入れる月初め
イチローの技あるヒット地味に冴え
偶(たまぁ)には用の無い日もまた楽し
時の日にずれた時計を合わせてる

神戸市　上田　和宏

雨の日は良い子で過ごし早寝する
飲み忘れ元気の証かも知れぬ
ため息が全ての事情物語る
川柳で国語社会のお勉強
熱中症避けて雀も昼寝する

神戸市　奥澤　洋次郎

家族という得体の知れぬ絆かな
恰好をつけることない恋終る
縄のれん愚痴に元気をもらってる
私には心配できる人がいる
拉致知らぬひ孫の笑顔抱く笑顔

神戸市　冨永　恭子

梅の実の青き固さにある未来
命洗う抹茶の苦さ受け入れる
聡明な人と出会って背が伸びる
枠外に居るから見える三手先
ピカピカのキビナゴ捌く旬貰う

神戸市　能勢　利子

雨の日はさだまさし聞き豆を煮る
口酸っぱく言えば父の日シャツ届く
曲がったこと嫌いですぐに顔に出る
輪の中に入ると自分見失う
ときどきは車輪休めて古稀の坂

日を浴びて物みな私天めざす
頂点をめざそう後光さしている
身も削りねぎらってやる膝小僧
うなづいただけで味方にされていた
飛び越える自信の持てた愛の川

神戸市　松井文香

梅雨空に泰山木の花笑う
青葉風ブランコの声嬉嬉として
冷やソーメン飽かずに今日も昼にする
梅雨鬱へ背筋が伸びる新茶の香
雨模様今日はお休み洗濯機

神戸市　山口美穂

仕切線超えてませんか総理殿
どっちにも付かず風向き読むゆとり
窓は雨女ごころが読めぬまま
大袈裟に煽て男を手の平に
逆走のたびに度胸がついてくる

神戸市　山崎武彦

留守をしたせいか蛇口がよく喋る
衣食住足りて延びゆく終の駅
どの種も咲かねばならぬ訳をもつ
子が渡り切るまで視線そらさない
自信かな的をだんだん小さくする

明石市　糀谷和郎

退屈な時計はゆっくりと回る
血圧は医者の前だと高くなる
ふんばって生きていきますその日まで
久し振り顔見たくなる電話口
汚染浴びふる里はもうなくなった

芦屋市　黒田能子

日記帖余白にプラス五七五
マチュピチュ憧れのまま終りそう
田園に憧れているビルの風
バラの花君に漢字は似合わない
筆順がどうのこうのと平和だな

芦屋市　竹山千賀子

辛いこと笑顔で隠す妻の技
ほどほどの幸せ見つけ生きてます
そこそこの距離で逢いたい人がいる
急がないけれど乗るのは特急に
伸びている寿命の先に楽しみが

尼崎市　市坪武臣

水張った田んぼは鳥のレストラン
愛犬に飼われているような夫婦
面倒を避けると老いが加速する
ドラッグストアでついでに酒も買っておく
テーブルに夕食並べ妻を待つ

尼崎市　藤井宏造

尼崎市　藤岡りこ

嫌いでも好きでもないが良い夫
見た目悪いが夫の手料理味が良い
孫のメール最後は絵文字しゃしゃり出る
育て方間違ったのか素直すぎ
習わぬが舌が覚えた店の味

尼崎市　山田耕治

連休に肩叩き券使い切る
春の土手少年野球犬と見る
夫婦だな真正面に坐ってる
オオカミが化ける童話をしておこう
同い年と知って昔の話する

加西市　金川宣子

出勤の夫に送る手が温い
花泥棒心癒せていればいい
五百羅漢甘い顔した父に会う
探し物出てくるまでは大掃除
連休の喧騒知らぬ老いの日々

川西市　山口不動

サミットに瑞穂の国の五月風
広島にオバマが折った千羽鶴
ご先祖に今の幸せ見てもらう
腹八分早寝早起き医者も要る
一人立ち妻の料理を修業中

篠山市　北澤稠民

自分への褒美が買える日は遠く
もうやめるこれで何年豆作り
くせのある後ろ姿に笑みもれる
温情が心にしみてあつくなり
残り日は指を折ってもわからない

篠山市　酒井健二

綿菓子の風にも消える過去もある
踊らない惚けたわけじゃ有るまいに
稚内北の果てにも反安保
頼りには成らぬが影は添うてくる
五分ほど座りしばしの修行僧

篠山市　酒井真由

いたずらの種を探している天使
指切りに夕陽が映えるまたあした
エンゲージリングが行方不明です
半世紀パッチワークのような愛
津波あと天使がそっと舞いおりる

三田市　足立つな子

自重して家に籠った連休日
長文の娘のメールにも親の幸
立つ座るマッスル鍛え再生へ
目にわるい夜間運転やめておく
妻の名を呼ぶこともなく明け暮らす

三田市　石原歳子

ころころと這ってる毛虫またかわい
几帳面に田植をされた田圃みる
美しいみどりが包むこの暮し
わたくしの話し相手は遺影です
遺影には今日の出来ごと話します

三田市　上垣キヨミ

二歳児に赤ちゃん言葉直される
法要の時だけ出合う血の絆
アイドルの踊りを真似て湿布薬
度が過ぎた躾に揺れた七日間
高らかに笑う日焼けのクラブの子

三田市　上田ひとみ

幸せのかたちに星も瞬いて
泣かないでゆっくり飲んでおねむりよ
何となくバランス取って裏表
温かくやさしい声に叱られる
見抜かれていたのでしょうか恋ごころ

三田市　尾﨑一子

孫をみてつくづく思う時代の差
若者の好むレシピに今夢中
だとしても子も孫も皆宝もの
ばあちゃんに生き甲斐くれてありがとう
目に青葉弥陀の山里亡夫恋う

三田市　北野哲男

朝はパン夜焼酎で見るニュース
爺笑う賢い奴は皆逝った
呆けたふり面倒くさくなくて楽
あんたなら百まで元気と言われます
極楽に定員枠がありますか

三田市　野口晶子

しがらみに影を踏まれて動けない
蜩の声愛の告白邪魔をする
しがらみが清純な目振り回す
あの日の傷フラッシュバック見えた朝
ぴかぴかにしたくて自分史書き直す

三田市　福田好文

介護ロボ買うためお金貯めている
救命措置訓練だから出来たけど
砂吐かぬアサリが一個自害かも
労基法無視する農は叱られず
手術室みんなマスクで顔知らず

三田市　堀正和

雨の日はじっくりと読む社説まで
昼ごはんお酒も飲める蕎麦にする
バンダナで頭を締めているヤル気
爺ちゃんの夢はと聞かれうろたえる
三世紀続いた家系僕で幕

宝塚市　田中章子

素足には地球の鼓動柔らかい
日々努力まだ晩成を目指してる
生命線こわいくらいの長さです
言わぬが花そう母さんに諭された
横領犯妻は貧乏しています

西宮市　秋元てる

与えられた時間未だある慌てまい
ちょぼちょぼの友が近くによき余生
どんな日も小さい楽しみ落ちている
人間は皆よく似てるから好き嫌い
四人部屋生まれ育ちは生きている

西宮市　足立茂

ほろ苦い思い出だけが懐かしい
玉の汗見てから彼が近くなり
居留守して貰い損ねた旅みやげ
アップより遠景で撮る妻の顔
寝込んでるのに調子はどうと長電話

西宮市　梅澤盛夫

損得と好きと嫌いで生きる俺
雨煙るあじさい寺に亡妻と居る
核なき世オバマスピーチ光ります
人々と戦後を生きた象はな子
煩悩が古稀の隙間で目を覚ます

西宮市　緒方美津子

幸せはちょぼちょぼでよし柏餅
知恵袋もうぺっちゃんこ旅に出る
人となりをかくして黒いゴミ袋
紫陽花は如露の水では気に入らぬ
葬列に胸をはってはいけません

西宮市　亀岡哲子

単身赴任のおじさん集う東京都
買うあてもないデパートでウォーキング
入口であの世見てきたブーメラン
害虫の駆除怠って蝶が舞う
今までが元気すぎたのかも知れぬ

西宮市　西口いわゑ

明暗を分ける判子の無表情
白よりもすこし濁って愛される
野心など捨ててのんびり花といる
鉛筆と夢育んできたノート
明日よりも今が大事になってきた

西宮市　福島弘子

泳ぎより派手な水着で差をつける
趣味の会仕切り上手なイヤリング
右往左往掃除のロボに仕切られる
おしゃまさんパパのネクタイ決めたがる
喜寿今も時間厳守の亡父の声

一周忌思考停止の時と居る
呼んで見たやっぱり声は返らない
小さくはなったがバラは咲いている
知っている名前の句から読んでいる
消し忘れほとんどわたしだったらし

西宮市　牧　渕　富喜子

ダンゴ虫あの手この手を使い生き
食事制限茶漬さらさらとはならぬ
梅雨入りだしっかりビーフ食べるとす
水飲んでね水は制限ないらしい
テリトリーにコンビニふたつ押さえてる

西宮市　山　本　義　子

喝采をあびて自信がつきました
金婚式大きな節目ありがとう
親子四人ハイキングした上高地
古民家の温泉もよしきらきら星
デイケアー嫌う爺ちゃん握手する

西脇市　七反田　順　子

認知かな昔語りが好きらしい
新しい靴が明日を予定する
調子よし返事明るく腰あげる
切る切らぬ抗がん剤の成果聞く
額拭きアイスコーヒー声弾む

姫路市　古　川　奮　水

歳はいや病気自慢や孫自慢
採決の時だけぼくも数の内
ライバルが転けた時だけあるチャンス
だらだらへ母の怒声の夏休み
近道が渋滞という予定外

南あわじ市　萩　原　狸　月

偏頭痛もしやパソコン原因か
ジェネリック選択やはり医者任せ
画面より患者触診先にして
罹りつけ医者の多弁は親譲り
患者にはアナログ対話増やすべし

奈良県　安　福　和　夫

通勤車会話で洩れた社の機密
常識の範囲で迷う慶弔費
海の幸いっぱいのせた亡母の寿司
活断層死角にひそみ爪を研ぐ
核廃絶広島からのメッセージ

奈良県　谷　川　憲

泥まみれ政治へ清潔十八歳
勤労者諸君に教えぬ政治機微
狂ってる磁石の針を信じさせ
練り上げた言葉で黒を白にする
支え合う人という字で喜寿卒寿

奈良県　中　原　比呂志

奈良県　渡辺富子

とと姉ちゃんと同じ恋した若かった
身ごもった気配笑顔がやわらかい
何処から来て何処へ帰っていくいのち
喜怒哀楽語る地酒と夜を明かす
天仰ぎ生きる目標雲に問う

奈良市　阿部紀子

大統領鎮魂の辞にありがとう
終戦日今も玉音記憶あり
終戦後二年捕虜から父帰国
小さな会社の大きな誇り展示会
亡母の愛でた紫陽花咲いて墓前へと

奈良市　大久保眞澄

転んだらそのまま寝てしまいそうだ
引きつっていても笑えばよろしいか
酒に酔う夫と人に酔う私
ネコの伸びまねたら胴がのびそうだ
やさしくしないでホントは嫌いなの

奈良市　加門萌子

季節毎咲く花たちに恥じること
不明児の何と僥倖奇跡だね
燕の巣ことしは何故か見なかった
言いたい事ちゃんと発言出来る国
天候も政治も共に波瀾含み

奈良市　辻内げんえい

デイケアの車行き交う朝の街
高齢者公開講座埋めつくす
古稀となり学んだ恩師みな鬼籍
夏にだけ玄関に出る金魚鉢
任せてと孫のことならホイホイと

奈良市　山本昌代

種蒔くと応えてくれる土の精
少しとぼけ風にゆられる春紫苑
にっこりと頭下げるといい空気
笑っとこ聞こえないから笑っとこ
まだまだと駅の階段かけ上がる

奈良市　米田恭昌

銅鏡の眠る飛鳥に記紀の風
適塾の教え慶應義塾生む（敵塾吟行2句）
目標は医大適塾さがすママ
郡山吟行みどりの風が心地よい（郡山吟行2句）
電話ボックスで電話をかけていた金魚

生駒市　飛永ふりこ

やさしいのやさしくないの君次第
ちゃん付けで蘇る笑み同窓会
ごてごてがグラスビールじゃまだ解けぬ
慈眼からつんのめるなと御達しが
迷ったら日参せよと観音が

香芝市　大内朝子

きらきらと初夏の木漏れ日ルノアール
復興へ熊本産を買う祈り
お母さん長生きしてねには弱い
太陽の愛でひらいた零れ種
身の程を知っているのにひょいと欲

橿原市　居谷真理子

文庫本の続きとファミレスのワイン
カルガモの列の最後よ生きのびよ
丁寧に丁寧に剥く傷林檎
子を抱けば女は強い生きものに
何事もなく街灯が消えました

大和郡山市　坊農柳弘

身の程を悟るヒマワリのケジメ
見て聞いて食べてデパ地下一巡り
人間の脆さを包み込むホタル
愛されていると気付いた星まつり
もう少し時を下さい長生きのカルテ

和歌山市　磯部義雄

親と子が繋がっている糸電話
飲むうちは死ぬるもんかと杯交わす
言い訳を考えながら午前さま
救急車呼んだその日に訃報知る
納棺へそっと柳誌を入れてやる

和歌山市　上田紀子

紫陽花が健気に雨のひと滴
尼寺を囲む紫陽花花しょうぶ
沙羅双樹神の御加護に生かされる
梅雨晴れ間右脳左脳を休ませる
哲学をいっぱい詰めた握りめし

和歌山市　楠見章子

ハートのドアを開けにくる初夏の風
カタログを開いて夢と遊んでる
憎めない楽しい嘘のつける人
仲直り互いに短気認め合い
幸せがいつかメタボになっていた

和歌山市　坂部紀久子

吐き出した嘘事実となって歩き出す
好きだから些細なことにこだわりを
想定外次次おこる老いの道
割れ物の様にベッドへ伸ばす膝
いつも同じ小窓の景色にも季節

和歌山市　武本碧

歌わねばすぐカナリアも忘れられ
幸せを招く小さな心掛け
まぶしさに愛をうのみにしてしまう
子に見せる背中きれいに拭いておく
友達の友達だけどあったかい

和歌山市　玉置当代

豆を剥く浮いた話もないままに
伸びる子の芽を摘んでいた親のエゴ
あじさいがにっこり笑う雨になる
蛙の合唱紀の川の風人の情
これからも手を取り合ってゆく余生

和歌山市　土屋起世子

熊本産スイカを今日も買っている
正直に生涯暮らすうさぎ小屋
出しゃ張っていつも荷物を背負ってる
門限が無いが小走りする日暮れ
まだ生きる保険の満期来るまでは

和歌山市　福井菜摘

おしゃべりが妙薬になる介護の灯
おしゃべりで沈んだ心ハイにする
いい人になろうとすればなお転ぶ
人の輪にとけて膨らむ知恵袋
地図にない路地でまあるい風に会う

和歌山市　福本英子

お隣のクロも漸く衣替え
つつましく暮らしていても震度五
焼き餅もやけぬ亡夫のラブレター
遠吠えの癖が一生つきまとう
待つことに慣らされました旅仕度

和歌山市　古久保和子

ぼんやりと目で追う車窓青田風
ツンデレの猫と暮らしを分け合って
ボキャブラリーのとても寂しい電子辞書
肩組んでみんな味方と思う歌
ジャングルの夢も見ただろはな子の死

和歌山市　堀冨美子

まだ行ける影が私の背なを押す
羨ましと云う友が居るマイペース
頑な老いに介護の温さ視る
フル回転右左脳呆ける隙がない
絶やすまい開き直ったこの笑顔

和歌山市　松尾和香

タブレット曾孫の成長嬉しいな
折折に孫と近場の旅に出る
適うこと適えられないのもわたし
無理しない生き方今日も良いひと日
八十路坂夢はいくつも残ってる

和歌山市　松原寿子

哀愁のトンネルを抜け夢描く
困難を乗り越えて来た日の自由
人生をクリーンヒットで謳歌する
曲がりくねったさだめへ霧が晴れてくる
てのひらに奇蹟の脈を確かめる

岩出市　藤原ほのか

どうしても母の味には及ばない
梅雨空にあじさい映えて根来寺
唄い継ぐねんね根来の子守歌
底力信じています町工場
ドン底を知っているから揺るがない

海南市　小谷小雪

甘いもの食べ沈黙の血糖値
執着を纏いフットワーク軽く
ストロボの光ホタルに御迷惑
不調より快調な日はゆるゆると
充電のくちばし高く高く上げ

海南市　堂上泰女

ブライダルの花束受けて泣き笑い
鈍感力増した夫の柔い杖
大和君思ったよりも普通の子
腹八分で生きているけど溜まらない
ゆっくりと花も愛でずに梅雨に入る

紀の川市　宇野幹子

子はすでに父の背を越す立葵
美しい二人でいたいイヤリング
バイキング皿には何も残さない
ほろ苦い昭和と仕舞風呂の中
それからが見えてはこない観覧車

紀の川市　北山絹子

ふと思うきっと地球も耐えている
内助の功覚悟の上で添うている
雑踏に迷い込んでる母の杖
ほがらかな人へ傾くやじろべえ
何かある父は無言のまま帰る

紀の川市　楠原富香

プライドを捨てたら肩が丸くなる
匙加減ひとつで変わる母の味
おはようの挨拶きょうも頑張れる
子が親を看取る景色も遠くなり
惜しまずに愛を配った母の旅

紀の川市　辻内次根

断層の微かな軋み猫の耳
約束のそれから長い月見草
側にいることしかできぬ側にいる
踏ん張ろう倒れるまではまだこの世
囀りの中を一気に日が昇る

田辺市　岡本昇

ともかくも日にち薬の病み上がり
じじむさいと言われぬように身嗜み
6Bを持つとまともな字が書ける
私利私欲捨てて身軽になりました
せめてもの休耕田の草を刈る

橋本市　石田隆彦

九条の保守こそ平和への極意
農園でカラスとＩＱを競う
投げ出せば今までの汗無駄になる
競馬場に一獲の夢無駄な夢
こりもせず高嶺の花に恋をする

鳥取県　石谷美恵子

苗たちが雨を味方に背伸びする
考えが一致する友宝です
もっと我儘言ってよ呆気ない別れ
神さまのときどきなさる不公平
蛙の子は蛙わが子を責められぬ

鳥取県　岩崎和子

伸び切った庭の木風に揺れている
サンルーム洗濯物の押し合いね
就寝の床で気になる咳の夫
九十歳越えた夫が箸を持つ
家事すべて息子がしきる有り難さ

鳥取県　西谷悦子

大地割る二葉も一緒生きてゆく
仲直り声掛けにくくケーキ買う
詰まるとこ偽善者ぶって生きている
流れ星祈りが途中消えました
日蔭でも雑草強く生きている

鳥取県　細田裕花

散歩道始業のチャイム流れくる
模様替えしてから捜し物増える
靴磨く明日の予定出来ました
ふところが深いのですね良い笑顔
日本の心絞れば藍の色

鳥取県　松川行男

ベルの音今は介護に促され
塾講師厳しさ違い子が学ぶ
歌だけで舟木一夫と肩を組む
同窓はたった一人と父は言い
早起きはテレビ欄からローカルへ

鳥取県　山下節子

地団駄を踏むのもこわい活断層
地団駄がタップダンスに見えてきた
若者が菜食主義になる不安
考えを変えたら視野がふえてきた
反対論ずばりと言えば角が立つ

鳥取市　池澤大鯰

バス停で救急車の音やりすごす
一時間　バス待ち合いで酔いさます
下手な泳ぎ見せかけにする芸達者
心臓手術息継ぎ正し散歩する
年とると癇癪玉が湿気てくる

鳥取市　加藤茶人

三日経ちてんやわんやの妻の留守
学歴とキャリアで離婚歴三度
衣食住その上何がまだ要るの
墓も建て葬式代も貯め元気
呆気ない父を負かした日の思い

鳥取市　岸本宏章

置き去りは虐待躾なら惨い
誰よりも自分に負けるのが辛い
ルビ振って下さい今の子の名前
そうなれば怖い一億総スマホ
アメリカの苦悩トランプさん担ぐ

鳥取市　岸本孝子

閉じた目がすべてを語るオバマさん
平和だな犬猫葬儀墓までも
何事もなく梅干らっきょ今年また
断捨離のおかげ流行の服を買う
大仕事区切りをつけて湯の宿へ

鳥取市　倉益一瑤

今日もまた歳を忘れる程遊び
人はみな哀しい笛を吹いている
リトマス紙わたしの罪が浮いて出る
大袈裟に泣いて女の勝ちである
古い家古いふたりが住んでいる

鳥取市　坂本とも湖

フクシマのペットへ飯が届かない
フクシマのペット飼い主五年待つ
美人への挑戦泥を塗りたくり
裏声の美声まんまと詐欺に遭い
予感通り今日はわたしの句碑が建つ

鳥取市　田中憧子

眼を手術休んでおれぬ母介護
仔うさぎが探検ずみの家の中
断水へもしやもしもと汲みすぎる
バーコード読めぬが信じ切っている
メダカ死ぬ誰も死因を知らぬまま

鳥取市　棚田大

言い訳は第三者にと澄ましてる
俺のミスまあいいじゃんと孫笑う
ドラマよりパニック事態勃発す
天罰と自然の猛威増えてきた
近頃は茶柱立つも喜ばぬ

鳥取市　谷口回春子

わが友はダンゴ虫だと孫の声
シベリアにさ迷う父の影偲ぶ
未知数の孫の力は無限大
向こう見ず口説いた美人今の妻
哀しみをそっと優しく喪服の袖に

鳥取市　永原昌鼓

子に注意されて自分の老いを知る
地団駄は介護予防になるらしい
腹八分食べても減らぬ体脂肪
決心をしてから迷う試着室
介護終え身体あちこちガタが来る

鳥取市　中村金祥

東京五輪ケチの嵐が収まらぬ
笛一つ刀に勝る武器となる
満天の夜空無数の列を見る
叱る子が第三者にも聞いてよと
さ迷うて結局帰る元の道

鳥取市　夏目一粋

ひらめいた積もり神様までが没
残り火の火種をソッと吹いてやる
蟻のデモ崩れることは無いだろう
煩悩を一〇〇にするまで生きてやる
無記名と言えど良心忘れない

鳥取市　西川和子

持ち上げて見ればかあるい玉手箱
六十年紙一枚に引き摺られ
ダイヤ婚紆余曲折の輝
友も元気お食事会の出来る幸
汗流し家計の足しに自家野菜

鳥取市　春木圭一郎

幸せの数だけ夢がふくらんだ
つきあえば腹の大きな人と知る
一仕事お腹いっぱい食べてから
踏み出せば案外できることもある
出来ないと決めているから何もせず

鳥取市　福西茶子

許されよ老いて番犬にもなれぬ
パソコンも私の脳もストライキ
一万歩あきらめ目指す七千歩
厄介を掛けてこの世をまだ生きる
私のどじょう掬いをご覧あれ

鳥取市　前田楓花

母の死を声を出さずに泣きました
もったのは二人の我慢あってこそ
癌告知まさかの坂で急カーブ
生き方を洗おう星の降る夜だ
赤を着る私の中の験かつぎ

鳥取市　山下凱柳

一度でいい枕を高くして寝たい
都合悪いと見ない聞かない口出さぬ
鏡見てDNAに愚痴もでる
年金者に増税延期良いけれど
高い地位つくと本性暴露する

鳥取市　吉田孔美子

お茶菓子をもらって帰るハイ寸意
あなたにもゲストの顔で来る花粉
筆順の正しさは今後廻し
適正なくすりも天命には勝てず
平和への掛橋はみんな正しい

鳥取市　吉田弘子

午前五時軒のスズメに負けました
温度差に敏感気配り鈍感
機転早い夫とのろまな組合せ
機嫌悪い時ほど雑事よく熟す
ゆったりと時間を告げる寺の鐘

倉吉市　猪川由美子

めまぐるしい世学び生きるの大変だ
猫被りも土壇場で性露呈する
すべては五輪言い訳と逃げ舛添氏
十八歳投票準備できたかな
ちょっとした言が謝罪の出来を左右する

倉吉市　山中康子

やわらかな風だ涙が込みあげる
裏を読む息子意外と頼りがい
いつからか親の意見は棚上げに
わたくしを知らぬ振りして皆把握
スマホパソコン私には用がない

米子市　後藤宏之

実権を渡したあとは黙ってる
変化して勝っても力士うかぬ顔
身内でも照れずにっこりほめてやる
上品をかなぐり捨てて必死です
斜め読みあと書きを見てとばし読み

米子市　後藤美恵子

いい風が吹くまで亀になって待つ
汗吸った田畑が荒れて泣いている
メールでの親子喧嘩は燃えてこぬ
熟年の離婚勇気か我が儘か
哀しい日共に紫陽花泣いてくれ

米子市　竹村紀の治

そう言えば今日が父の日だったのか
天引きをされて命がふわり浮く
生きているぞと節節が文句云う
雑踏のなかもスマホの不動心
アハハハと笑いで済ます消し忘れ

米子市　中原章子

子育てに手間暇掛けた頃思う
これからはなるべく長所見ることに
満席のコーヒー店でモーニング
解禁のアユの串刺しかぶり付く
馬車馬のようのめり込むものがある

米子市　成田雨奇

指なめてめくった紙が配られる
知らぬまに作った敵が白い眼で
他人の眼にぼくがどんなに映るのか
どっちでもない透明という逃げ場
踊るのが下手で三べん回ってワン

島根県　伊藤寿美

頑張った過去が少うしずつ光る
時々は尻尾も見せて如才無い
「下流老人」の言葉が歩く梅雨最中
「天皇語録」陛下も昭和生き抜かれ
竹に花咲いて九条揺れはじめ

松江市　小川注湖

春の道夢を描いて一歩踏む
この道を決めて背広の背を伸ばす
新ネクタイ締めて踏み出す春の空
みずすまし奇麗な水に身も清い
クラス会マドンナ来ないわけを聞く

松江市　藤井寿代

ひび割れてバラの匂いはもうしない
想い出の真っ赤に燃えた遠い橋
どんぐりになってのほほん生きている
根気なくのっぺら棒になっちゃった
うっかりをしまい忘れた大夕日

松江市　松本文子

オレオレ詐欺まだひっかかる人が居る
薔薇になど負けぬと生きる野辺の花
味方は去った骨粗鬆症になってから
元女優と職業欄に書いておく
うっかりと勝利宣言したカラス

出雲市　岸桂子

カタカナのメニューへ注文指でする
ノーモアと叫んだ夏を子につなぐ
決断の切手を舌でなめてはる
駄々っ子に似た夕立が通り過ぎ
幸せは今かもしれぬリンゴ剥く

出雲市　小白金房子

新ジャガの笑顔が売れる道の駅
青空がわたしの心写しとる
代掻き田話におりるおぼろ月
古き縁心をつなぐ供養酒
緬羊の毛刈りハサミを研いで置く

雲南市　松本昌

次は俺同級生の訃報聞く
一隅を照らす人あり里の道
伝説はなぜか美男と美女ばかり
本一冊我が人生の師となりぬ
ふるさとへ納税出来る幸思う

紫陽花の艶を妬いてる葱坊主
あじさいに御座す蛙の悟り顔
延命の○×ペンが動かない
愚痴いわぬ花にたっぷり水をやる
梅ラッキョ漬けるばあばの腕まくり

岡山市　池田たか子

ラーメンを啜り終活考える
箸置きのいらぬおかずは母の味
まん中に無理に入ってくる次男
フウーフウーして紅茶を母に供えてる
「今が幸せ」口癖にする自覚

岡山市　工藤千代子

お布団の上げ下げだけをする日課
そよ風や皐月がポッポポと開く
ホトトギスなどに早起き負けてない
家建てて庭にネムの木植える夢
躁として鬱としてあじさいの藍

岡山市　丹下凱夫

ゴミの中宝があると業者来る
何事もうまくなるのは二十年
上手な句作れないけど私の句
「帽子ぼうし」母の口癖跡を継ぐ
小言でも聞いてみたいな母の声

岡山市　前田恵美子

Ｌｏｖｅ ｐｏｗｅｒ君にメロメロする今夜
蝶と蜂恋のバトルは止まらない
地平線走る命が尽きるまで
山となり恋のアタックチャンス待つ
青のりをいっぱいかける君が好き

笠岡市　藤井智史

青空はにぎり飯までうまくする
身を飾るよりも心に錦持ち
アメリカのジョーカーみたいトランプ氏
草むしり楽しむほどの狭い庭
休肝日とって体の声を聞く

広島市　岸本清

ひまわりの迷路フットワーク軽く
健さんの映画もいちど惚れなおす
花菖蒲恥ずかしそうに手をつなぐ
紫陽花のためいき聞いた五月晴
明日への夢を宿して花は散り

竹原市　石原淑子

ゆっくりと雨の日雨の洗い物
流れるように私の一日は終る
姿見の何か言いたい顔である
夫ゴルフ私は大会趣味多忙
一進一退薬少ない方がいい

竹原市　岩本笑子

宇部市　平田実男

勘当した子が今日も夢に出る
四季の花咲かせてウエルカムの庭
もみ手する男が小さく小さく見え
あちこちの痛みなだめて八十路坂
無駄骨もいつか血となり肉となる

府中市　藤岡ヒデコ

五度の差の山の空気は清々し
一泊二日あっと言う間に終りです
バスと徒歩行動範囲せまくなる
脳トレのつもりでクイズ解いてます
わたしにも私なりのスケジュール

防府市　坂本加代

生き様が世に知れ渡る訃報記事
老人も子どもを守る抑止力
忙しい時間をくれる人が好き
都合などどうにも出来る君となら
手が伸びてまた引っ込める気の弱さ

東かがわ市　川﨑ひかり

役所とはなんと手間暇かかるとこ
まっ白な時もあったよなあ軍手
何もかも丸投げをして夫が逝く
手の内に夫の温みがまだ残る
一本の釘にも母は無駄がない

西予市　黒田茂代

このわたくしがまさかの救急車
我慢するのもほどほどと思い知る
主治医パワー顔見るだけで出る元気
八階の病窓からの鳥瞰図
早期退院神のご褒美だと思う

松山市　古手川光

終ると淋し聞くとうるさい蝉しぐれ
一億総活躍嗤ってるアリ
デパートの中威張ってる外国語
未練とは怖い昂じてストーカー
日本の平和築いた人柱

松山市　宮尾みのり

合宿行事一皮剝けて成長期
雑草も外国産が大手振る
改良も重ねた花が造花めく
免許証返上庭も覇気が無い
どっちもどっちそう思ってる他人の目

高知市　小川てるみ

新緑のパワー負けてはいられない
選ぶなら声に力のある男
萌え出ずるいのち促す春の雨
葉桜になって静かになる名所
農業もいいぞ帰って来いという

高知市　小澤幸泉

ペンテコステ分からないまま両手出す
新緑の闇が私を大人にす
泣きながらエンピツ削りまた削る
鈍行が歩む夫が頼もしい
嫁いでもまだおっぱいを飲んでいる

唐津市　坂本蜂朗

強い揺れ愛の度合いが試される
妻の目が無くて宴に花が咲く
趣味の会周りは女性若返る
とぼけ顔して争いの外に出る
木刀を振り自己防衛の意志表示

唐津市　山口高明

町内の弔問拒む家族葬
不祥事も訓告だけで済む官吏
八月の海でわたしを見失う
抜け殻のわたしを写す水鏡
隠しても身振り素振りに出るふたり

熊本市　杉野羅天

W地震が自分史に刻まれる
義援金現場の民に届かない
それ以来学者が消えた大地震
清正公にある復興のヒント
野の花に感動をしてそして闇

（前月号）神戸市　山口美穂

新茶の香脳はしあわせ指数上げ
家庭菜園愛の視線が分かるよう
夏草の茂った老いの庭もよし
葉桜のみどりさまざま深呼吸
逝く父を共に送った藤の花

第66回 岸和田市民川柳大会

日　時　**10月16日(日)** 12時開場
会　場　岸和田市立福祉総合センター
会　費　2,000円
（軽食・参加賞・大会誌呈）

事前投句
「見　　事」石田ひろ子 謝選
締切日　9月30日必着
投句先　〒596-0067
岸和田市南町9-17-818
藤井　康信 宛

兼　題（各題2句）**締切** 13時
「躍　　る」萩野　浩子 選
「スポーツ」嶋澤喜八郎 選
「触 れ る」武本　　碧 選
「のんびり」日野　　愿 選
「　水　」吉道航太郎 選

主　催　**岸和田市**
岸和田市教育委員会
参加団体　**岸和田川柳会**

あかつき川柳会 創立15周年記念川柳大会

と　き　**9月19日(祝)** 12時開場
ところ　エル・おおさか
大阪市中央区北浜東3-14
（地下鉄谷町線・京阪電鉄「天満橋」下車5分）
会　費　2,000円
（欠席投句は1,000円）
懇親宴　4,000円
（希望者・定員50人）
兼　題　各題2句　**締切** 13時

特別投句
「気 合 い」　岩佐ダン吉 選
（8月10日締切）
「本　　物」　植竹　団扇 選
「や が て」　天根　夢草 選
「向き合う」　長島　敏子 選
「ユニーク」　西　美和子 選
「どっこい」　新家　完司 選

川柳塔の川柳讃歌 ⑭⓪

評論家　木津川　計

本当のわたしが湯船から出ます

鴨谷　瑠美子

風呂屋の番台に男は憧れた。だからノゾキが絶えない。そこへ瑠美子さんが湯船から出てくるのだ。寺田寅彦が随筆で書く「『美しく見せよう』という動機から化粧が起ったかと思われるが実はそうでないらしい。むしろ天然自然の肉体そのままの姿を人に見せてはいけない。そうすると何かしら不都合なことが起こるという考えがその根底にあるのではないかと疑われる」。だから瑠美子さんも化粧し装う。本当の瑠美子さんは謎のままだ。

余白の隅に間借りをさせてくれますか

太田　昭

脂ぎって厚顔のイヤな男もおれば「余白の隅に間借り」して待ってばかりに生きる「斜陽」の主人公みたいな人物も世の中にはいる。「幸福の足音が廊下に聞こえるのを今か今かと胸のつぶれる思いで待って（中略）生まれて来ないほうがよかったとみんなが考えているこの現実。（中略）生まれてきてよかったと、ああ、いのちを、人間を、世の中を、よろこんでみとうございます」。世の中にいるこんな人間を昭さんは同情して詠んでいる。

ロボットに情けと美学などはない

坂本　とも湖

プロ棋士が将棋ソフト、つまりロボットと戦う。今年山崎隆之八段が二敗、完敗した。「コンピュータは冷静です。プロ棋士の場合、そこはやはり人間ですから、局面によって感情に揺れが起こる。それがコンピュータにはなく、初手から終盤まで一定のリズムが続きます。その点が無気味なところです」と、ある九段が語る。その無気味なロボットに羽生善治名人が対戦するという。人間の名誉を壊さぬために、羽生さん、止めた方がよい。

晩学に今更という壁はない

佐々木　満作

萩本欽一が昨年74歳で駒沢大学仏教学部に入学した。正にこの句の通り「今更という壁はない」。晩学の生涯学習力には次の力があると私は考えてきた。①人間を平等にする。②友人・仲間ができる。③若さを周囲に広げる。④男は世話焼きに、女はおしゃれになる。⑤講師の資質を高める。⑥孫に尊敬される。⑦張りをもたらす。以上七つの力だ。満作さん、古人の言です。「壮にして学べば老いて衰えず、老いて学べば死して朽ちず」

続編へしっかり四股を踏んでおく

安土　理恵

女相撲もありはするが、理恵さんが四股を踏んだらどうなるか。いまの片岡仁左衛門が孝夫だった頃、花道の七三へ馳けていき、裾をまくってスネを出したら、傍に座る女の客が「まあ、細い足……」。以来すっかりオジケづいたが、「かさね」の与右衛門、「源氏店」の与三郎、「助六」などみんなスネを出す。細いの、白いの、言うてられん。さて、理恵さんの足は細いか、太いか、白いのか…。

触診する老医が好きで行く医院

伊藤　寿美

昔の診察は思えば牧歌的で人間的だった。胸に耳を当てたという。それから聴診器になり、心音、呼吸音、血管雑音なども聴く。指での打診もうまいものだったが、一人前の医者になるには二十年を要した。ところが今はレントゲンやデータの数値で診断をくだして、触診よりはるかに正確なのだと聞く。遠からず血液一滴であらゆる病名の判る時代がくる。寿美さん、掛かっている老医は最後の触診医です。係わりが長く続きますように。

新川柳鑑賞 (54)

麻生　路郎

書道展竜かみみずかはたシミか

（花　村）

この句は近頃の書道展を観ての感想であるが、従来の書道の概念からは斯うした皮肉が生まれないわけにはいかぬのである。

お尻へ墨を塗って、床や紙の上へ、尻もちをつくような肉体派の書もあると聞くから、竜かみみずかシミか判らぬようなのは、まだまだいい方なのであろう。芸術の奥なんていうものははかり知れぬものだと云っておこう。

手　習

ハンマーより筆の軽さに肩がこり

（三　歩）

労基法がどうの斯うのと一人前の口は利けても、手紙一つ書けない金釘流ではと、たまたまの休みに手習をしたのである。ところが、ハンマーよりも軽い筆なのに、肩が凝ったので、つくづく感じたのである。ハンマーと筆の比較で、人物なり心境なりを巧みに表現したところにこの句のよさがある。

こけし皆目鼻の位置がチト變り

（初　甫）

あのおどけたような、眼をくりくりさせている、あどけない顔のこけしの目や鼻の位置が、それぞれ少しずつ変わっていることは誰もが発見するが、それを斯う巧みにキャッチして見せた手腕は敬服に価する。

草月流ほんとの花が見たくなり

（多久志）

草月流の生花と云えば、よくよく木切れや針金やガラスのかけらが、アタマにしみ込んだものと見え、「ほんとの花が見たくなり」と草月流の生花をする人の中にもこの句のような人も出て来るであろうと皮肉を飛ばしているのである。家元から芸術の何たるかを解しないと云って叱られるかも知れないが、確かにコレも一つの観方であるから草月流も他山の石として反省する必要があるのではなかろうか。

順番に足袋の白さのにじり口

（きさ子）

茶室のにじり口から這入る女の姿の特に足袋の白さが際立って目立ったのを印象的に描写した句であるが、作者の繊細な神経にしてはじめてとらえることが出来た句だと云えよう。私としてはにじり口を詠んだ句にはじまて接したので非常に興趣を覚えた。

よし来たと博士が踊る奴さん

（豆　秋）

集会が済んで宴席にうつった。宴たけなわになって、かくし芸の指名がはじまる。博士さんに白羽の矢が立つ。

「よし来た」

とばかりに博士さんが気軽に立って、奴さんを踊ったと云うのである。平素の気難しい博士と宴席のさばけた態度の博士の対照に興味を持ったのである。同じ博士でも医博には多芸多能の人が多い。奴さんぐらい踊ったからと云って多芸多能とは云えぬが、奴さんを気軽に踊ったさばけた態度が医博を思わせる。芸の巧みさは問題ではない。

名人の踊り扇子が槍に見え

（七面山）

黒田節を詠んだのであろう。名人芸と云うものは、扇子が槍に見えるだけではない。あらゆるものを生かす力を持つところに名人の名人たる所以があるのである。この句は単なる名人技の写生句であるが、句に於ける語彙の技巧は扇子が槍に見える以上のものであることを知らねばならない。

自選集

小島蘭幸

散髪をしただけ父の日は去った
僕は右足妻は左足が疼く
七十になったら健診に行くか
保育園では幅を利かせているらしい
鶴彬のＤＶＤを観よ風よ

仁部四郎

休日になぜならないか十五日
しみじみと国家をうたう十五日
ああ三百十万人の十五日
スイッチを切りかえたはず十五日
一心に平和を祈る十五日

前たもつ

鮮明な記憶の中に八一五
七歳の知恵神さまにみちびかれ
おたまじゃくし生きていました菖蒲園
大阪城昔にかえる土の道
句読点ひとまず打って七回り

三宅保州

炊くことを忘れてました無洗米
公衆電話お前も忘れられたのか
美しい嘘が秘伝の隠し味
海征かばああ鎮魂の花束よ
引き返す勇気があればこその山

宮西弥生

みじん切り女ひとりの生きる音
もの忘れこれもあれもよ　神の慈悲
ばれそうになれば口笛吹いておく
クイッククイックスロー昔昔の青春譜
ふくらんだ蕾の明日がこぼれそう

八木千代

呟く

夜明けまで昔の街をぶらり旅
朝の水飲む　現実が待っている
出来ていたことが出来ずに涙ぐむ
うっかりがもとで半月ほど鬱に
諦めるべし枯野のきまりなんだから

両川洋々

基地抱いたままで平和を説くなかれ
はした金撒いて地方だ創世だ
死に方を選ぶと僕は腹上死
男遍歴ぎっしり詰まる火のページ
オキナワの民意平和の二字に尽き

エリエールに噂包んで流すべし
みなの衆アホになったら楽でっせ
ハルカスは自殺するには高すぎる
刎頸の友か雀が濡れている
夏祭りすんだら金魚よく笑う

板尾岳人

愛想いい犬も識ってる好きな女性
陽の昇る男性の横は賑やかだ
うっとうしいような美人の素れ髪
蔵を出た日記は愛を浮き彫りに
冠木門にいわくありそな女性が住む

林瑞枝

白　ピンク　黄　細々並ぶプランター
雨に濡れ　元気いっぱい若みどり
小花開く　急に華やぐベランダよ
一輪でも命かがやく吾亦紅
吾亦紅　一輪の朱のよろこびよ

奥田みつ子

転ぶ度視界が広くなってくる
慰謝料の代わりへソクリしています
ひらがなの固い部分はチンをする
生きているだけで税金取られてる
人はみな同じ最後は灰になる

川上大輪

遠い日の話が弾む桐の花
花は蝶に蝶は花に慕われ
どの種子もみんな大志を抱いている
子ら伸び伸びと天を突く松の芯
もう高さ競わぬ森の老樹です

斉藤劦

窓硝子ピカピカにして「みどりの日」
遠くから見ると別嬪さんばかり
行きつけの酒場貧しい町の隅
肩組んだ酔っぱらいには近寄るな
もう誰もおんぶしてとは行って来ぬ

新家完司

年金の枠で平和を謳歌する
歳のせい私の頭アメリカン
肩パットはずして見える裏おもて
涙するハグに無言の歳月が
ジューンブライド傘寿招待する身内

津守柳伸

夾竹桃平和はいいと揺れている
蛍舞う寿永の風がどこからか
地元紙に祇園会の記事増えてくる
叱られた廊下校名変わっても
落ちつかぬ日をくりかえす梅雨の部屋

都倉求芽

人生双六　八十五歳ひと休み　土橋　螢

珈琲の味にも天地人がある

年齢がひとつ大きくなった春

田を植えて日本国中みどり色

悪人が仏の道をまっしぐら　西出　楓楽

時間とや時に味方で時に敵

長男が病むと腑甲斐のない母で

ご自由にどうぞと神に見放され

運命の神どんでん返しすきらしい

越えられぬ試練を神は与えない

文化祭吹田市民川柳大会

日　時　**9月25日（日）**　午前11時開場
各題２句連記
投句締切　12時30分

場　所　吹田市文化会館
メイシアター 3階　レセプションホール
梅田から北千里行で約15分
（阪急吹田駅西口前）

宿　題
「　灯　」　吉川　哲矢　選
「連 想 吟」　竹森　雀舎　選
「ほっこり」　荻野　浩子　選
「回　る」　池　森子　選
「　頭　」　天根　夢草　選
「こ と ば」　西　美和子　選

会　費　1500円（秀吟賞・軽食・大会誌呈）

主　催　吹田市　吹田川柳会

第50回記念　井笠川柳会誌上大会「藁」

課題と選者（3選者による共選）
「苦　手」　蔀　帆子・毛利きりこ・小澤誌津子
「喧　嘩」　杉山　静・浜　知子・西出　楓楽

応募要領　便箋または所定の用紙に各題2句を列記し、郵便番号住所・氏名・柳名・電話番号・所属柳社を明記し応募料とご送付下さい。

応募料　1000円（定額小為替または現金書留）発表誌送付します。

締　切　**8月31日（水）消印有効**

投句先　〒714-0081　岡山県笠岡市笠岡2289
井笠川柳会　電話・FAX　0865-62-6200

主　催　井笠川柳会

第14回 島根県民文化祭
しまね文芸フェスタ2016
島根県川柳大会

会　場　江津市総合市民センター　1階大ホール

日　程　**9月18日（日）**

時　間　13:00～16:30　**出句締切**　13:15
開　会　14:00　**披　講**　14:15

参加費　1,500円　**欠席投句料**　1,000円
（小為替可、切手不可）

投句先　〒699-4221 江津市桜江町市山468-5
渡辺　康乃（TEL 0855-92-0708）
お弁当(600円)要予約(9月5日迄に投句先へ)

投句締切　**8月20日（土）必着**

兼題と選者　各題２句吐
「輪（リング）」　新　家　完　司　選
「　風　」　熱　田　熊四郎　選
「　水　」　奥　田　勝　子　選
「　人　」　石　橋　芳　山　選
「　恋　」　柳　楽　たえこ　選
「　歌　」　眞　野　呑　舟　選
「　福　」　佐々木　紀美枝　選

第30回　堺市民芸術祭川柳大会

と　き　平成28年9月11日（日）
12時30分開場

ところ　堺市立栂文化会館 3階　第1講座室
堺市南区桃山台2-1-2
℡ 072-296-0015
（泉北高速鉄道　栂・美木多駅より3分）

参加費　1000円（発表誌呈）欠席投句拝辞

宿　題　各題２句　**締切**　13時30分

「オフレコ」　松本　柾子　選
「きびしい」　岩田　明子　選
「　訛　」　村上　玄也　選
「　肉　」　三宅　保州　選
「二　番」　天根　夢草　選
「ねじる」　嶋澤喜八郎　選

連絡先　岩田　明子（℡ 072-221-5296）
〒590-0018 堺市堺区今池町6-6-15-602

主　催　堺市文化団体連絡協議会・堺川柳会

富田林市民文化祭
富柳会　第66回　川柳大会

と　き　9月17日（土）　正午開場

ところ　富田林すばるホール２階　小ホール
近鉄長野線　川西下車　徒歩8分

会　費　1,５００円

課題と選者　各題２句　**締切**　午後１時

「　道　」　川端　一歩　選
「　紅　」　太田扶美代　選
「不　明」　山岡冨美子　選
「　列　」　山田　順啓　選
「磨　く」　西　美和子　選
「途　中」　池　森子　選

懇親宴：4,000円（希望者のみ当日受付）

問い合わせ：池　森子（℡ 0721-25-0603）

主　催：富柳会・富田林川柳協会
富田林市・富田林教育委員会
富田林文化団体協議会
（公財）富田林市文化振興事業団

温故知新

『高杉鬼遊川柳句集』から

ヘアピン一つの女神の忘れ物
国守る予算むかしもそうでした
裏町に住むキリストはおんな好き
コロッケを洋食として貧しかり
水枕やさしい言葉ばかり聞く
無神論熱い涙はもっている
父という悪い手本が欠伸する
決断をするのはいつも妻である
生魂へお参りでないふたり連れ
三吉がまだ生きている新世界
三八銃わが青春は弾丸の下
善人も悪人もない自動ドア
進まない時計を持っている政治
警官は見えぬところに立ちたがり
姑はいい人でした通夜の席
たこやきが好きで大阪生まれです
三月の税務署へゆく寒い朝
おんなにも階段があり銀座ママ

川上大輪選

大阪市　髙杉　力

目立つのが嫌でベースを弾いている
ダブルフォルト夏の陽射しのせいにする
花の名が少し分かってきた老後
一日の半分くらい探し物
楽しみにされ始めてる誤変換
徒競走トップに見せるトリミング

尼崎市　清水　久美子

大ジョッキあんたはうちの味方やわ
はぐらかしてあげよう立場なさそうや
おごったる言うからついて行ったのに
目測をあやまり松葉杖をつく
食材が良けりゃ美味いに決まってる
深入りをしてトンネルの中に居る

大阪市　田中　ゆみ子

梅干しも子も肝心な塩加減
暗黙のルールを嫁がわやにする
成長の跡赤線のコンサイス
不便さを楽しむ星空のキャンプ
君が好き君の御飯がもっと好き
妥協するばかり我が家の民主主義

西予市　西田　美恵子

天辺の花は一番先に散る
レシートに叱られそうな無駄を買い
乳房病んでも動く手がある足もある
不用意な言葉送ってからの風
女も平気で胡坐をかくという時代
額縁に入れたいような子の笑顔

山口市　中前　幸子

手を逸れた毬の行方を追い掛ける
落ちた太陽ダリの時計が動きだす
陽炎ゆらゆら鬼女伝説に触れながら
砂丘歩いてこころの錆をみな落とす
欲みんな捨てると風になれそうな
時間が止まる麻酔科の堅い椅子

三原市　鴨田昭紀

真っ直ぐな気性で曲線が描けぬ
波風は立てぬ律儀なイエスマン
エンドレステープが回る立ち話
人間の住んだエリアが朽ちていく
舞台終え孤独に戻るコメディアン
禁酒禁煙また繰り返す誓約書

大洲市　花岡順子

カラフルな傘に元気をもらう梅雨
夏野菜豊富な里でまた太り
首と背に私の年が書いてある
無礼講だけどやっぱりある上座
私より優雅施設にいる夫
折り返し過ぎたころからガタがくる

横浜市　川島良子

模様替えしますわたしと夏ギフト
楽な方選んでからの下り坂
テープ切る孫の笑顔を巻き戻す
シナリオを書き換えながら生きていく
もう少し女でいたい初夏の風
権力を握り仮面がズレてくる

静岡県　鳥沢無牛

素っぴんで勝負しているおばあちゃん
戦争に反対大河ドラマ観る
安定剤飲んで休戦しています

缶コーヒー飲んでぶらつく魚市場
引力と遊び疲れた流れ星
水晶が中途半端な答え出す

松山市　栗田忠士

骨のある男言い訳などしない
強かに生きてアワダチソウでいる
老化とはこんなものかと老いの耳
老化です慌てることはありません
さっぱりと脱ぎ捨てました隠れ蓑
ちぐはぐのはぐの辺りにある答

北九州市　小松紀子

体力は落ちたが気力で抗う
他人ごとではない活断層の上
しないのではなく出来ないのです歳
亡夫がいるあの世とやらを想像す
よっこいしょ気合充分ベッドから
友が逝く笑顔をのこし友が逝く

瀬戸内市　宮宅比佐恵

一杯の番茶で弾む裏ばなし
お互いに頑張ろうネの電話だけ
笑いましょ明日には明日の風が吹く
財産のないのも平和遺産分け
先ず酔った振りしてこの場逃げておく
星一つまたたき亡夫の笑み浮かぶ

おしゃれして夏の真下の車椅子
宙ガール火星のロマン盛り上がる
五月晴れ一人舞台の花菖蒲
鈴の音ハンディ越えてゴールする
路地裏の小雨がうたう愛の唄

札幌市　斉藤宏子

ゲリラ雨何をそんなに怒ってる
気が付けば暦が半分さようなら
どう見ても多弁な方が負けていた
電子辞書から取りだす堅い漢字
逝く人を時計の針は振りむかず

登別市　小林碧水

嘘吐きの世界に白い色はない
ストレスに触れると燃えてしまう指
約束を三日で破る乱気流
ガリバーが踏んでいましたアリの道
餌付けしたノラが時々友連れて

弘前市　吉川ひとし

朝ドラの後で通院語り合い
金曜のチラシは妻の起爆剤
五十年すぎた記念日時効めく
気がつけば大きくズレている歩幅
ブランコのように揺れ出す消費税

塩竈市　木田比呂朗

二合炊き今日から一人だいじょうぶ
まだまだ逝かぬ補聴器で聞く艶話
君の住む町へと延びる虹の橋
ブナの森水は命と貯めたがる
お待たせと今日がのこのこやって来る

男鹿市　伊藤のぶよし

隠れ里富士湧水にチャイニーズ
リニアカー狭い日本をどう走る
出番です麦藁帽子サンダルの
たらの芽が恋しい山路過疎となる
高原のハイクに濃霧通せんぼ

松戸市　山下明子

弾む毬信号無視し遠ざかる
聞いてない自慢話が途切れない
春ですね好きなところへ弾む靴
微笑みと間違えられた苦笑い
メッキとも知らず私の宝物

八王子市　川名洋子

はっけよい社会保障と消費税
期限切れならないようにねじを巻く
頑張りの糧になってる子の笑顔
巻き戻しすれば消したいことばかり
アラいやだ皺が友達連れて来た

横浜市　巖田かず枝

一難が去って安堵の鎧脱ぐ
夏草に包まれ恋も背伸びする
畦道にドレスアップの彼岸花
名物に本家元祖が譲らない
温泉が浮世の垢を掛け流す

豊橋市　藤田千休

打ち上げた夢が路上に落ちてきた
似たような傷見せ合って酒二合
ダブルリーチかかったままで時間切れ
ゼロという形が妙に温かい
通行人Aで喜劇の幕下りる

大阪市　平井美智子

戦争をしたい人などいやしない
伊勢志摩の六百億は無駄金か
梅雨入りと聞いたとたんのむし暑さ
法の網ぬけてうらぎる都民の目
政治家は嘘を平気でつき続け

大阪市　松田聰

窓に影生きてるサイン両隣
吾に似た後姿の娘も五十路
お隣の猫も女房も噂好き
よそ様はどうあれわたしガラケーで
この曲が着信音か顔を見る

大阪市　横山里子

移り来た街に残っている昭和
老い忘れ疲れあとからどっと来る
したいこと多くともかく昼寝する
手を振って軽い別れにしてしまう
まだ生きて老いの僥倖迎えよう

堺市　小林若芽

精彩をまだまだ放つ老いの意地
小さくても掴んだチャンス逃さない
手を振ってあしたまたねと元気な子
自分史もまだ道半ばこれからだ
もう今さら人目気にする歳じゃない

堺市　羽田野洋介

雑魚なりにきりりと泳ぐ老いの日々
月明かり笛が聞こえるきっと亡妻
アンケートおまけの丸を差し上げる
さまざまな生き方学ぶ趣味の会
長生きの極意はずばり恋心

池田市　上山堅坊

ポケットの飴玉ふたつあの子待つ
白玉冷しデイサービスの母を待つ
長の字の肩書き消えて荷を下ろす
待ちぼうけ紫陽花見蕩れ気にならず
ついスマホ会話不足が覗き見る

泉大津市　助川和美

若いつもりに実年齢が邪魔をする
ウォーキング馴染の顔が増えてゆく
お湿りを貰う私も紫陽花も
老いの道母の通った道にいる
腹八分上手に出来て老いて来た

貝塚市　吉道　あかね

おしゃれして若いつもりの妻元気
思うまま手足動いた時も有る
おだてられ買った洋服着ないまま
ナイターが無言の夕餉ささえてる
年寄りを手玉に取って売るサプリ

河内長野市　穂口　正子

抱き合う長いしこりの原爆忌
介護士の傘は大きく二人用
ロマンスを夢見た軒の雨やどり
しゃべりすぎ娘のサイン何かある
天気痛降雨予報は膝でする

河内長野市　森田　旅人

ひらがなの言葉を紡ぐ風である
まったりと風と白猫いる暮らし
振り向くと優しい風がついてくる
トンネルを抜ける気配の軽い風
私を消す方法を風に問う

岸和田市　宮野　みつ江

靴下を繕う静かな時流れ
げんげ野に大の字に寝た遠き日や
夕闇に白あじさいの灯りたる
性善説信じたいけど深い闇
少年の面影残るオバマさん

豊中市　荒巻　夢

本物を見抜けなかった気象庁
若いなあ世辞と思えどゆるむ頬
店の隅迎えに来てと忘れ傘
AIがビッグデータで問を解く
また昇進背が遠くなる同期生

豊中市　上出　修

惚けてない生まれついての天然だ
咲きほこる花は季節を忘れない
我をはらず負けるが勝ちの処世術
母白寿集うみんなも高齢者
しあわせは手からこぼれる砂に似て

箕面市　大浦　初音

平和とや浴衣が群れている花火
露草の一輪朝の膳和む
絵手紙を飛びだしてきた滝の音
わたくしを焦がして夏の日が沈む
遠い日の線香花火祖母がいる

箕面市　中山　春代

男ならセコイ答弁止めなさい
戦後七〇年親離れ出来ません
雨降る日妻の鼾に魘される
その日暮しパナマ文書が恨めしい
僕のグルメ二合有ればそれで良し

八尾市　前田紀雄

ペダル漕ぐ気分次第の回り道
銘柄は問わぬ楽しい酒の席
ウイニングボールは母の手に渡る
締切りへやっとやる気の顔になる
たくさんの道を覚えた三輪車

神戸市　玄番美恵子

矢印があれば逆へと曲がるヘソ
水虫の騒ぐ季節になりました
日本の義理人情も無駄じゃない
八十年つけた仮面は皺だらけ
叱るより両手で包む反抗期

神戸市　細川花門

虫の声詩人にさせた秋夜なが
縄のれんおなかの虫が騒ぎだす
時どきは深みにはまるお人好し
深追いをするから友が遠ざかり
ゆっくりと渡って見たい天の川

神戸市　山根弘子

せこいとは公私混同都知事流
尻尾振る愛想笑いの意気地なし
九条は平和の基本護憲論
黙る民声なき声の底力
怒り肩男は黙して意思表示

川西市　日野岡和之

夏野菜いろいろ植えて忙しい
まだ生きる夢を頂く孫がいる
うわさ話片方できすぐ忘れ
親友が笑い袋を下げてくる
菜園はいやしてくれるオアシスだ

篠山市　永井かほる

大空を巡る夫婦の観覧車
三味線を習い始めて口上手
ケータイは電話出来ればいいのです
便利さが過ぎて不便になりました
情報が多く決断鈍らせる

三田市　九村義徳

空高く飛んでもみたい籠の鳥
子の躾愛と厳しさ悩む親
活断層あっちこっちで暴れ出す
震災で終の住処も振り出しに
未知数と無限大には夢がある

三田市　多田雅尚

三田市　谷口修平

認知テストものは試しと受けさされ
父越えて余生おまけと思う日々
坊さんの木魚で踊る三歳児
定年後妻に寝顔は見せてない
紛争で色褪せている世界地図

三田市　東内美智子

ジューンブライド一人の孫にかける夢
スリッパの足音みたい店たたむ
手毬ずし頬張りやすくよく喋る
傘の中庇ってくれる子と歩く
災害の痛手受けても先祖の地

宝塚市　太田としお

悪い癖くどくどくどと御老人
諦めるこれも大事なことである
新聞に真実ばかり書いてない
前向きな人に神様味方する
オフレコを嗅ぎつけつくる週刊誌

宝塚市　丸山孔一

京都では只の豆腐も出世する
多国語が京都四条を闊歩する
迷う世に迷い無く咲く立葵
若葉風声頼もしい通学路
何食べる問う妻に問う何出来る

奈良市　髙橋敬子

眼鏡二ついつもどちらか消えている
十八歳大事にしろよ選挙権
父さんと犬にも子にも言う息子
忘れてもいいと何度も辞書をひく
金魚売り予定どおりに二匹まけ

和歌山市　平田元三

何時の間に妻に染みたか母の味
失敗は次への肥やし無駄でない
型崩れした野菜でも同じ味
太陽で季節の味になるトマト
審判がノーだと言えば通るノー

和歌山市　福呂秀子

駐車場車探しに歩数伸び
出なかった名前ひょっこり思い出す
紫陽花が涼しい色で安らぎを
人と人行間を取り和を保つ
ルピナスと同じ背丈で通る子等

倉吉市　中村毅

増税の苦情税務署受け付けず
賭け事は宝くじだけ後はなし
大安に買ってもくじは当たらない
政治家は国の将来より目先
梅雨晴れ間親子のシャツが戯れる

米子市　野川宣子

すんだ目が大人の狡さ見抜いてる
透明度砂丘ラッキョは日本一
子育ての他人まかせはだめですよ
孫十五歳他人行儀な受け答え
うっかりが続いて認知疑われ

米子市　見山温子

介護終え手持ちぶさたの日を過ごす
一言が過ぎ険悪な長い夜
物干しをだんだん低くする背丈
膨れっ面三度の食事向いあう
何もないが旨い漬け物三度出る

松江市　中筋弘充

喜寿祝いで二回は行ける縄のれん
黙祷が済むと笑えるクラス会
爺ちゃんが二の足を踏むバイキング
介護4の義母に笑顔で励まされ
肩書きは話題にしないクラス会

出雲市　黒目英男

追い風に一気呵成の走り込み
柳友に背中を押されあわてる
愚痴ひとつこぼして皆の仲間入り
そよ風が心地よい明日連れてくる
敵味方味方につけて世を変える

岡山県　山縣のぶ子

辞書と地図座右においてよくしゃべる
毛染めしただけでルンルン蝶になる
雨後の草パワー全開生えまくる
どうせなら意地悪ばばを演じ切る
躓いた小石が嗤うごもっとも

岡山市　藤成操江

日めくりを溜めては破る日は西に
柄にない言葉を出した嫌悪感
原点に戻れもどれと夜の鏡
正論を弾いてしまう多数決
あれこれを語れば今が雫する

瀬戸内市　東槇ますみ

赤を着て街へ出かけてみるスリル
昇進へ小石一つが邪魔をする
夢ばかり食べて恋人まだできぬ
赤いバラきれいな嘘をつきたがる
終章のドラマに咲かす赤い花

府中市　岸田武

空耳に返事かえしてひとり言
捨ててあるアンパンマンの三輪車
薔薇誉めて立ち去り難いことになる
バス停に吊り下げてある忘れ物
どこにでも行き着く覚悟老いいかだ

山口市　青木隆子

悩みあり思いがけないダイエット
回り道無駄にはならぬ今の幸
喧嘩した友に会いたくなる月夜
手間かけた野菜を虫が丸坊主
蛍の火消して車が通り過ぎ

下松市　有海静枝

お詫びするマニュアルどおり九十度
犬猫にだけは好かれる人見知り
なんとでも言って下さい透ける風
不覚にも化粧がよれる涙垂れ
甘えなど捨てるつもりの強い語彙

松山市　郷田みや

平凡がいいと背もたれからの声
いつからか敵と味方になった空
メダカの顔笑ったように見えた朝
一つずつ運んでいけばいいのです
カーテンが揺れて私も揺れている

松山市　神野きっこ

故郷の灯り傷口そっと舐め
裁縫も料理も上手母八十路
哀愁を唄っています雨蛙
専門書バッサリ捨てて影がない
定年後ソロバンはじく妻になる

今治市　渡邊伊津志

急性疫痢状の下痢十日間（一号被爆五句）
兵隊さん痛いよ水をつかあさい
爆風で堀に落馬の部隊長（渡辺大佐）
黒い雨続いた記憶鮮明に
広島のあの日の雲が夢に出る

佐賀県　真島久美子

ミュージカル風に哀しみ乗り越える
プライドというお粗末な物語
ガラクタの中で私を輝かす
この人もダウンロードをしておこう
衣替えしたわたくしに気付かない

山鹿市　中山好打

オフサイド一歩止まりて考えて
示談までやっときたのにまた悩み
折り返し過ぎてもやはり悔いばかり
あじさいもここぞとばかり咲きほこり
まった無し早く植えてと早苗たち

山鹿市　柳田白沙

紫陽花は何も語らずこうべたれ
ほっこりとゆったりくつろぐ懐で
生き方は流るる川の葉のごとく
母に言う一句ゆずってもらいたい
念願のバンジージャンプ飛んでみた

新緑に軽いコートで歯科のドア
好奇心むらさき色の路をゆく
闇なんてあしたの風のことなんて
子等の声うつつに聞いてこっくりこ

札幌市　富永恵子

紫陽花に片思いの積乱雲
訃報欄年齢先に見てしまう
摘果するいっぱいドラマ抱いたまま
へそくりを隠した本を妻が読む

弘前市　高森一呑

紫陽花の催促メールやっと梅雨
雨傘を日傘に使う帰り道
根づまりをほぐし植えかえ人の世も
辞めますぞえ一言いえば済んだのに

つくば市　嶋本喬

間違いを知らん顔してスルーする
誕生花身に余るよな花言葉
二歳でした何も語れぬ原爆忌
あの釘煮所望したいが娘の姑

上尾市　中村伸子

甘えるのニガ手なんです第一子
幸せはいつも近くにあるのにな
長いけど夢への道のり諦めず
表裏あればやっぱりニガ手です

東京都　髙岡弥生

数分の孫の演技に新幹線
要らないと思ったピピッが焦げ防ぐ
冷蔵庫までもピピッと指示をする
お出かけ日和出かける予定ないけれど

横浜市　長島亜希子

言葉よりはるかに語るたたずまい
隊長は御年一歳子連合
共通語ないけど同志人と犬
痛みます歯医者のウサギ名はうずき

伊勢原市　小田幸子

試供品終れば別の試供品
下腹は劣るし財布はやせて来る
邪魔な場所で又筍がのびている
どれがどう効くのか九つ呑む薬

佐渡市　髙野不二

一日を大事に思う老いの日は
親友の入院何も手につかず
写経して心の静まり待つ私
手を合わす動く身体のどこもかも

静岡市　渡辺芳子

てんこ盛り若さいっぱい平らげる
マイナンバー都合よい時悪い時
イントロに酔いしれついに口遊む
頂点に立つと寂しい風が吹く

江南市　脇田雅美

死ぬまでは女してます化粧する
変りばえしない日々にも花を生け
失敗を重ねるうちにコツを知り
家族みな健康なので平和です

大阪府　小栢　こずえ

青空が心くすぐる散歩道
先生が振り仮名つける生徒の名
言い訳の第一候補年のせい
答案用紙黒塗りにして出してみる

大阪府　神野　千恵子

時鳥一途に夜半のトークショウ
沸点の手前男の負け上手
山寺の賽銭箱に見る願い
百足の死蟻は葬儀も引き受ける

大阪府　高木　道子

遠き日の昭和の演歌はずむ宿
友と行く能勢温泉を楽しみて
淋しげな満月の夜の街路灯
青田中蛙のコーラス賑やかに

大阪府　畑中　節子

その瞬間何が出きよう震度7
誕生日親に感謝の日と決める
新元素命短いニホニウム
雨上がり凛と紫花菖蒲

大阪市　磯島　福貴子

ヒロシマは忘れさせない忘れない
思い出を修理しながら明日へ向く
幸せに過してきたと舌を出し
不景気の風に揺れてる若緑

大阪市　大治　重信

内臓をひとつ失くして軽くなる
ためし食いフランスパンに歯がたたず
足跡がだんだん薄くなってゆく
寝起きから首が回らぬ梅雨初め

大阪市　梅里　南天

家事育児まだ簡単にやれる老母
僕の腕使ってほしい生きてるぞ
温い手でだかれついつい甘えたに
端っこでも真実だけは光ってる

大阪市　柴本　ばっは

馴れぬ杖持たず歩ける日はいつぞ
昼寝して眠れぬつらさ春の夜
クラス会同い年です頑張ろう
同窓会痛いところの示し合い

大阪市　田中　廣子

新緑の日に日に伸びる蔓愛でる
ささやかな家族ドライブ近江京
義仲寺で芭蕉と路郎ふと思う
恩讐を超えて平和を祈りたい

大阪市　平賀　国和

頑張りが空回りする日花を植え
呑み仲間アウンの呼吸で注いでくれ
雨が降る迷い消すよに淡淡と
独りごと知らぬあいだに相槌も

大阪市　橋本典子

サミットで平和へ向ける旗を振る
金持ちは増やす努力と隠す知恵
旅行好きもあの世の旅はしたく無い
食品ロス捨てぬ努力に使う知恵

大阪市　前川善之

ときめきはないがたまには動悸くる
健康のありがたさ知る医者通い
試供品貰っただけで得気分
テレショップあれもこれもと欲しくなる

大阪市　宮村満寿恵

新語流行り字引ひいてもでてこない
休日に診察すんだ札のまま
覚え書後から見たら悩むもと
五七五軽いようでも奥深い

大阪市　吉田知之

泥んこを洗う楽しみ子の元気
山盛りが田舎の老母のお持て成し
老犬の山場案じる此の夏場
アクセント頭上に載せるサングラス

堺市　梅木澄空

病状をいつわり介護気も疲れ
海の幸潮の香りも連れて来る
毎日が修行の場です同居して
なんとなくつまらない日だ早寝する

堺市　近藤治子

まだ咲いていたい思いを胸に秘め
年重ね生きづらい世が身に染みる
忙中に閑を見つけて息を抜く
老人の知恵が生かされ世もまわる

堺市　大和峯二

鴨川の床に至福の生ビール
医者へ行くついでに甘い物を買い
銀行の笑顔痒いところを舐めてくれ
耐震診断どこから先につぶれるか

交野市　田岡久幸

文春が手ぐすね引いて待っている
全員が乱れず拍手妙な国
就活で茶髪男が七変化
回りずし孫が主役でかぶりつき

河内長野市　渡邊修

安いのはジョッキ小さくなっただけ
寝てしまう難しいこと始めたら
雨降って地盤固くはなりません
忘れ物そのうち出るよほっときな

高槻市　三谷白黒

ひと休み元気を貰う青い空
ずる休み常連さんの保健室
国産の手の届かない落花生
足の豆フルマラソンの記念品

豊中市　荒木郁子

前のこと蒸しかえされて大ゲンカ
親知らず誰にも言わず抜いて来た
片腹が痛い息子のお説教
ほこりまみれ大切だったあの指輪

豊中市　貝塚正子

あの世では使えぬ金を奪い合う
此の齢でスマホ知らずが生きている
劣情を売る人あれば買う人も
異常気象熱い地球の大欠伸

豊中市　源田啓生

私より私の好み妻が知る
勝敗は判っているが聞いてやる
鎌研いで鈍い体が動き出す
どの人も優しくなった選挙中

富田林市　小出修三

消費税より大口租税回避分
サミットもパナマ文書に嘆くだけ
アメリカに守られている気さらにない
トランプが出てるアメリカ行き詰まり

寝屋川市　荒川鈍甲

いやな客は出口まで送らないママ
セールスを断る妻のど迫力
究極のパワースポット妻の留守
青春のざせつを糧に今を生き

寝屋川市　岡本勲

蟷螂を捕らえ母の日プレゼント
ダイエット本棚に十冊眠ってる
冷麺が喉を流れて梅雨の入り
七十年過去を天地は忘れない

羽曳野市　磯本洋一

心臓のメンテナンスで入院し
老化防止麻雀教室通ってる
サミットで何がいったい決まったか
ゼロ金利銀行預金は氷づけ

羽曳野市　仲谷真一

手造りの団扇優しい風に乗る
ガソリンが切れたと夫はスーパーへ
美しい笑いの皺の増えるよう
ママだって忘れものをもするもんね

羽曳野市　安本美喜

ハガキ来る梅雨でアジサイ七変化
自慢する梅酒こはく酒出来る
ステップを派手に踏みこみ腰痛い
白寿まで自由楽しく傘寿越し

枚方市　坂本ミヨノ

妻の香がほんのり残る布団干す
半分こさっと次男の手がのびる
坂道を振り返ってはまだ半分
馬に乗り気づく高さと優越感

箕面市　寺井柳童

地震まで連れてきたのか温暖化
大渋滞犬も大きなあくびする
日本人も爆買いしてた百均屋
釘無しでお寺を建てる宮大工

八尾市　田邊浩三

七時間記憶が飛んだ夫帰る
ハラハラと初めて乗った救急車
白内障手術しながら見たオーロラ
さらば眼鏡先進医療のおかげです

八尾市　山川寧

そのままにしておいてやる深い愛
定石をはずした手だが深い読み
味方でも時にぐさりと胸にくる
とつ弁で上手はないが心打つ

神戸市　井上忠貞

ふところは夢とそろばん競ってる
掃除終え仏壇隅を亡妻チェック
満月も顔をゆがめる熱帯夜
終戦日すいとん作り味比べ

神戸市　輿水弘

全没をネタにぼやいてはしご酒
手に余る色とりどりの診察券
悪いトコ全部オレ似の子が可愛い
ちゃっかりと商談もする通夜の客

尼崎市　永田紀恵

古い服思い出巡り捨てられぬ
やれば出来る亡母の口癖忘れない
流行がタンスの中で逃げてゆく
夏が来て麦茶おいしくなってきた

尼崎市　藤田雪菜

挨拶もスマホ見ている新社員
又めくる歳月早いカレンダー
お参りの賽銭見てる笑う神
野良仕事美味しくなーれと種籾に

伊丹市　平井富夫

八十路きて愛猫と寿命を競いあう
代々の猫の名浮かぶ家具のきず
腕や足生傷見せて猫自慢
芦池の牛蛙鳴き梅雨近し

篠山市　長谷川善輔

喜寿へ来てやっと開いた貝の口
あと何年予算知りたい老い暮らし
夕立ちへリフレッシュして夏野菜
句作りへ思う言葉が出て来ない

篠山市　藤井美智子

三田市　幸田厚子

お茶碗とバカラ鎮座の水屋です
アイガモも豊作願ってマーチング
平和の輪一歩踏み出す二羽の鶴
ポーズとるカメラ目線のうちのタマ

三田市　宗福清司

応募締め切り日投函後の笑顔
何するにもトップギアでは身がもたぬ
安さにも限度見定めほどほどに
初恋の人仮想でも良い付き合って

三田市　辻開子

睡眠の不足補う昼寝ぐせ
三回忌仏がまさか話題の輪
訃報欄歳見てあーと息をつく
外食が預金の利息で出来た頃

奈良市　尾畑なを江

金魚揺れしばし猫の目静止する
そこかしこ忘れたままのゴムゾウリ
石段をスタスタ下りる夢の中
亡き人を恋うているのは鈴虫か

香芝市　山下純子

難しい顔の割にはよい返事
ひまわりの絵の傘さして梅雨はじく
人権と平和の王者アリが逝く
難しい年頃過ぎて休火山

和歌山県　森下よりこ

テレビで充分季節の花見出来てます
健康維持だけを老後の目標に
近所にコンビニ老いのくらしに幅が出来
朝一の我流体操あれやこれ

和歌山市　北原昭枝

雨漏りのバケツがドレミ歌ってる
折折の花が律儀に咲いている
善し悪しはその日の気分青田風
きっちりと線を引いてる胸の内

和歌山市　倉橋悦子

見えてくるものがあるから続いてる
大逆転胸からすうっと落ちるもの
梅雨最中紫陽花だけは誇らしげ
懐かないメダカにも春の子沢山

和歌山市　鍋嶋澄子

美しく咲いてみせるは花の芸
セピアでもひとつやふたつ消せぬ夢
ミニトマト赤いドレスで一夜舞う
忍び足すり足老いが寄ってくる

岩出市　村中悦男

電話機を取っては降ろす人恋し
字あまりをどこへ着せよう五七五
蛙鳴く水田の月も聞きほれて
耳飾りしなくてきれいな耳たぶさ

貰っても困る百万本のバラ
それからの話がとんと進まない
高がカラスされどカラスの知恵袋
転んでもただで起きない天邪鬼

紀の川市　山東　日出男

氏神に太鼓が響く過疎の村
紙一重秘密の技は見抜けない
やってやるしくじる度に意地を出す
タンスには愛着心が詰まってる

鳥取県　飯野　菖子

見返りを求めず人の世話をする
よき所住んでいるのに気がつかぬ
今年また父が自慢のつるし柿
干してある大根痩せてダイエット

鳥取県　川本　美津子

合言葉必死のパッチタイガース
ドラゴンズ竜頭蛇尾はいただけぬ
広島は五月の空の鯉幟
ヤクルトのオバチャンパワーが尻を押す

鳥取県　児玉　規雄

寝たきりで我がまま言える妻がいる
金もない老女を泣かす蟻の群れ
癒しとはビール一本飲んで寝る
子供ゼロ老人ばかり集う過疎

鳥取県　下田　茂登子

支え合う人と言う字の良い角度
自由には自己責任が付いている
急ぐときどの信号も赤になる
美しく年とるように心掛け

鳥取県　田口　清帆

庭先のバラ満開で部屋香る
いくら背をのばしてみても八十路背
病院で加齢ですよと言い切られ
予定表通りに行かぬ今日の雨

鳥取県　橋谷　静江

針千本小指の温さ三回忌
覚えるよう忘れるように目を閉じる
キャベツから抱き方習う子育てよ
残り火を燃やすに足りる好奇心

鳥取市　大前　安子

快調とまだまだがある退院日
フルムーン乗り放題のＡＮＡにする
シミと皺女優も避けるコマーシャル
蛙見て指先おどる草むしり

鳥取市　奥田　由美

ふくよかねさらりと言ってくれる友
五七五で幸せ太りしています
美味いもの食べることしか考えぬ
知らぬ間に子等の子供になって古希

鳥取市　田中　天翔

広島へようこそオバマ大統領
核の無い世界平和を祈ります
急降下水田スレスレ舞うつばめ
虫さされぽっちゃり腫れる可愛い手

鳥取市　津村律子

一日に一つの笑い心掛け
梅雨晴れに急かされ庭木の剪定
本気度が読めぬ返事が軽すぎる
吉報が入り一日地に着かず

倉吉市　大羽雄大

クールだがきっと泣いてる魚拓の目
ワルツ聞く母はベッドで踊ってる
辛口のジョークに塩をふっておく
つらいから断るふりをする演技

倉吉市　岡﨑美知江

夫婦のきっかけ億万長者の噂聞き
腰を振り廻して見たいフラフープ
年かいなああちこち痛い情けなや
さっぱりと今日の疲れを酒でとる

倉吉市　田中紀美恵

許せないだけでは前に進めない
杉箸が出てくる店の料理グー
事件です核家族から始まった
コンロの火つけたら前でじっと待つ

倉吉市　田中けいこ

言い訳をする前にまず謝ろう
決めた道迷わず急がず一歩から
我が人生泣くまい笑顔がんばるぞ
嘘が見え愛する心断ち切れる

倉吉市　堀かずこ

年金の縛りのなかで背伸びする
増税が去って野党の意気上がる
売薬を良くは言わない薬剤師
捨て鉢に今年も咲いたねじれ花

米子市　生田和之

目覚めが悪い夕べの酔心地
天高くどこまで行くやら秋の空
勝手気ままな晩秋風に酔い
孟秋の夜の快適心地良さ

米子市　池岡たけし

年の功透明人間わかります
二十八度炬燵ぶとんとお別れだ
新聞のクイズ解けたら呆けてません
地震続く他人事とは思えない

米子市　田村周子

病魔何故名医の命までも取る
ブーケ受け今だ独りの夜が続く
母逝って吐けぬ悩みのメタボ腹
子の寝顔辛さ吹っ飛ぶパワーくれ

米子市　永井三津子

ショックから立ち直るとき仏の手
好きなんだ自分に嘘はつけません
執着がなければこの世ひらひらと
三角のもつれ話はまだ続く

松江市　相見柳歩

おお旭日わたしの朝へ檄飛ばす
うれしさを誰に話そう猫なでる
真実の強さ気迫という目つき
坂道が何だ生き抜く試練場

松江市　福間左余

過去未来くよくよせずに今を生き
笑い合う心が軽くなるクスリ
料理する手間を惜しまず楽しみに
足腰の痛み自慢の様に言う

松江市　山根邦代

初恋にひょっこり会釈して通る
息吸って止めて吐いてと検診車
それほどの愚痴が言えたらまだ確か
ムーとした嫁がお世話をしてくれる

雲南市　菅田かつ子

我病んで思う妻のこと孫のこと
しみじみと独りで生きるむずかしさ
夏場所を終える相撲の国際化
さあ選挙消費増税延期して

安来市　原煩悩児

同窓会花柄の杖よくしゃべる
宮内庁御用達でも普通味
どうどう巡り抜けだせないでいる水母
川原の小石みな別別の顔でいる

岡山県　高岡茂子

邪魔くさい隣の枝にビワたわわ
一寸の尺取虫の歩に合わせ
勇ましく戦う猫の医者通い
猫様の顔色を見てグルメ缶

岡山県　紫しめの

自由の身ときどき時を無駄にする
懸命に生きて一つもない自慢
欲のない秒針今日を刻むだけ
生きている年金がある妻も居る

瀬戸内市　片島秀月

断りより言い訳先に考える
外面の良い夫婦です旅の中
京の梅雨抹茶こぼしたような寺
手動です電車乗り降り長閑なり

玉野市　片岡富子

青春は白いブラウス白いシャツ
占いは当たらなくても皆好きさ
女房にはいつも白旗掲げてる
身の上を聞けば話は長くなる

尾道市　小畑宣之

目標を定めてからの縄梯子
堅すぎる心に少し誘い水
ゴールして追いかけるものなにもない
今日ひと日あしたへ伸ばす竹の節

尾道市　日谷　寛

猿カニ合戦人の好いのを競い合う
タイミング袈裟をとるときお茶を出す
カープ勝つ今朝の会話の弾みよう
何に遣ううるさく聞いてくる銀行

竹原市　土井輝恵

忘れない火種がチャンス待っている
試飲だけ買わずに帰る酒まつり
清濁を泳ぎ老舗の深い味
夏の恋海の響きが鳴り止まぬ

竹原市　若年幸子

ふる里の風はやさしい緑色
ありがたい谺が返る声やさし
満ち欠けて顔色変えぬ月が好き
週二回通院リハでカラオケも

竹原市　六田半徳

釈明が足らぬと蛙大合唱
光り物の似合わぬ指で落着かず
救急車の止まった角が気にかかる
手探りでメガネの当りつける朝

府中市　田辺和子

DNA婆ちゃん似だと言わせたい
夢捨てぬ子供バイエル弾いてみる
譜が読めるまだ指動く捨てぬ趣味
ピアノ弾く時は何にも忘れられ

三次市　伊藤寿子

癒やされるメダカ一匹飼っている
一辺を縫い合せてる里帰り
戸締りも声で確認老いの坂
家のローン終る頃には夫も老い

山口市　増田めだか

おねえさんおねえとだけの三歳児
温もりが伝わるように手を添える
謎解けて女子会さらに盛り上がる
遊園地子供に混じりミニ列車

岩国市　上村夢香

日頃来ぬ人笑顔を見せる選挙戦
老いの知恵役にたたない新時代
聞いてもすぐ記憶残らぬ老いの耳
老い卒寿海外ニュース意味不明

宇部市　高山清子

ゆっくりと自然と同化農作業
元気だせ凸凹がある人生譜
ひだまりでゆっくり溶ける思い込み
しなやかさ老化を防ぐ術だろう

松山市　近藤修二

生きている明日へ今日を脱ぎ捨てる
大恥をかいて一皮むけました
無意味ではなかったんだと思いたい
くやしさを超えて自信になっている

松山市　柳田　かおる

まだでしたシルバーシートさあどうぞ
七ツある間違いさがし六ツ出来
やっとこさ腹をくくったヤジロベエ
去勢したミケが通りでいばってる

高知市　三谷　松太郎

通学路あいさつ欲しいパトロール
コンビニが増えて安心田舎道
年金が年取るたびに目減りする
太い指スマホのメールぎこちなさ

佐賀県　門井　孝

一週間いのちつないだ子の写真
青天に白布しっかり場所をとり
心身を解放栄養とらねばね
二人展終ったあとがおわらない

唐津市　岩﨑　實

歩みよる友の力に奮い立つ
母の日にもらった服でデパートに
ボケてるが炊事洗濯まだ出来る
デパートで買物せずに見るばかり

唐津市　吉冨　節子

不法カジノ開けさせたのはどいつらだ
若者の未来を閉ざすバカおとな
三菱もたかが三流詐欺会社
日本人などやめたくなった又揺れた

山鹿市　三谷　直男

想定外生きてる日々が全て未知
前を行く若い歩幅に遅れじと
投資した子供だしっかり歩いてる
とぼけないでしっかり証拠取ってある

シドニー　坂上　のり子

第50回　東大阪市文化祭参加

第43回 市民川柳大会

日　時　9月24日（土）（出句締切　14時）
会　場　東大阪社会教育センター３階
電話 06－6789－4100
近鉄布施駅下車　北口三井住友銀行北へ５分
宿　題（各題２句・出席者のみ）

「切　る」	柿花和夫　選
「　魔　」	瀬川幸子　選
「美しい」	藤原一志　選
「　力　」	矢倉五月　選
「ベンチ」	山田順啓　選
「背　中」	片岡湖風　選

※昼食はお済ましの上おいで下さい。
会　費　１５００円（各題秀句賞・発表誌呈）
懇親宴　３５００円
問合せ先　片岡　湖風　　電話 072－965－1341
主　催　東大阪市文化連盟・東大阪市川柳同好会

橘高薫風句抄

（『橘高薫風川柳句集』平成十三年発刊）

毛皮着て貧しい心とは見えず
椅子蹴って立ったに 続くものがなし
失いしものと得しもの この友に
風邪ひいただけで男の嵩だかし
手紙など書きたき 風の癒り際
病人の長い手紙も哀れなり
明け方の火事を病人知っていた
病み上がり 蝉をハナしてれと言い
病み上がり 街は光に満ちあふれ

四月四日 長女章子誕生

木も草も花をつけてる誕生日
春闘の真っ只中に 子が生れ

一月十三日 二女幸誕生

冬晴れて見馴れ山も高く見え
子の潔癖 母の枕を父にさせず
暖かい書斎 麻疹の子にとられ
三輪車 ポストへはまだ背が足らず
都会の夜 セロリは母の香に似たり

母入院

一匹の蚊に 病室の広いこと

母再び入院

かかる時 海の晦さを持つ蚊帳よ
喪服着た妻に女が残ってた
つとさした夫の傘の大きさよ
妻の留守 食パン真っ直ぐに切れず
熱の子へ 眼鏡をかけたまま眠り
父親が優しうなった左り前
逆境にいて風呂好きの父を持ち
この頃の尿の細さよ 落ちぶれぬ
四面楚歌 故郷は豆の花の頃
麦の穂が目を刺しそうな都落ち
勉強の額もろともに家を売り
寂として墓石 蜻蛉も動かない
わが妻になすべかりしを 賀状書く

英語 de Senryu㊻

麻生路郎句集『旅　人』

英 訳　吉村　侑久代　Kim Horne

必要なことしか言わぬ　国訛り

he utters
only the words necessary
when speaking his native dialect

牛老ひて　家族のやうに　いたはられ

old cow
cared for
like family

---

utter 口に出す　*only* だけ　*word* 言葉　*necessary* 必要な　*speak*　話す
native dialect 訛り 方言　*cow*　牛　*cared* いたわられ　*like* ように　*family*　家族

～リバーウィローのため息～ R.H.ブライスによる川柳の解釈と英訳⑳

今回は *SENRYU* から、（人の心理）つまり、心の動きを取り上げましょう。

芝居見た晩は亭主が嫌になり　　半文銭

(*The night / She goes to the theater, / She dislikes her husband.*)

theater 劇場　芝居小屋　*dislike* 嫌う　寄せ付けない　*husband*　夫

これは大正時代に活躍した木村半文銭による（芝居を見た晩）と（亭主が嫌いになる）の二句切れの軽妙な川柳です。この川柳は宮森麻太郎の英訳（*The night she sees a play, / A woman hates her husband.*）をすでに（2013年八月号）で紹介しています。宮森は二句切れの句意に添った2行の英訳ですが、一方ブライスは3行訳です。ブライスは1行目に *the night* を入れて（芝居を見た晩）を明示し、2行、3行のそれぞれの頭に *she* を並べて、彼女の行動と感情を強調するという工夫を凝らしています。両者とも女性の溜息が聞えそうな翻訳です。ブライスはこの川柳の句意を「魅惑的な役者に魅せられた妻が、芝居から帰宅した夜、亭主の無骨な姿を見て嫌気がさし、もはや一緒に暮らせないと思ってしまう。しかしながら、彼女はその素敵な役者に似合うには程遠いことに気が付いていないのです。」と説明しています。ブライスの言葉には男性から見た女性への皮肉に満ちたシニカルなまなざしが感じられます。

参考文献：R.H.Blyth, *SENRYU*（北星堂書店 1949）p.184.

誹風柳多留一二篇研究 38

伊吹和男・山田昭夫
石川道子・小栗清吾
細井龍夫
清博美

300 **ねころんでろんご見て居る暑イ事**

伊吹 土用干。普段はあまり読まない論語の本も、土用の虫干しに寝転んで眺めている。文庫から長持の出る暑ひ事　傍四2

清 賛。

301 **やねを上ケゑんをおろすとやうじみせ**

伊吹 浅草名物の房楊枝を売る楊枝見世は、床店といわれる屋台店であった。また浅草寺境内では、仁王門と随身門が暮六つから翌朝の明六つまで閉門されるのが掟であったから、水茶屋や楊枝見世は暮六つ前に見世をたたんで、御地内の外へ出なければならなかった。そのため翌朝の楊枝見世の開店は、屋根を上げて縁を下すという次第になる。やうじやハきりりと廻ハりそうな見せ　明八義5

清 賛。

302 **高をくゝつて石河岸の明ケはなし**

伊吹 大きな石を扱うには、陸路だと大変である。だから自然と河岸に市場ができるとこになる。巨石を盗むほど力の強い者はめったに居ないから、その河岸の石市場は無防備となり、囲いもなければ施錠もなし、といった具合である。

見くびつて石河岸夜ルも明ばなし　七六24
石かしへどろぼうに行つよひやつ　天元満2

清 賛。

303 **形リハ男だがなく声は女郎なり**

伊吹 脱廓の失敗。遊女が男の扮装をして逃げようとしたが、女と見破られ泣いている。大門に男らしいかないて居る　天二義1

清 賛。

304 **茶やかりにいの字とろの字は入ル也**

伊吹 出合茶屋での男女の密会。「い」と「ろ」の字は、色男（情夫）と色女（情婦）をあらわし、二人が茶屋へ入るのを詠んでいる。此の世から一ッ蓮の茶やを借り　四〇32

山田 賛。「い」と「ろ」で「いろ」となる。

清 賛。

305 **渡しばでいちはるむすめ人たかり**

伊吹 「道成寺」の清姫が、日高川を渡るのを江戸時代風に表現したとするのは、措辞が足りないように思う。竹町か竹屋の渡しで吉原へ行こうとしている男を、意地っ張りの許婚の娘が引き留めている、珍しい光景に人だかりしているのではないか。

又ふうふけんくわと笑ふい丶名つけ　安二智5

山田　「道成寺」でいいのではないか。

小栗　思いつめて追い掛ける清姫を「意地張る」と表現できるとも思えず、船頭すら真っ青になって逃げ出す光景を「人だかり」して見物しているとも思えないので、「道成寺」には賛成しがたい。といって、どういう光景かも説明できず、不明句。船頭が手を取って乗せようとするのを拒絶する位は「意地張る」とは言わぬか。

細井　謡曲『道成寺』、歌舞伎『日高川』のいずれも蛇体となって、とあるし、

渡し守髪のとけるを見て逃る　七〇33

川はたへ来た時髪ハもふほどけ　拾五12

という句もあるから、「人だかり」は無いだろうと思われます。礎稿のようなことではなかろうか。

清　道成寺は無理のように思う。さて、どんな情景を思い浮かべればいいのだろう。

306　**きつねつきおちると元トの無筆也**

伊吹　字が書けるはずのない人や子どもが、狐が憑いている間はすらすらと書いていたのに、狐が落ちるともとの無筆に戻った。例句の黒札は、狐憑きを落すのに霊験がある札。

黒札の礼には馬鹿な顔で来ル　初24

清　賛。

307　**真先ハこゝ迄来てといふところ**

伊吹　吉原がすぐ近くだというのに、田楽が名物の向島は真崎稲荷まで来て、今更なにを言っているのか優柔不断の輩が連れの中にいる。今夜行かずして何時行くと言うのだ！

真先でされハぐらいハ化ヵされる　初33

松洞寺こゝ迄来テといふところ　安元満1

山田　賛。ですが、そうスンナリと行かない場合があり、

真崎で分別を出し叱られる　玉19

つまり、「ここまで来て何を言うか」。真崎と吉原は目と鼻の先。

小栗　山田兄説賛。「ここまで来て、『俺は行かない』はないだろう」。

清　賛。

308　**内のふとんが二三拾出来る也**

伊吹　吉原での高級遊女の三布団。現代の感覚だと、家庭用布団一セットが通信販売で一万円くらいだから、二三十万円の布団ということになる。通販の布団はシーツや枕カバーも付いて、そこそこ立派なものだから、家の前餅布団と比べたら五十万円ほどの開きになるのかも知れない。

女房ハきたない夜具へ一人リねる　二三36

清　賛。だから、なかく作ってはやれない代物だった。

309　**そうめんをくばるを見れハ御用也**

伊吹　『東都歳事記』巻之三・秋之部の七月七日の項に、「今夜貴賤、供物をつらねて二星に供し、詩歌をささぐ。家々冷素麺（ひやそうめん）を饗す」とある。また『本朝食鑑』穀部之一の素麪の項にも、「今時（ちかころ）七月七日には必ず素麪（そうめん）を喫（た）べることが上下ともに習慣となっており、家々では素麪を餽贈（おくりもの）する」とあり、主題句では、主人の使いで酒屋の小僧が、お得意に素麺を配り歩いている。

素麺にたのんましやうで御用来る　傍二29

小栗　賛。「酒屋が得意先への贈り物として、素麺を配る風習があった」ということが、前提なのだが……。御用が、得意先に頼まれて使い走りをしている、と思っていた。

清　礎賛。

愛染帖

新家　完司　選

（投句　280名）

長男にこざっぱりした嫁が来る

紀の川市　北山　絹子

（評）こざっぱりとは「清潔で感じの良いさま」。そのような家庭で曲がらず歪まず素直に育ったのだろう。何とも嬉しいことである。

変わるかも自分で自分褒めてみる

倉吉市　大羽　雄大

（評）自己顕示を恥とし自省を重ねてきた古き良き日本人。自らの長所を認めるのはこそばゆいが、誰も褒めてくれないのだから…。

献立が決まらず売り場二周する

堺　市　近藤　治子

（評）家族の好み、財布の中身、料理の手間等々を考えるとなかなか決まらない。健康のためのウォーキングと思って、もう一周！

世渡りは抜き手切らずに浮き袋

田辺市　岡本　昇

（評）馬力を出して抜き手を切れば、波風が立って「はた迷惑」であり、思わぬ岩礁にぶつかる。浮き袋に乗ってのんびりがベスト。

勉強より頭を使うカンニング

豊橋市　藤田　千休

（評）悪事すべて、綿密な計画と周到な準備をしなければ露見する。そのエネルギーを勉強や仕事に回せば堂々と勝てるのだが…。

花柄の日傘ときどき杖になり

香芝市　大内　朝子

（評）軽やかな足どりで颯爽と、というのはパワーのある間だけ。夕刻になるとぐったり。杖にされた花柄の日傘が泣いている。

もらうのが好きで膨らむ頭陀袋

東かがわ市　川﨑ひかり

（評）飴玉一つでも「わっ、嬉しい～ありがとう！」と弾ける笑顔。それを見たらまた上げたくなる。「受け取り上手」は人徳だ。

この頃は早寝早起きして昼寝

広島市　岸本　清

（評）加えて、夜中にトイレへ二度三度。となれば完全に高齢者のパターン。体内時計がそのようになるらしい。逆らわずにゆこう。

化粧品換えても変化しない顔

鳥取市　倉益　一瑤

（評）化粧とは文字通り「化ける」こと。その「化」と「素」の差が大き過ぎるのは考えもの。素は変化しないのだから無理はよそう。

死後の世界はカビキラーのにおい

沖縄県　森山　文切

（評）誰も知り得ないことを断言するのは勇気の要る「ハッタリ」だが、「そうかも…」と思わせるのは、意外性のある具象の力。

名人の一句につける丸印

東京都　川本真理子

選者見て決める傾向と対策

三田市　多田　雅尚

句会終え飴やお菓子が増えている

八尾市　山根　妙子

ごくたまに載る句があって続けてる

奈良市　阿部　紀子

百歳をゴールとすれば未だ小僧

神戸市　細川　花門

ピンセット持つとつまんでみたくなる

鳥取県　山下　節子

三役が異人ばかりの土俵入り

堺　市　遠山　唯教

オープンカフェ五月の風と喧騒と

大阪市　宇都満知子

影を出て影に隠れる油虫

大阪市　大治　重信

ため息も体のために良いらしい

海南市　小谷　小雪

忠勤に励む自販機自動ドア

米子市　竹村紀の治

菜園に今夜のメニュー書いてある

三田市　村田　博

頂いた野菜一切無駄にせず

三田市　上田ひとみ

米子市　成田　雨奇
そろそろ洗い時か頭が痒い

佐賀県　真島久美子
夏だから送料無料です　私

松江市　石橋　芳山
眠れずに銀河を渡り歩いてる

桜井市　安土　理恵
へその位置ずれて常識また破る

岡山市　丹下　凱夫
なにもかも知っているよとカァカァカァ

大阪市　大川　桃花
ウイッグのように化粧も出来たなら

堺　市　大和　峯二
年寄りと自分で言うようになった

羽曳野市　宇都宮ちづる
良い妻と俺が言わずに誰が言う
とびきりの笑顔を妻は孫にだけ

鳥取市　岸本　宏章
特技には転寝癖と書いておく
干涸びた生姜見つかる野菜室

紀の川市　楠原　富香
鯉のぼりが見られぬ町になってきた
中国も昔は偉い人がいた

河内長野市　村上　直樹
曲がるなと鏡に注意される背
貧しいがうまい味噌汁のんでいる

橿原市　居谷真理子
ポッケにはアメとニトロの常備薬
ノーヒットでも五十年妻の秘書

神戸市　松井　文香
イヤホンで親のクドクド聞いてない

豊中市　水野　黒兎
経験は失敗だって貴重品

堺　市　矢倉　五月
乗り切ってほんに何とか成るもんや

横浜市　菊地　政勝
ライバルを誉めて自分を目立たせる

大阪市　谷口　義
昔やったら死んでるでという歳になり

堺　市　村上　玄也
年寄りが早起きだとは限らない
正座せぬ女の足が長くなり

河内長野市　谷　久美子
亡母の歳越えるまではと薬漬け
一言をうるさがったりがられたり

倉吉市　牧野　芳光
蜘蛛の糸きっと私に下りてこぬ
コンビニもガス会社でも電気売る

紀の川市　宇野　幹子
赤ちゃんのお尻のような桃ガブリ
複眼をクルリ世間の裏を見る

弘前市　髙瀬　霜石
すこしだけ曲がった臍はうつくしい
名画座にゴロゴロゴロゴロと化石

橿原市　居谷真理子
居酒屋でスカウトしてる草野球
指先が枯れてページがめくれない

男鹿市　伊藤のぶよし
年金の枠で暮らせる過疎が好き
フルムーン旅のお供は保険証

鳥取県　斉尾くにこ
落石に当たらずテポドンに遭わず
ささやかな楽しみと少しの友と

明石市　糀谷　和郎
飛蚊症かと思えば空を舞う燕
海外へ行かぬが趣味の英会話

和歌山県　森下よりこ
犬も猫も飼わなくなって老いている
それなりの手入れの結果夏果実

羽曳野市　中川ひろ介
梅雨寒に恋しくなった上燗屋

大洲市　中居　善信
赤い灯がおいでおいでをして困る

弘前市　稲見　則彦
同じ店同じ顔ぶれ馴染み酒

大阪市　藤田　武人
花金も飲んだら愚痴る赤のれん

堺　市　奥　時雄
検査の都度医者と談合する酒量

松山市　郷田　みや
盃も相槌うっている話

富田林市　山野　寿之
三日月の返盃受ける一人酒

枚方市　寺川　弘一
ヘネシーも入れてやりたい紙コップ

美人薄命とうに期限は過ぎました　大阪市　若本　安代

クラス会医者とて痴呆免れず　香南市　桑名　孝雄

十年も前の服着て鏡みる　三田市　石原　歳子

口笛を吹いても音の出ぬ八十路　豊中市　藤井　則彦

思い出を集めて母の死を想う　鳥取市　前田　楓花

現役の頃の手帳も棺に入れ　唐津市　仁部　四郎

若作り自分に喝を入れている　河内長野市　山岡冨美子

ダイヤ婚妻は施設で安穏に　安来市　原　煩悩児

好奇心まだまだ跳ねるローヒール　和歌山市　玉置　当代

財布にもひと息欲しい夏休み　塩竈市　木田比呂朗

今日もまた満たされ笑顔車椅子　八尾市　高杉　千歩

ここ一番どうして便秘などになる　神戸市　奥澤洋次郎

リビングに活断層が走ってる　大阪市　古今堂蕉子

何に効く薬かたまに確かめる　三田市　堀　正和

バスツアーつい買いすぎる道の駅　京都市　三宅　満子

バス旅行夫やっぱりしゃべらない　河内長野市　穂口　正子

あれもこれもそれもやっぱり温暖化　高槻市　原　洋志

一玉の西瓜で埋まる冷蔵庫　大阪市　平井美智子

一日一善珈琲をのんでから　鳥取市　土橋　螢

コーヒーを啜る年寄りくさい音　鳥取市　岸本　孝子

小学生いたので守る赤信号　松原市　森松まつお

園児らの挨拶風に乗って来る　山口市　青木　隆子

昼過ぎにお早うさんもいいじゃない　尼崎市　山田　耕治

少しずつ自我をおさえて子を立てる　大阪府　野田　栄呼

一万歩サボれば明日は二万歩ぞ　河内長野市　松岡　篤

頑張れと風が耳打ちして通る　岡山県　田中　恵

母の忌に父は米寿の祝い膳　和泉市　横山　捷也

大好きなケーキ小振りになっている　宝塚市　田中　章子

プリウスとまたプリウスとすれちがう　紀の川市　辻内　次根

姦しい人に会いそうまわり道　加西市　金川　宣子

百均にまさかまさかが並んでる　寝屋川市　伊達　都夫

傘どうするかまで予報士に聞かずとも　羽曳野市　徳山みつこ

雑学も時代おくれが増えてくる　京都市　都倉　求芽

花火には想い出がある男下駄　奈良市　加門　萌子

イラチですすぐしゃしゃり出てしまいます　大阪市　江島谷勝弘

ブレーキの壊れたニュースばかり読む　和歌山市　古久保和子

赤い糸離さぬ妻にあやつられ　羽曳野市　吉村久仁雄

資源回収みんな元気で顔合わせ　鳥取市　田中　天翔

人はどうあれ私B型お人好し　堺　市　澤井　敏治

締め切りを自分できめるお礼状　八尾市　村上ミツ子

失敗の山が貯金になっている　宝塚市　太田としお

ひらめきが消えた体操でもしよう　大洲市　花岡　順子

東大阪市　北村　賢子
富を得てなおせこくなる浅ましさ

枚方市　海老池　洋
謝罪にも舛添流とベッキー流

寝屋川市　森　茜
気がかりをもらせば猫は大あくび

四条畷市　吉岡　修
地球から枯れる荒れるという悲鳴

豊中市　貝塚　正子
素うどんが好きダシの味たのしめる

鳥取県　竹信　照彦
土竜駆除モグラと知恵の絞り合い

箕面市　中山　春代
過去形になったわたしの登山靴

高槻市　初代　正彦
育メンもちらほらいてる遊園地

三田市　上垣キヨミ
鶏に礼言うた事ないタマゴ好き

岩出市　村中　悦男
人恋し蛙の声を闇に聞き

岩国市　上村　夢香
手を添えてうなずく人がいてくれる

鳥取市　池澤　大鯰
珍しく在宅の妻眠りこけ

枚方市　小林　わこ
試験的に植えてみました枇杷の種

松江市　中筋　弘充
ハガキには絶対書かぬ「愛してる」

橋本市　石田　隆彦
普段着の人情残す過疎の村

横浜市　川島　良子
懐かしい歌詞へ青春とり戻す

八尾市　山川　寧
北新地ちょっと豪華に昼ランチ

和歌山市　福井　菜摘
隅っこに座り直してこころ凪ぐ

大阪市　高杉　力
忙しい時に社長がやって来る

鳥取県　石谷美恵子
死にたくはないが後から押してくる

神戸市　近藤　勝正
お帰りと言わず傘はと妻は訊く

岡山県　山縣のぶ子
小狡さも覚えフトコロ深くする

松山市　栗田　忠士
墓代のローン完済まで死ねぬ

寝屋川市　平松かすみ
訳有って別居してます三ヶ年

姫路市　古川　奮水
ガス台の鍋空だきに蓋が鳴る

和歌山市　松尾　和香
想い出の指輪が重いひとり旅

松山市　近藤　修二
しなやかに生きる術だろ自然体

鳥取市　福西　茶子
長椅子の隙間にお尻入れて老ゆ

和歌山市　松原　寿子
雑草が空き家取り巻き威張ってる

和歌山市　平田　元三
売り出しの列思わせる山開き

シドニー　坂上のり子
いい湯だな裸でマグマの上にいる

東大阪市　佐々木満作
些少でも生きた支援になる募金

奈良市　大久保眞澄
姑に似てきた夫持て余す

府中市　岸田　武
次の世も添うかと言えばベロを出す

下松市　有海　静枝
カラオケで意見の差異はちょい保留

大阪市　田浦　實
寺社めぐりてくてく歩き老いに喝

箕面市　広島　巴子
ゆるむネジ巻いてせっせとカルチャーへ

大阪市　松尾柳右子
読む本を並べてみたが目が疲れ

瀬戸内市　宮宅比佐恵
点滅で終わるか私の片想い

堺市　内藤　憲彦
残り時間読むと保険は元取れぬ

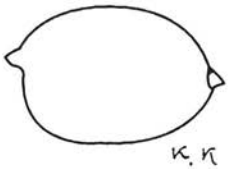
米子市　中原　章子
情報を井戸端会議キャッチする

和歌山市　磯部　義雄
家族葬増えて自治会減る話題

共選欄　檸檬抄

（薫風書、カットとも）

（投句　379名）



「ゴール」　三浦強一選

産声がゴール目指して走り出す　貝塚市　石田ひろ子
人生にゴールがあって頑張れる　犬山市　金子美千代
ゴールまで酒もタバコも止められん　堺市　村上　玄也
ゴール前成人病と闘ぎ合う　米子市　竹村紀の治
我がゴール肖りたいな落椿　河内長野市　藤塚　克三
コンマ差のゴールで五輪遠くなる　箕面市　出口セツ子
沿道が背中を押したゴールイン　枚方市　丹後屋　肇
テープ切る練習だけは抜かり無い　河内長野市　大島ともこ
ゴールまで杖になったりなられたり　鳥取市　西川　和子
ゴールまで妻よ伴走有難う　枚方市　海老池　洋
ゴールまで半歩夫のあと歩く　三田市　野口　晶子
家ローン終えたら後期高齢者　広島市　岸本　清
幾山河越えたゴールの傷だらけ　八尾市　宮西　弥生
見え出したゴールにあなた立っている　西宮市　牧渕富喜子
ちちははの待つゴールまであと少し　弘前市　福士　慕情

「ゴール」　長浜美籠選

ゴールとは何ぞ只今八十五　堺市　山本　半銭
どん尻も泣き泣き馳けて来たゴール　奈良市　米田　恭昌
うたかたのゴール目の前かもしれぬ　松江市　藤井　寿代
ゴールまで妻よ伴走有難う　枚方市　海老池　洋
ゴールインなんと嬉しい響きだろ　倉吉市　大羽　雄大
ゴールインの二人に鬼か蛇が出るか　東大阪市　北村　賢子
定年がゴールなどとは言うとれず　松山市　宮尾みのり
ゴールなどないと悟った趣味の道　河内長野市　木見谷孝代
ゴールまで酒もタバコも止められん　堺市　村上　玄也
卒業はしたが就職決まらない　三田市　多田　雅尚
職人の道にゴールは無いと父　大阪市　大川　桃花
妻だけの拍手で見事ゴールイン　奈良県　渡辺　富子
ゴールまでたどり着けたら良しとする　大阪市　坂　裕之
ゴール目前すぐ寄り道をしたくなる　八幡市　今井万紗子
臨終の練習やるか眠れぬ夜　篠山市　酒井　健二

にぎやかにご先祖様が待つゴール　橿原市　居谷真理子
雨男ゴールも雨の霊柩車　男鹿市　伊藤のぶよし
ほめ言葉柩の中でくしゃみする　札幌市　斉藤　宏子
ゴールまで何度転べばいいですか　鳥取市　倉益　一瑤
見えぬゴールを目指す人生おもしろい　高槻市　片山かずお
ワンゴール決めて浮き足立つ明日　和歌山市　武本　碧
この上に天国がある蓮の池　堺　市　加島　由一
山いくつ越えたかゴールまだ見えぬ　和歌山市　松尾　和香
どんぐりころころゴールは成りゆきに　鈴鹿市　小河　柳女
ゴール間近二人三脚転けまいぞ　河内長野市　木見谷孝代
実況の声が上擦るゴール前　堺　市　大隈　克博
頑張った今日のゴールは縄のれん　堺　市　柿花　和夫
熱燗で二合が今日のゴールです　大阪市　川端　一歩
梯子酒最後は家でママの愚痴　大阪市　佐藤　忠昭
一日のゴールに夕陽うつくしい　和歌山市　古久保和子
ゴールインさあスタートの新世帯　三田市　北野　哲男
ゴールまで続く夫婦の膝栗毛　三田市　村田　博
回転木馬ゴール地点はまだ見えず　大阪府　米澤　俶子
鼻の差がすごすご帰る競馬場　南あわじ市　萩原　狸月
ゴール前どんどん坂がきつくなる　松原市　森松まつお
人生のゴールの旗はぬっと出る　高槻市　初代　正彦
アベノミクスゴールだんだん遠くなる　宇部市　平田　実男
句読点うってゴールへつなぐ夢　和歌山市　北原　昭枝

エベレスト無事に帰るのがゴール　宝塚市　田中　章子
ゴールにも認知テストがあるらしい　長岡京市　山田　葉子
惚けた時わたしのゴールだと思う　尼崎市　藤井　宏造
ささやかな今日のゴールだ中ジョッキ　西宮市　梅澤　盛夫
ゴールまでただ只管にマイペース　高槻市　初代　正彦
うぶ声はゴールを目指すホイッスル　米子市　竹村紀の治
恋のゴールそれから愛の第一歩　鳥取市　加藤　茶人
百まで九年恋一つずつ片づける　八尾市　宮崎シマ子
見えぬゴールを目指す人生おもしろい　高槻市　片山かずお
健康寿命先延ばしするスクワット　弘前市　福士　慕情
人生にゴールと呼べる線引けず　シドニー　坂上のり子
律義なり鮭が回帰の母の川　札幌市　小沢　淳
胸の差で妻より先にゴールする　弘前市　高森　一呑
なにくそと終着点を引き伸ばす　河内長野市　穂口　正子
謝罪より核戦争のないゴール　つくば市　嶋本　喬
にぎやかにご先祖様が待つゴール　橿原市　居谷真理子
テープ切る練習だけは抜かり無い　河内長野市　大島ともこ
血の通う音は正常ゴールイン　鳥取市　夏目　一粋
ゴールまで敵と味方の仲でいる　八尾市　田邊　浩三
順位など無い人生のゴールイン　堺　市　矢倉　五月
ゴールイン祝福したが湧く孤愁　海南市　堂上　泰女
どんぐりころころゴールは成りゆきに　鈴鹿市　小河　柳女
この上に天国がある蓮の池　堺　市　加島　由一

年金で目指すゴールは向かい風　塩竈市　木田比呂朗
ゴールは近い外泊許可の出るいのち　堺市　澤井　敏治
絶景も旅のゴールはマイホーム　藤井寺市　田付　絹枝
人生が分かりかけたらもうゴール　豊中市　藤井　則彦
ゴール迄の距離は神さまだけが知る　豊中市　松尾美智代
ウイニングラン輝きを振りまいて　高槻市　原　洋志
口元が滑ってオウンゴールする　三原市　鴨田　昭紀
最後の日きりりと締めた靴の紐　三田市　谷口　修平
ゴール目前すぐ寄り道をしたくなる　八幡市　今井万紗子
てにをはに振り回されているゴール　岡山県　山縣のぶ子
美しい誤解はとかぬゴールまで　横浜市　川島　良子
ゴールまた移して嗤う蜃気楼　登別市　小林　碧水
ライバルの後姿を見たゴール　池田市　栗田　久子
ゴールまでまだかまだかと突走る　鳥取市　土橋　螢
一瞬を生きてゴールは考えず　羽曳野市　三好　専平
律義なり鮭が回帰の母の川　札幌市　小沢　淳
廃炉までゴール地点はまだ見えぬ　大阪市　若本　安代
完走を果たした汗の満足度　弘前市　稲見　則彦
歎異抄ゴール手前に開けてある　西宮市　山本　義子

秀　句

恩返しできないまんま日が暮れる　弘前市　高瀬　霜石
ゴールでなかったスタート台だった　藤井寺市　太田扶美代
核廃のゴールは遠いけど目差す　香芝市　大内　朝子

河口までもうすぐ川は慌てない　鳥取市　岸本　宏章
目に見えぬゴールが一寸先にあり　鳥取市　土橋　螢
ゴールインさあスタートの新世帯　三田市　北野　哲男
熱燗で二合が今日のゴールです　大阪市　川端　一歩
川幅を拡げて桃を待っている　弘前市　吉川ひとし
土産話たんと持って行くゴール　三田市　上田ひとみ
この先はゴールラインのない余生　神戸市　奥澤洋次郎
ゴールまで続く夫婦の膝栗毛　三田市　村田　博
民が目指すゴールは核のない世界　豊中市　藤井　則彦
完走を果たした汗の満足度　弘前市　稲見　則彦
ゴール点きっと真白い雲の下　西宮市　山本　義子
いのち染めあげて人間締め括る　青森県　松山　芳生
一日のゴールに夕陽うつくしい　和歌山市　古久保和子
恩返しできないまんま日が暮れる　弘前市　高瀬　霜石
ゴールインそれから先が難しい　熊本市　杉野　羅天
わが家でのゴールキーパー母の役　茨木市　藤井　正雄
真っ当に生きてゴールは揺るぎない　三田市　上垣キヨミ
ゴール前どんどん坂がきつくなる　松原市　森松まつお
ゴールしてからが一人の正念場　瀬戸内市　東横ますみ

秀　句

二人三脚結び目きつくしてゴール　藤井寺市　鴨谷瑠美子
ゴールまで杖になったりなられたり　鳥取市　西川　和子
輝いていたくて汗とゴール迄　和歌山市　福呂　秀子

❖句集紹介❖

川柳句集『ふたり傘』

岸本宏章　岸本孝子　共著

池澤大鯰

『ふたり傘』という句集名を見て、「相合傘」のまちがいではとふと思った。しかし、読みすすむうちになるほどと納得がいった。

耐えたのは五分五分だった共白髪　孝子
いい人生だったと二人して言おう　孝子
共白髪これから先は儲けもの　孝子

奥さんの孝子さんの句を借りるまでもなく、夫婦とも無事傘寿を過ぎた意味が込められている。相合傘のイメージは、当然ながら「ふたり傘」に含まれている。平均寿命が伸びたとは言え、健康無事で揃って八十歳を過ぎるまで生きるとは大変めでたいことである。やはり為し難いことである。そのもとになっているのが共通の趣味、川柳づくりということになる。羨ましささえ感ずる。

お二人とも非常にわかりやすい句を読まれますが、それは漢語とかカタカナ語を多くは使われないということ、もとになる日常茶飯事を詠まれることによっているのでは。

お開きの催促あくび一つする　孝子
ときどきは消されぬように顔を出す　孝子
都合よく忘れ上手で生きている　孝子
なさけなや腹が立ったら顔に出る　孝子
手付かずの明日があるから寝るとする　孝子
日曜は眉もやさしく描いておく　孝子
お互いがつっかい棒でいるくらし　孝子
嫌なこと耳が上手に聞き流す　孝子

アトランダムに主婦の立位置を詠んでいるような句を拾い出してみました。夫婦揃って同席していても、ともすれば御主人の方へ主眼を置かれがちなものですが、自分は自分に物静かに姿勢を確保されている。奥さんの孝子さんは、肝っ玉かあさんのような存在なのではないかと思っている。

対して、御主人の宏章さんは、必要なことはなんでも自分で処理し、他人に違和感を抱けば、それを作品化する目を持っている。

モーニング着ると笑いが堅くなる　宏章
強化策まず監督の首が飛び　宏章
処分場に反対してもごみは出し　宏章
赤字国債僕も連帯保証人　宏章
風よけの隣の家が陽も塞ぎ　宏章
パンチよりもっと厳しいうしろ指　宏章
三食に昼寝が付いて愚痴が出る　宏章
門のない家には笑い声がある　宏章
いつの世もどじなもぐらが叩かれる　宏章
弁解が下手な友達ばかりいる　宏章

周囲に対して少し批判的な目を向けている作品をあげてみた。人の心理のエゴイスティックさとか天邪鬼っぽさとか、どうかすると矛盾する面に注目している。ほんとは、これらは自分の中にも潜んでいる心理だろうが、それを上手に取り出すには、少し工夫がいる。

その表現の洗練さが光っているのが宏章さんの作品である。

かつて夫婦とも詩人である友人に手紙を出した時、宛名を二人一緒にしたところ、奥さんに別々の宛名にして欲しいと注意を受けたことがある。言われてみれば尤もなことである。以後、同じ文面でも、別々に出すことにしている。

共著というとき、分担領域が決定しているときは問題ではないが、作品集である場合、中身が比較検討されることが想定される。それぞれの個性が確立されているとか、相補いあっている場合は結構だが、差が感じられすぎるときは違和感が生ずる。

『ふたり傘』を読んだかぎり、相補い合う関係にあり、作品面に現われるぐらい、仲良しの夫婦なのだと感じた。お二人の今後の健康、健筆を期待する次第である。

「備える」

（投句　227名）

酒井真由選

才色兼備高嶺の花がまだ独り　豊橋市　藤田　千休
物欲はまだまだとって置く余生　塩竈市　木田比呂朗
ちまちまと貯めて死んだら何とする　篠山市　酒井　健二
ポストまで行ける足腰キープする　堺　市　小林　若芽
僻村の母が備える置きぐすり　大阪市　津村志華子
僕は塾母はしっかり絵馬準備　大阪市　奥村　五月
出題へ備えやまかん一夜漬　横浜市　菊地　政勝
年金で食えず備えを食い潰す　箕面市　出口セツ子
せめてもの備え私の葬儀代　東大阪市　北村　賢子
長生きに備えて孫にする投資　三田市　北野　哲男
備蓄する後は災い来ぬように　紀の川市　辻内　次根
月からの迎えに備えてはいるが　佐賀県　真島久美子
ごみの日へ今日もカラスのスタンバイ　和歌山市　武本　碧
面倒で少しぐらいは濡れていく　鳥取市　池澤　大鯰
リハーサル以上に出来たクソ度胸　河内長野市　松岡　篤
持ち歌は一曲あれば充分だ　大阪市　江島谷勝弘
酷暑に備えニンニクレバーストレッチ　貝塚市　石田ひろ子
非常食気つけ薬も入れてある　香南市　桑名　孝雄
正露丸赤チンマムシドリンク等　岡山市　丹下　凱夫
ワクチンのないウイルスが飛び廻る　大阪市　榎本日の出

無駄ならば尚よし認知症保険　横浜市　川島　良子
備えても憂いのつきぬ老後策　つくば市　嶋本　喬
ひとりでも生きていけるか問うている　三田市　上田ひとみ
男物の靴も備えの一つです　大洲市　花岡　順子
のほほんと見えても備えは万全　富田林市　関　よしみ
しっかりと敵のシッポは踏んでおく　紀の川市　宇野　幹子
引き金に指突っ込んで備えてる　鳥取市　夏目　一粋
一年をかけて備える塔まつり　東大阪市　佐々木満作
ゆっくりでいいさシナリオ積みあげる　青森県　松山　芳生
逃げやすい場所で毎日寝ています　沖縄県　森山　文切
火事出さぬされど二階に縄梯子　池田市　上山　堅坊
笑顔だけ覚えておこう会者定離　橿原市　居谷真理子

佳　句

どの国も核に備えるための核　唐津市　仁部　四郎
備えてもマグニチュードが越えてゆく　神戸市　上田　和宏
少子化に備えロボット飼い馴らす　札幌市　小沢　淳
おもてなし先ずは箸置き選びから　三田市　堀　正和
ときめきのプランはいつも抱いている　高槻市　原　洋志

人

スタミナをつけて人生突っ走る　笠岡市　藤井　智史

地

ケース・バイ・ケース使い分ける尻尾　弘前市　高瀬　霜石

天

地震津波いまや万一ではないぞ　奈良市　大久保眞澄

軸

カクテルに軍備縮小などいかが

「数」

（投句　229名）

初代正彦選

お見事な野鳥の会の数え方　茨木市　藤井　正雄
偶数でも奇数でもないニューハーフ　四條畷市　吉岡　修
二兎追ってどっちつかずに生きている　豊中市　松尾美智代
数独に嵌まり混乱する海馬　東大阪市　佐々木満作
算数と呼んでた頃は好きだった　三田市　多田　雅尚
初心者を三人入れて数合わせ　藤井寺市　鈴木いさお
アベノミクス満腹感の無い数字　鳥取県　竹信　照彦
リハビリの数歩に汗の三ヶ月　南あわじ市　萩原　狸月
減りました指折り数え待つ日など　八尾市　山根　妙子
口数が減った十五の反抗期　三田市　福田　好文
未知数をたっぷり詰めたランドセル　奈良県　渡辺　富子
飲み忘れないか数えるひいふうみ　八王子市　川名　洋子
五人出て二人生まれて過疎すすむ　三田市　北野　哲男
複数形で叱ってるけど僕のこと　堺　市　内藤　憲彦
核心に触れず拍手の多数決　高槻市　富田　美義
数字には弱いが金に抜け目無い　尼崎市　清水久美子
あなたの愛数字にすると五十点　京都市　桝本　宏子
百均じゃ数えもせずに籠満たす　堺　市　矢倉　五月
子沢山それなり夢もくれました　三田市　上田ひとみ
ものの数にはされず片隅に居る　鳥取市　池澤　大鯰

無数の中我れに瞬く夫の星　米子市　後藤美恵子
足し算も引き算もなく凡夫婦　和歌山市　北原　昭枝
偏差値の中で溺れる塾カバン　紀の川市　宇野　幹子
失った数より今を指で折る　米子市　中原　章子
無限大握り締めてる呱呱の声　富田林市　関　よしみ
切り捨ての端数にだって意地がある　和歌山市　武本　碧
加減乗除まだシッカリとおばあちゃん　大阪市　柴本ばっは
何億もの人を救った大村氏　東大阪市　北村　賢子
しあわせな人のアキレス腱の数　弘前市　高瀬　霜石
一〇〇人寄れば一〇〇通りある死出の道　明石市　糀谷　和郎
幸せは数えきれない普通の日　羽曳野市　徳山みつこ
多数決だったらパパは蚊帳の外　弘前市　稲見　則彦

佳　句

数だけは揃えたけれど芯がない　堺　市　村上　玄也
数えなさるな階段とウソの数　奈良市　大久保眞澄
子の遠忌曲がらぬ指で数えてる　和泉市　横山　捷也
多数派の胸三寸にある驕り　長岡京市　山田　葉子
子の無事を祈る一念数珠をくる　香芝市　大内　朝子

人

万の顔それぞれ生きる林檎達　弘前市　髙森　一呑

地

1は1素数の群れに加わらず　橿原市　居谷真理子

天

小粒でも数を揃えて待ち受ける　高槻市　島田千鶴子

軸

あの頃の虚数無理数用がない

初しぐれ教室

題 ― チャンス

山口光久

いろいろと苦心して仕上げた句、自信を持って投句した句が没になったらどう思いますか。選者と波長が合わなかった、相性が悪かったと諦めますか。私は、自信作であったら、もう一度他の句会へ投句したらどうですか、と勧めます。

二人共選の場合を考えてみましょう。A選者には秀句として抜けたのに、B選者には平抜きにも抜けない事があるのです。二人の選者に抜ける確率は二～三割なのです。

柳人によっては、一度投句して没になった句を他の句会へ投句するのを嫌う方もおられますが、ある著名な柳人は「選者を変えて四回は再投句せよ」と仰っている方もいます。

ある柳社の全国川柳誌上大会で、選者十人による共選がありました。十人のうちの一人にやっと抜けたという方もおられます。三～四人の共選の誌上大会はよくあります。

【添　削】

原 予約して掴めるチャンス無いものか　孔　一

チャンスが予約できれば最高でしょうが、チャンスは不意に来て、光速で過ぎ去ってゆきます。その短い間に対処しなければならず、決断の遅れが命取りです。前もっての対策しかないでしょう。

添 前もってチャンスを生かす策を練る

原 なぜかしら逃げ足早い我が家から　厚　子

句がバラバラで理解しにくいです。作者には分っても、読者に理解してもらえない、独り善がりの句です。次の句も、逃げ足の「早い」は、「速い」です。

添 もたもたとしてたらチャンス逃げてゆく

原 逃げ足の早いチャンスを見うしない　悦　男

添 願っても無いチャンスには逃げられる

原 チャンスみて種を蒔かんと成らぬ豆　こずえ

実がなる時は「生る」です。

添 チャンスみて種を蒔かんと生らぬ豆

原 二度とない新人賞を待つチャンス　雪　菜

新人賞でも他の賞でも、チャンスを物にする、掠め取る意気込みで。

添 一度きりの新人賞をかすめ取る

原 鶴の舞チャンス到来華麗だわ　明　子

つがいの鶴は繁殖期に二羽で舞うとか。本当に華麗な舞です。

添 ペアリング何と華麗な鶴の舞

原 笑顔からチャンス到来アップ撮り　(富)恵　子

添 破顔一笑シャッターチャンス逃さない

原 ラストチャンス逃すものかと二枚腰　勝　正

添 ラストチャンス死力を尽くし掴み取る

原 老い何の其のラストチャンスにかける恋　栄　子

近頃は、老いなど何の其のと恋が芽生えているそうです。ラストチャンスかどうかは分かりませんが、老いては益々壮なるべし、といきましょう。

添 喜寿の坂ラストチャンスと賭ける恋

原 やっときたチャンス仕事も終え趣味の　旅　人

語呂が良くないです。「仕事も…趣味の」が冗句です。

添 やっと来たチャンスを生かす策を練る

原 チャンス来た早く掴めと神が云う　満寿恵

添 来たチャンスもたもたせずに掴み取る

原 株安だ今が買い時いや買わぬ　寧

買わない理由を述べた方がいいです。

添 株安の今が買い時金が無い

原 今チャンスしどろもどろと口が出ず　雄　大

添 チャンスにはしどろもどろで口利けず

原 回り道そうかチャンスの準備中　夢　香

準備中も面白い表現ですが。

添 雌伏してチャンスを待とう回り道
原 梅雨チャンスアジサイが炎え七変化　ミヨノ
添 梅雨を食べアジサイ燃えて七変化
原 目立たない位置でチャンスを狙います　安　子
添 虎視眈々とチャンスに狙い定めてる
原 二度と来ず後悔をするあのチャンス　隆　子
添 一度きりのチャンスを逃し悔やんでる
原 チャンス来たタイミングだけずれている　(田)廣　子
添 タイミングずれてチャンスを取り逃がす
原 俄雨しめた相合傘になる　風　露
添 俄雨相合傘になるチャンス
原 ここがチャンスとお茶を誘った記念の品　律　子
「記念の品」が分り難い。お茶を誘ったのですから、ちょっと雰囲気を作って。
添 ここがチャンスとお茶を誘った雨の午後
原 予選勝ちチャンス到来リオの夢　勝　治
予選を勝ったのですから、チャンスを掴んだのでは？
添 予選勝ちチャンス掴んだリオの夢
原 もう一度会えるかもなと秋祭り　(東)美智子
添 もう一度会えるチャンスは秋祭り
原 ゴミの日だチャンスト烏急降下　紀美恵
添 ゴミの日はチャンスと烏急降下
原 実力があるからチャンス生かされる　まさる
添 力量があるからチャンス物にする

【少しの工夫で佳くなる句】
原 今ですと追い風背なを軽く押す　義　徳
添 今ですと追い風背なを押してくる
原 ピンチの後チャンスが来ると信じてる　亜希子
添 ピンチの後必ずチャンスやって来る
原 こつこつと努力重ねてチャンス待つ　国　和
添 こつこつと努力重ねて待つチャンス

【入選句】
子宝のチャンスを祈る四十歳　(田)和　子
川柳が御縁で趣味の友が出来　(畑)節　子
身構えて常にチャンスを待っている　(高)弥　生
神様がくれたチャンスに手を合せ　昭　枝
今日もまたチャンス逃したドラゴンズ由　美
虎チャンストイレがまんで観続ける　喬
反論の機会を貰い疑惑増す　修　平
次男坊神妙になる婿養子　きっこ
チャンスさえあればあれば喜寿の坂　和　之
アラフォーがジューンブライド狙ってる　紀　雄
世なおしのチャンスメーカー果たしてる　英　男
秋の陽だまりチャンスとふとん干している　のり子
チャンスなどないと思って頑張ろう　開　子
あの時がチャンスだったかまだ一人　里　子
チャンスこい私は爪をといでいる　ゆかり
汗かいてつかんだチャンス生かしきる　治　子
怖がりで逃したチャンス悔まれる　(高)敬　子
夕方の安売り孫の手を取って　洋　一
不意に来たチャンスのがしたあわてもの　(山)弘　子
離婚してパトロン掴む妻の友　ひとし

【佳　句】
アンテナを張ってチャンスを逃さない　忠　貞
光速でチャンスは通過したまんま　(前)洋　子
遅咲きがチャンス戴き赤子抱く　(高)道　子
物怖じにチャンスを逃し悔しがる　温　子
チャンス待つ手と手触れあう夏祭り　(斉)宏　子

【今月の推せん句】
歯車の一つにチャンスなどはない　渋谷　重利
歯車の中の一つの歯、全体の中で流れに添って動くだけの歯、黙々とその役割を果たすだけの存在。歯車の歯の一つにチャンスなど有る筈がない。
気付くのはいつもチャンスが逃げてから　有海　静枝
あの時が決断を下す時だったのか、と、後で気づくことが多い。チャンスが逃げてから気付いても後の祭りだが。
決断の遅れチャンスを取り逃がす　栗田　忠士
折角のチャンスも時機を失することなく決断を下さねばならない。それが難しい。チャンスを生かすも殺すも決断力次第。

【私の句】
躊躇する間にチャンス逃げてゆく

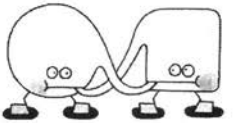
（投句224名）

暑い、としか言いようのない日々が続いて大変です。

考えてみれば、暑いだの寒いだのと文句を言いながら年を重ねて来たのだと思うと、我ながら可笑しくなって笑ってしまいました。

しかし、毎日の暑さにも負けず沢山の句を頂き感謝！です。

では……。



響き合う何と大きな川だろう　青森県　松山　芳生

（評）一句の素晴らしさに、ウーンと感じ入りました。向かい合う相手が何であれ、それは人生のお宝と言えますよね。

対局がコンピューターで気が重い　三田市　村田　博

（評）人間相手ならまだしも、何を考えているのかいないのか、感情の伺えない相手ではやりにくいことです。

十八歳右派か左派かと言われても　西脇市　七反田順子

（評）十八歳から選挙権を公使出来るようになっても、いきなり思想信条を問われてもねえ。よーく考えないと。

美しい花　美しい仏さま　鳥取市　土橋　螢

（評）そこに在るだけで「美しい」と言える花、そして仏さまも。全ての人たちを大きく包み込んでくださるでしょう。

ワタシ達絶滅危惧種らしいわよ　尼崎市　藤岡　りこ

（評）人間にだって動植物のように絶滅危惧種に近い人は居る。でも、大概の場合、本人たちは気付いていないのデス。

いい人の隣にワルい人がいる　弘前市　髙瀬　霜石

（評）アハハ、ホントだね、と思わず相槌を打ってしまいました。でも、このワルい人、意外に憎めない人かも。

いつどこで別れましょうかにらめっこ　枚方市　小林　わこ

（評）別れるのに「にらめっこ」することに意表を突かれました。もしかして次の日にも会えるような軽い別れなのかな。

通せんぼここから先は秘密基地　高槻市　安田　忠子

（評）秘密基地であるからして、ひとに知られたくないわけです。だから、通せんぼというカワイイ動作で阻止。

懸命に生きた花子よありがとう　神戸市　山﨑　武彦

（評）象の花子さんの、特に晩年の姿は私たちに多くの感動を与えてくれましたね。本当に本当にありがとう。

風みどり思いがけないひとに逢う　西宮市　西口いわゑ

（評）爽やかな季節、その風の真っ只中で逢った思いがけないひととは？昔のロマンスが見えるような気がします。

辛い時アンパンマンが飛んで来る　貝塚市　石田ひろ子

逆転の発想水はこぼれない　松山市　柳田かおる

トンネルが長い北陸新幹線　姫路市　古川　奮水

サーカスは済んだひとりを模索する　大阪市　津守　柳伸

母ちゃんヘアリバイ頼むご同輩　南あわじ市　萩原　狸月

沈黙は金だと知った戦中派　河内長野市　坂上　淳司

金婚の夫婦いまだに謎だらけ　尾道市　大本　和子

父の中折れそのまま釘にかけてある　和歌山市　楠見　章子

ややこしい人とつながりたくないわ　大洲市　花岡　順子

下心探り合いつつ徒党組む　三田市　北野　哲男

米子市　八木　千代
喋べれないのです圧力ありまして

和歌山市　古久保和子
優先権私が持っているのです

大阪市　大西　晴雄
暑いからアイスとソフト溶けてきた

三原市　鳴田　昭紀
併合をして業界に生き残る

唐津市　仁部　四郎
二心一体一心二体順不同

塩竈市　木田比呂朗
今日もまたお客のいない縄電車

佐賀県　真島久美子
だんだんと野暮な話になってきた

橋本市　石田　隆彦
お隣りの蜜はずいぶん甘そうだ

八尾市　村上ミツ子
酔っ払ってちょっとふざけただけなのに

吹田市　山本希久子
胃袋も腸も元気だ腹が減る

米子市　政岡日枝子
どちらが先に縁を切るのか見ものだな

箕面市　出口セツ子
公金と財布の区別つかぬ知事

河内長野市　藤塚　克三
汚染水タンク増えるもエンドレス

三田市　久保田千代
スクラムを組んで野心は別に持ち

松江市　相見　柳歩
交換をしようよスペシャルドリンクを

豊中市　上出　修
セリーグも戦う前は意気盛ん

奈良市　大久保眞澄
足して二で割ってフツーになれたらな

大阪市　石橋　直子
ランチならすぐに気の合う友がいる

紀の川市　楠原　富香
お隣さんいつも頼りにしてまっせ

弘前市　福士　慕情
天気良し給油満タン遠出する

三田市　上垣キヨミ
土用餅捏ねて伸ばして旨くなる

堺　市　澤井　敏治
はな子ちゃんお疲れさんとまどみちお

弘前市　吉川ひとし
ユーレイも恋に落ちれば足を出す

三田市　谷口　修平
大騒ぎした割り地味なエンブレム

紀の川市　辻内　次根
遠雷がしている曠野乾き切る

松江市　石橋　芳山
お前でも俺でもないな次期総理

松山市　神野きっこ
被爆者をハグしてオバマ株を上げ

大阪市　内田志津子
異文化も身振り手振りで解りあう

尼崎市　清水久美子
温かい目でみて欲しい同性婚

鳥取市　倉益　一瑤
四角い椅子にまあるく座ることにする

香芝市　大内　朝子
絡ませて愛を育む象の鼻

西宮市　足立　茂
水差しがヤカンに惚れて不良品

生駒市　飛永ふりこ
終活を楽しみましょうフラダンス

和歌山市　磯部　義雄
日本人の横綱いでよハッケヨイ

神戸市　上田　和宏
臨席のビールの方が美味そうで

大阪市　磯島福貴子
同床異夢それでも夫婦五十年

弘前市　高森　一呑
花はグッタリ雑草はピンピン

大阪市　平井美智子
割り勘の中に酒豪が二人居る

大阪市　藤田　武人
常識を引きずり込んだ非常識

宝塚市　田中　章子
ロボットの力を借りて介護する

10月号発表
(8月15日締切)

(平本　勝彦　画)
柳筥に２句

川柳塔鑑賞

同人吟　小川　てるみ

―7月号から

美しい横顔 読書する少女

高瀬　霜石

出版販売の減少に加え、読者離れが進む中、静かに本を読んでいる少女の知的な横顔が、印象的だったのでしょう。美しい絵画を見るようで、梅雨空に一服の清涼剤を頂きました。

ずらりスマホ読書の少女ひとりだけ

渡辺　富子

昔はおしゃべりや笑い声が、待合所や電車内などで聞かれたものでしたが、今は異様な程みな無口でスマホをいじっています。その中でひとり読書をしている少女に心を動かされたのですね。

少年よ五月の空を打ち鳴らせ

居谷　真理子

豪快で流れるようなリズム。明るくエネルギッシュで若さが溢れる句に感動しました。瑞々しい感性の素晴らしさに、脱帽です。

ふり返る涙の谷が光っている

木本　朱夏

苦しい事、悲しい事がある度に、流して来た涙も無駄ではなかった。「涙の谷が光っている」から推察できます。今取り組んでいらっしゃるリハビリも、その一つかも知れません。頑張った先に光が見えてくると思います。遠くから応援しています。

震度七それでも人は立ち上がる

山岡　冨美子

若者の汗が輝くボランティア

石田　隆彦

震度七が二回も発生した熊本地震。余震が続く中、各地から少しでもお役に立てるならと、善意のボランティアが駆け付けて下さっています。被災者の方々にとって、どれ程心強く立ち上がる元気を貰った事でしょう。一日も早い地震活動の終息と、復興を祈念しています。

十八が握る一票夢がある

三浦　強一

七月の参院選から、日本国籍を有する十八、十九歳の二四〇万人が有権者に加わります。日本の未来を担う若者の声を政治に生かして欲しいと思います。

限界になったら家を出るだけさ

安土　理恵

きっぱりと明るく潔いリズム。スカッと胸がすくような、言い切る言葉に拍手を送ります。

絵の具皿みどりがあれば足る五月

田中　恵

新緑から緑へと漲る生命力は、目を見張るものがあります。緑に包まれた日本、これから先もずっと平和が続きますように、祈らずにはいられない。

耕すと亡父の匂いがする棚田

両川　無限

ご先祖が汗水を流し苦労して築いた棚田。高齢化が進み棚田の維持管理が難しくなっている。放棄地を避けるには大変な労力と根気が必要とされます。お父様の匂いがしみ込んだ棚田に、愛おしさと懐かしさを感じられたのでしょう。

雑草の侭で嬉しいこともある

松本文子

華やかさは無いけれど、楚々としている中に凛として咲いている雑草が好きです。媚びる事もなく自然体で過せる事が、一番幸せでないかと思います。

森のたより川のたよりをする蛍

伊藤玲子

自然環境が豊かでなければ、蛍のような小さな生物は生きられません。幻想的な蛍の乱舞が見られるのは、自然が保たれている証です。「たよりをする蛍」が言い得て妙の佳句。

アルバムの昭和の家族笑ってる

多久和敬子

戦中戦後から復興期にかけて、貧しい中にも夢がいっぱいありました。セピア色したアルバムの中には、家族の笑顔が沢山残っている。昔が巻き戻ったようでとても懐かしい。

寂しさがジンと来ました過疎の駅

松本昌

乗り降りする人々で賑わった駅もさびれ、今では無人駅になっている。ジンと寂しさが胸に込み上げてきます。

気に入らぬらしい谺がかえらない

村上玄也

ヤッホーと呼べばヤッホーと返ってくる谺が、うんともすんとも返事がない。気に入らなければ谺は返って来ないのだろうか。いやはや臍を曲げた人間かも知れません。くわばらくわばら！

母という傘で育って来た昭和

佐々木満作

同感です。昭和の激動期を愚痴一つ言わず、家族の為に尽くしてくれた母。陰になり日向になり、私達を一人前に育ててくれました。「ありがとう」を何回言っても足りません。

嘘だから何度も同じことを言う

寺川弘一

嘘ならば言う度に微妙に違うから嘘だと気付きます。この句は嘘だから何度も同じ事が言えると言うから不思議です。これが川柳の醍醐味なのでしょうか。

摺り足で尚摺り足できた老後

太田扶美代

摺り足のリフレインが、お能を見ているような錯覚に陥りました。摺り足で老いが近付いているのかも知れません。

本当のわたしが湯船から出ます

鴨谷瑠美子

一瞬ドキッとしました。下手な鑑賞をすれば、美人の作者に失礼になります。皆様のご想像にお任せ致します。

若冲の鶏が羽搏く音がする

上垣キヨミ

伊藤若冲は、十八世紀の京都で活躍した画家で、微に入り細にわたる緻密な技法が注目を浴びています。「動植綵絵 群鶏図」は一羽たりとも同じ姿形はなく、今にもコケコッコーと羽搏きそうな躍動感が人気を博しています。

優しさだけ見える眼鏡かけてます

山本義子

優しくて寛大な心をお持ちだから、自然と長所が見えてくる。その上優しさだけ見える心の眼鏡を掛けていらっしゃる。幸せな方だと思います。

鉛筆がまあるくなって眠くなる

古久保和子

尖っていた鉛筆も丸くなってしまった。そろそろ眠るとしようかな！

同人吟の鑑賞の依頼を受け、沢山勉強させて頂きました。感謝しています。

水煙抄鑑賞

—7月号から

加島由一

なぜ生きる自問自答の七十路

門井　孝

大きい「テーマ」ですね。敬意を表します。人生分からないこと、答えのでない事が山ほどある。分からぬことだらけだと気付いて皆、死んで行く。幸せになること、人生を楽しむことが肝心じゃないでしょうか。

何はともあれ生きていかねば始まらぬ

株元　玲子

玲子さん、お見事。生きているうちが花、女は強い。結婚して一ヶ月で妻の方が、私より強いと悟りました。男は、強く見せようとしたり、大きく見せようとはするが、女よりは弱い。

家族っていいなあ傍にいるだけで

花岡　順子

母と妻に見守られて暮らしていた頃が一番幸せだったかも。泣きそうになりました。

バカだなと思うエライとも思う

川島　良子

政治資金を巡る「公私混同」疑惑を追及され、辞職に追い込まれた舛添知事。エリートの政治学者だそうです。また、いずれ、文化功労者にもなりそうな、文枝と圓楽の不倫報道とその後の対応、人間あまりかわらない。

母さんの飯が美味くてまだ独り

助川　和美

実家で、給料の半分以上を旅行などに使い優雅に暮らす、いわゆる、パラサイトシングルの娘。嫁いで欲しいが、口八丁手八丁の娘が家にいて便利。和美さんと娘さんの会話が台所から聞こえて来るようです。

みか月に腰かけたいと言うロマン

村中　悦男

確かにそんな三日月がありますね。「天の海に雲の波立ち月の舟星の林に漕ぎ隠る見ゆ」万葉の人達も、夜空を見上げて、想像力を膨らましたようです。

エンブレムもう何ごともないように

中村　伸子

まず、新国立競技場のデザインの変更、次にエンブレムにクレームがつき変更、聖火台のないオリンピック会場これで修まるか。

入社式覗いて我が子確かめる

髙岡　弥生

息子の入社式に付き添うお母さんの事をマスコミで知りましたが、自分流の生き方で生きるのが人生！理屈なしに拍手。

老いてなお愛しさつのるあなたの手

柳田　白沙

筋骨隆々で福山雅治みたいだった夫。手は皺だらけになってしまったが、家事を分担し食器洗いをしてくれる。やさしい手だ。

老いらくの恋過ぎし日を取り戻す

井上　つよし

やりましたねえ！つよしさん。恋して振られて、又、恋をして、懲りずに愛して又、捨てられる。恋はいつでも夢の中。青春万歳！

68 恋心を詠う（2）

いわゆる「恋に恋する年頃」というのは中学～高校ぐらいと思われますが、その頃の純粋な「人を恋うこころ」は幾つになっても失せないものです。川柳に表われた恋心を見ても、その瑞々しさは青春時代と少しも変っていません。

ただ、若い頃と違うのは「異性に捉われている時間」です。青年の頃ほど異性に執着していないのは、「生命力が弱まった」証拠ですが、考えようによっては、「他の事に集中できる時間が増えてありがたいこと」でもあります。

恋ぐらいできます髪も染めました　工藤千代子
髪染めてこれが最後と思う恋　佐藤　伸子
ノイローゼほどに悩んだ一目惚れ　奥田　由美
やっかいな感情　恋をしたらしい　久保田千代
ヤキモチに気付き気付いた恋心　森だがやん
靴までも光って見える恋敵　高橋　岳水

幾つになっても「恋ぐらいできる」という心意気があれば目にも生気が溢れて魅力が増します。そして、恋心はおしゃれ心に繋がります。髪を振り乱していては恋もできません。

恋は心身ともに活気づけますが幸せな家庭生活にヒビが入るほど「平常心を失くさせる」厄介な感情でもあります。また、独占欲が強くなって「ヤキモチ」に捉われたりしますが、これも生命力が旺盛になった副作用の一つです。しかし、「恋敵に負けておれぬ」と奮い立つことによって、ヤキモチという負の感情をエネルギーに転換することも可能です。

へいへいへい恋は現役燃えてます　飛永ふりこ
ラの音で鳴るあの人からの電話　東槇ますみ
逢いに行く蜂の羽音に切り替えて　守田　啓子
立ちこぎの自転車恋は今佳境　栃尾　奏子
スキとだけ書いて五月へ出す葉書　平井美智子
ラブレター貰って飯が倍うまい　富田　蘭水

前号はほとんどが「ひっそり秘めた片想い」の句でしたが、右はそれぞれ堂々と燃える想いを述べています。

高ぶった気持の「へいへいへい」は「学園天国」でしょうか。彼からの電話は明るい「ラ行音」というのも、会いに行く胸の高鳴りを「蜂の羽音」というのも的確。「立ちこぎの自転車」の勢いと危うさも「佳境」を表していて見事です。

スマホやメールの時代になっても「ラブレター」の奥床しさや、繰り返し味わえる嬉しさは格別です。

配線がつながり彼と初デート　宇野　幹子
本命へ目力入れるアイライン　大内　朝子
雨もよし愛の芽が出たジャンプ傘　平松かすみ
相合傘胸に手が触れ躍る胸　矢野　良一
老いの恋まだカルピスの味がする　森本　吉則
主治医への恋は退院する日まで　上垣キヨミ

ためらいながら伸ばした恋の配線が繋がって「目力」を入れて初デート。恋する二人には「雨もよし」。ふと手が触れた胸のふくらみに「ドキッ！」とするのは純粋な青年の頃と同じ「カルピスの味」でしょうか。無事に退院できるのは嬉しいことですが、素敵な主治医と会えなくなるのは残念至極。だが、病気が再発しても「再会できる」楽しみがあります

『麻生路郎読本』余滴（36）

「新川柳」の路郎②

桒原道夫

「新川柳」四四号（明治44年8月）に、「奈良武追悼詩會詠草（短詩社）」が掲載されている。路郎の句すべてと、五葉・水府・青明の句を一句ずつ挙げておく。

逝きし君の友となりけり忌を修す　路郎
貧血の人なりしとか讀む悲し
おさらばの日より數へて一年目
知己もなく淋しく逝きし友の日よ
容れられず逝きしとか世は面白し
星一つ見出でて君のまなざしと見る

五葉

日よ曇れ行衛を知らぬシヤボン玉　水府
川柳家といはるるを君恥ぢざるか　青明

（一九一一、六、一一夜作）

奈良武について、河野春三は『川柳総合事典』で、次のようにまとめている。

〈一八八〇～一九一〇　本名・竹村龍津。明治一三年七月一六日、石川県鹿島郡徳田村に生れ、三三年七尾中学第三学年修業、同年九月京都市四川学舎に入る。同三五年四月出京、三八年横浜市山下町の＊アランオーストン商会に入社。同四〇年幻怪坊、半魔、六橘、喜代志の四人と横浜に川柳社を設立。翌四一年一月「新川柳」創刊、同人一〇名となる。それより先、回覧五句集「蘆蟹」第二号で「紙一重扨ても凡夫の浅間しさ」が天位を得る。作品集に〝柳俳無差別句集〟と銘うつ。明治四三年六月一二日没。享年二九。一七字天に昇つて星となれ（明治43、奈良武号）〉

＊英国人、アラン・オーストン（一八五三～一九一五）は、一八七一年頃に来日し、横浜で貿易商を営むかたわら、水陸動物採集家として知られた人物。

奈良武の「柳俳無差別句集」（全七二一句）が、「新川柳」三二号（明治43年8月）に掲載されている。筆者がチェックした句を挙げておく。

塔の脇からヒヨツコリと月　明治38年
不取敢金魚入れとく金魚鉢　明治39年
諸肌を脱いで鏡に小半時
風船の行衛いづくと口開いて
アヽといふ詩人の口へ星隕ちて
蜂が來て藤の花房ゆらぐなり
青春の眼にもろ〳〵の蜃氣樓　明治40年
夏座敷机の向きをかへて見る　明治41年
春風や幾人の氣を狂はせて　明治42年
シヤボン玉幾つ吹いてもみんな消え
水仙や君病むと今日文の來ぬ
ゆく春や君が言葉の慊らず
日蝕や巨艦動かず海黑し
遠花火音のみにして天の川
稲妻や野中に名ある一本杉
蛇が住むと云ふ池青し雲の峯
八月を生の疲れや屋根の草
あの星と思ひし星の流れけり
留守居して晝間淋しき栗の花

「新川柳」三四、三五号（明治43年10、11月）で、「奈良武の句を評す」と題して、瓢、日車、龍郎（水府）、壹（青明）ら短詩社同人が奈良武の作品一五句を評している。そのうち、二句の評を挙げておく。

シヤボン玉幾つ吹いてもみんな消え

（瓢）理屈もこねず、説明も挿まず、シヤボン玉を幾つ吹いても皆消えたと、唯だあ

りのまゝをありのまゝに模寫した迄である。が、文辭で顯はすことのある物をより多く象徴して居る。果敢ない哀れな餘裕のある佳吟である。

（日）佳句であるに一致せずには居られない。しかし此種の句は一見強いて作つた樣にも思はれ易い。が、僕の實驗から言つても作つた句でないことは疑ひを挿まぬ、餘り修辭が自然過る結果作つた樣に見えるのである。

（龍）佳句……。

（壹）投げ遣りに咏つた處に言ひ知れぬサムシングがある。故人はこうした處にも長所があつた。後の「インキ壺」と同樣、淡い悲みを感ずる。佳作だ。

インキ壺二つ並んで赤と黑

（瓢）見付け所は宜かつたが、想餘つて詞足らずの感がある。餘りに說明に過ぎた樣に思はれる。

（日）佳い句だ。着想が固つて來たやうに思はれる。＊四十二年以降の作ではあるまいか。進歩して居る。斯う言ふ句は奈良武と遇つたつて何處が好いとは言はれない。つまり趣味の一致で好いと思ふのだ。

（龍）何と言つても佳句である。

（壹）平凡でなく、平坦である。前の「シヤボン玉」に味はれない違つた意味のサムシングがある。故人の長所を知り得た僕には殊更にさう思へる。人は平凡だといふかも知れない。日車氏の「趣味の一致」は適評だと思ふ。

＊「柳俳無差別句集」には、明治39年～41年の部に掲載されている。

日車が最後に、次のように述べている。

〈「葉柳」が未だ生存して居る時分、僕は「奈良武と玉兎朗」と言ふ一文を草したことがあつた。が、六厘坊が注意で發表は見合せたが、玉兎朗と奈良武は昔から僕も尊敬を拂つてゐた。儘に成るなら大阪へ連れて來て僕等と一緒に句を作つて見たいと思つて居た、「葉柳」へ前金を送つて來た時句を二十計り添えて來たことがある。＊三卷三號に二句丈け掲つて居る。

奈良武と青明とは一致しない。併し奈良武と青明とは先づ思想の上から言へば一致に近い方である。前の川柳社とは全然一致すまい。此點に於て奈良武は

逝く春や君が言葉のあきたらず

とも思つたらう。更に

秋風や別れて惜しき女ならず

とも思つたらうと思ふ。

六厘坊が川柳の名を借りて所謂川柳を捨て、新海路に依らんとして果て、奈良武もまた略相似た海路に依らんとして早逝した。之等の海路の航行を續けて行く者は或果て、或僕の如く川柳界から遠ざかりつゝある。

（中略）

奈良武の句の經路を考へるとこんな感がある。川柳の穿ちとか滑稽とか言ふものは存外つまらぬ。吾々が文學とか詩とかいふものゝ、單に樂みて遣るのでは無い。功名心や慰安や發見や色々のものが含れて居る。だから、自己の趣味、自己の思想を披歷すれば好いと言ふ感じから、奈良武は先づ俳句とも川柳ともつかぬものを發表した。尤な事である。そして、段々趣味なり思想なりが變つて來た。或年齡の點から或他の文學の見解から――人生とか自己の苦痛などを詩に洩す經路に這入つた。茲で奈良武はころりと倒れた。小島六厘坊もまた然りである。（後略）〉

＊〈瀉笛が鳴つて二度のおさらば〉〈添寢の母の夢はきれ〴〵〉の二句が掲載されている。

（次回に續く）

エッセー

マルクスとスミス 小判を数え合い

仁部四郎

「物価を2％上げる」というのが、平成二十四年の総選挙で自民党が勝って以来の政府の目標で、毎日のニュースになり、国会での論戦もあり、春闘の大きなテーマでもある。

「物価」とは「ものの値段」だと手もとの国語辞典には書いてある。「値段」は、「商品を売買するためにつける金額」と書いてあり、「価格」は、「ものの値打ちを金額であらわしたもの」とある。

なんだか、しりとりみたいな話だが、「風が吹けば桶屋がもうかる」という俗諺も同じ辞書に出ている。応用の範囲が広いからこそ俗諺として通用するわけで、「風が吹けば…」の話は、大学の経済学部を卒業したことになってる私が、職業として高校の社会科の教員をしてた頃には、カネやモノの連鎖なり循環を説明するのによく利用したものであった。

さて、物価は、価格の集合体と考えればいいのだが、価格は分解すれば、原価と利潤になる。かかりともうけになる。

そのかかりのなかでの肝心な部分が人件費・労賃で、それが家計の肝心な部分になる。家計の収入が、株式の配当や債券の利子、土地の地代で成り立っている人は、春闘がやや遠いところにある。

春闘といえば、「昔陸軍今総評」は今や死語となって、労働組合側のパワーも大いにイマイチである。春闘はなくなったわけではなくて、川柳塔六月号が届く頃までは、今年は、「2％」をめぐって労使の攻防が続くだろうが、労働の側が2％をクリアすることはあるまい。資本・使用者の側には、時の政府が付いているのだから、日銀券を出す力を持っているわけで2％をクリアしやすいわけである。

ここまでの話を、川柳調で要約すれば「家計簿にデフレインフレ震度X」ということになり、話の飛躍にびっくりさせるわけだが、震度Xは家計によって0から7まであるという話なのである。

仁徳天皇の昔から、労賃が物価のトップバッターでアップしたことはないわけで、だからといって、やとわれる側の人が〝主義者〟になってしまうわけでもない。某月刊誌の広告に、「皇太子殿下、ご退位なさいませ」というのがあってとてもびっくりした。そういう言説が、商品として通用する時代なのだという驚きは大きかったが、やとわれる側とやとう側の力関係が根本的に変化した時代ではないから、家計簿の敏感性は、これからもずっと点検されていかねばならない。念の為に言えば、よしんば変化したとされる時代や社会にあっても、点検は維持されていかねばならない。

NHKの夜七時のニュースで某生命保険会社が主宰する「サラリーマン川柳」が伝えられる時代になった。連合の会長が佐賀大学で「『働くことを軸とする安心社会』に向けて」と題して、話したという新聞記事に出会う時代になった。

それほど歪な形でなく〝2％〟が合成されていく時代に少しずつ近づいている。

第40回 全日本川柳2016年 愛媛大会 選考結果

（当日 686名/事前 1,862名/ジュニア 17,361名）

高校生・一般の部

文部科学大臣賞

百年後笑顔になれる樹を植える　東京　伊藤　良彦

参議院議長賞

木の椅子の温さはマドンナの温さ　福岡　梅崎　流青

川柳大賞

つるし柿ひとり息子は帰らない　青森　髙瀬　霜石

大会賞

図書館でわたしの海へ船を出す　宮城　鎌田　京子

命あるものが命を出迎える　佐賀　真島久美子

二両目はふたりの指定席でした　宮城　丸山あずさ

産声は船出いのちの帆を揚げる　新潟　若林　柳一

ラファエロの聖母にふっと君の貌　福岡　時津みつこ

マウンドのガッツ女神を引き寄せる　愛媛　坂上　俊子

笑い皺という勲章が母にある　愛媛　髙畑　俊正

空っぽのわたし祭りも遠くなる　岡山　西村みなみ

甲子園ドラマへ神も手を添える　埼玉　上野ささ音

何度重ねてもミモザの黄に遠い　愛知　樋口　りゑ

すばらしい冒険だった夫婦船　大阪　吉道あかね

小学生・中学生の部

愛媛県知事賞

広げると水平線が出るタオル　愛媛　中1　江口雄有斗

松山市長賞

タオルでね自分の心みがくんだ　愛媛　小3　門脇　巧真

愛媛県教育長賞

ひなあられ一つくださいおひなさま　広島　小2　柴田　珠羽

松山市教育長賞

せーのでね地きゅうが回ったさか上がり　愛媛　小2　田中　陽奈

全日本川柳協会賞

車窓から宮城の海に祖母想う　宮城　中2　浅野　夏希

おこらすなおれのじいちゃん黒おにだ　愛媛　小3　重森　幸輝

教育新聞社賞

新学期白いタオルと同じ色　千葉　中2　小川　華音

でんしゃでねいけないことがあるからね　広島　小1　木村みさき

妊婦さん私がゆずるこの席を　愛媛　中1　髙橋　伽菜

（太字は本社同人）

川柳塔社各賞選考規定

① 川柳塔社には、路郎賞・川柳塔賞・愛染帖賞・檸檬賞・一路賞・各地柳壇賞の六賞があり、毎年10月に表彰する。

② 自選集の作者は、すべての賞の対象としない。

③ 各賞とも、原則として同一人に同一賞を受賞しない。

④ 路郎賞・川柳塔賞については、準優秀作の場合、上位は差し支えないが、同位または下位には受賞しない。

⑤ 二賞の選考委員は、その任期中は賞の対象としない。

⑥ 路郎賞・川柳塔賞の選考要領については、下記の通り定める。

⑦ 愛染帖賞は選者が決定し、主幹の承認を得るものとする。

⑧ 檸檬賞は二名の選者がそれぞれ5句ずつ選出した10句中から主幹が決定するものとする。

⑨ 一路賞・各地柳壇賞は、常任理事会の委嘱を受けた選者が受賞句を決定し、主幹の承認を得るものとする。

（備考）

この規定は、現行の選考規定を一部改定したもので、常任理事会で承認の上、平成二十七年から実施するものとする。

二賞選考規定

① 路郎賞　川柳塔欄の入選句から5句
川柳塔賞　水煙抄欄の入選句から5句

昨年9月号から今年8月号までの一年間の入選句の中から自選し、8月号に刷込みの応募用紙を使用の上、**8月10日必着**で本社宛郵送する。

② 第一次選者は主幹・理事長・副主幹・副理事長・編集長とする。各賞15編ずつ選出し、第二次選者へ郵送する。

③ 第二次選者は折り返し、路郎賞、川柳塔賞の各選考結果を本社宛通知する。選考には順位をつけ、第一席（5点）、第二席（4点）、第三席（3点）、第四席（2点）、第五席（1点）の五編の番号を予め本社で用意したハガキに記入のこと。

④ 第二次選者
本社関係　主幹・理事長
地方関係　【4】＝ブロック　（11）＝選者数
【東日本】（2）北海道・東北・関東・信越・北陸・東海
【近畿A】（4）大阪
【近畿B】（2）滋賀・京都・兵庫・奈良・和歌山
【西日本】（3）中国・四国・九州・沖縄・海外
合計13名

地方関係の選者は、適宜交代制を取り、均衡をはかることにする。

⑤ 川柳塔欄・水煙抄欄に6ヵ月以上出句した人に応募資格を認める。

平成二十八年度二賞選考委員

第一次選者（七名）

小島　蘭幸・新家　完司・川上　大輪・西出　楓楽
木本　朱夏・鶴田　遠野

第二次選者（十三名）

本社関係（二名）
小島　蘭幸・新家　完司

地方関係　【4】＝ブロック（11）＝選者数

【東日本】(2)北海道・東北・関東・信越・北陸・東海
小沢　淳・佐藤　古拙

【近畿A】（4）大阪
江見　見清・川端　一歩・古今堂蕉子・村上　直樹

【近畿B】（2）滋賀・京都・兵庫・奈良・和歌山
居谷真理子・山田　耕治

【西日本】（3）中国・四国・九州・沖縄・海外
石原　淑子・石橋　芳山・両川　洋々

昨年九月から今年八月の間に誌友から同人になられた方へ

「路郎賞」「川柳塔賞」のいずれか月数の多い方を選択して応募下さい。

ただし、「路郎賞」には川柳塔欄作品から、「川柳塔賞」には水煙抄欄作品からの応募となりますので、間違いのないようにお願います。

平成二十八年度各賞選者

愛染帖賞　新家　完司

檸檬賞　三浦　強一　長浜　美籠

一路賞　水野　黒兎　政岡日枝子

各地柳壇賞　村上　玄也　松本　文子

本社 七月句会

◇七月六日（水）午後一時
アウィーナ大阪

早くも猛暑に見舞われた六日、路郎忌七月句会は、番傘本社の大堀正明さんを選者に迎え、多くの他柳社の方々の出席を得て、百五十四名（投句者十三名）の参加で開催された。初出席は愛知県の恵利菊江さん。句会に先立ち、五月に亡くなられた同人小野句多留さん（横浜市）に黙祷を捧げた。

今月のお話は新家完司理事長。題は「川柳に表れた買い物」。蘭幸主幹が蒐集されているピンバッジの「大人買い」の話を枕に、百均や通販、バーゲンに我を忘れる（多くは女性）楽しさや自戒が生きいきと表れた秀句を多数紹介された。奇しくも、状況が見える川柳が面白い、平明で深い、という理事長の川柳観にも触れることができて、楽しく有意義なお話に聞き入った時間であった。

（眞澄）

月間賞は森中惠美子さん（摂津市）

（司会―蕉子・真理子）（脇取―扶美代・まつお）（受付―寿之・真理子）（清記―憲彦）

席題「起きる」　水野　黒兎　選

五時に起き食事できたら妻起こす　たもつ
朝食の用意も出来て妻起こす　ひろ子
用のない人から順に起きてくる　扶美代
一番に起きてごそごそ嫌われる　将　文
起きたら居ず寝てたら言えず遠い仲　すみ子
十八歳日本に何か起こしそう　貫　一
十八歳何を起こすか期待大　弘委智
寝てる子を起こす改憲計る党　福貴子
ダッカテロ起きて九条揺ぎ出す　富　子
九条を世界にテロも起きぬだろう　修
お静かに赤児が起きる選挙カー　宏　造
起床時間が一分おくれたので焦る　公　輔
美しく転んで美しく起きる　惠美子
コーヒーが匂うトントントン起きる　蘭　幸
銀杏のかんしゃく起きるフライパン　茂
暗闇がわたしを起こす孤独感　文　代
ほっといてごらん一人で起き上がる　良　一
早起きじゃなかった不眠症だった　敏　治
起き抜けのモカがやる気に火を付ける　良　一
一本の藁を掴んで起き上がる　洋
腹の虫起きてくるのは午前二時　賀世子
起きている時の記憶の曖昧さ　まつお
堂々と柩の中で起きあがる　日の出
起きあがる勇気明るさだけが武器　セツ子
朝の風起床ができる今日がある　洋次郎
繰り返すボレロ眠れぬ夜にする　柾　子
地の底の底で何かが起きている　紀　子
何が起きても加齢だろうと気にしない　憲　彦
句作りは起きて半畳あれば良い　保　州
ハプニング起きて人間試される　楓　楽
異変起きそう積乱雲の裂け目から　浩　子
錆びかけた女を研いで起き上がる　(柿)和　夫
ドライフラワーだから起きてはなりません　ますみ
亡きひとの貌起きあがる水平線　あきこ
もう何が起きてもと言う世界観　誠　一
起きなはれこの日本が沈みそう　真理子
忌わしい事件通らぬ青葉風　洋次郎
シャキッと脳起きて来るのは真夜中で　賀世子
おいマグマずっと静かに寝てなさい　正　和
言葉をなくす起きる連鎖よテロの闇　満知子
佳
沖縄で起きた惨禍を知るドーム　桃　花
起こされたユニオンジャック揺れに揺れ　(安)和　夫
飛び起きる先ずは命の震度七　貫　一
天災が起きてはじめて策を練る　利　子
事件がどこで起きても日本人が居る　弘　一
人
白昼夢起こる同んなじ地球人　はこべ
地
起きて寝て起きてドラマが動き出す　公　輔
天
起死回生オンリーワンの町工場　俶　子
軸
自分史に起承転々起転々

兼題「迫る」　安土　理恵　選

着々と迫るイチローの金字塔　英　旺
若者に老の気迫はまだ負けぬ　キヨミ
一票の重さが少年に迫る　あや子
改憲か護憲か迫る夏の陣　貫　一
一票をよこせと選挙カー迫る　(柿)和　夫
一票は譲らぬ握手で迫っても　希久子
老い迫る眼から耳から頭から　進
オムツ入れ歯カツラCMが迫る　耕　治
迫りくる活断層に気付かない　唯　敎
七夕の天気予報を見る織女　英　夫
こちらから老いに迫ろうではないか　眞　澄
責任を取ってと女から手紙　良　一
イケメンに迫るわたしの美容法　園　江
鬼気迫る顔は誰にも見せてない　蘭　幸
迫るときあとさきようく考えや　勝　弘
核心に迫ると言葉濁される　玄　也
夕闇が迫る寂しさひしひしと　美智代
青いなあ一直線で迫る恋　ばっは
迫力に欠ける男とおままごと　万紗子
この世での期限も知らずのほほんと　将　文
迫る物あり逃げ道は開けておく　公　輔
必要に迫られ今日もストレッチ　紀　乃
老いという刺客が迫る骨密度　朱　夏
迫られて結婚迫られて離婚　とーな
老いの影優雅にかわす夏帽子　冨美子

黄昏が迫る踊っていられない　朱　夏
おぼつかない足に夕闇が迫る　完　司
一本道の向こうが崖になっている　ますみ
迫る老い負けるものかと大ジョッキ　直　樹
不意打ちの攻めには弱い生一本　良　一
迫って攻めてやっと落とした人と居る　万紗子
針千本飲みなさいよと迫られる　耕　治
宵闇が迫ると演歌の灯がともる　満　作
黄昏れは膝の下からしのび寄る　扶美代
目の前のゆたかな胸に目を閉じる　美津江
唇が迫る危ない夢を見る　六　点
夫には迫力のある声で言う　義
正論の錯覚迫るでかい声　寿　之
佳
自立してほしいと妻に迫られる　(岩)明　子
休肝を迫る阿修羅のような愛　直　樹
ひまわりに迫ると飛び出したゴッホ　瑠美子
人工知能神の領域まで迫る　まつお
有限の命へ無限の時迫る　久仁雄
人
忘却をせまるわたしの中の過去　あきこ
地
私は真剣なのと言う女　保　州
天
半夏生暑さに迫るものがある　恵美子
軸
八十が迫る恋人探さねば

兼題「愚か」　長浜　美籠　選

愚かにも人が人撃つ銃社会　黒　兎
フクシマを見てなぜ原発を止められぬ　美智代
戦の愚みな知っているはずなのに　冨美子
離脱して何かいいことありますか　正　和
賢さと愚かさいつも紙一重　(安)和　夫
愚直でもそうしか僕は生きられぬ　敏　治
戦争の愚かを叫ぶ戦中派　朝　子
愚かな行為人生棒に振る事も　雅　枝
見るよりも踊る阿呆で阿波の夏　裕　之
男のロマン家族にそっぽ向かれても　(矢)五　月
愚かだった飴と鞭とで踊らされ　和　宏
愚かだと気付いたはずが再稼働　満知子
派出所でゆっくり酔いが覚めてくる　保　州
愚かさの極みわが子を殺す親　ひろ子
竹槍でB29を追った日も　憲　彦
チャイナ服笑うしかない言い逃れ　まつお
空っ穴になるまで貢ぎ捨てられる　(清)久美子
ペコペコとなんと愚かな影法師　宏　造
有頂天思わず放す凧の糸　わ　こ
かあさんと呼ばれただけで走り出す　ひとみ
あほらしい程のすかたん繰り返す　堅　坊
幸せですか愚問でしたね再会日　遠　野
愚かさが骨身に染みてない戦火　六　点
愚妻だが僕にとっては宝物　洋
正論を捨てた愚かなシッポ切り　昌　代

アルコール愚かな僕に染めていく　隆彦
愚図だけど一途な愛に変わりない　寿子
だとしても妻に逆らうのは愚か　浩子
日記帳今日も愚かを書いてます　耕治
馬鹿言うて笑う怒るの独り者　千枝子
やっときた老いにおたおたする愚か　哲子
核に酔い核にしっぺを返される　直樹
愚妻には負けてばかりで恙なし　(柿)和夫
あほやったなあと誰にも言わんとこ　義
愚かにもけなしてみせた今の椅子　四郎
通夜の席遺産の事で揉めている　(木)明子
愚かにも自分はマシと変な自負　ひろ介
魂胆を見抜けなかったご招待　哲男

佳

今さらの恋におぼれている私　ひとみ
愚かにもすばらしき死を思うなり　恵美子
愚かさもあって互いが寄り添える　ふりこ
生き残るために愚かなふりもする　楓楽
あほやなあと優しく母にしかられる　進

人

アホやけどこれが私やねんゴメン　真理子

地

騙されてあげよう一度だけならば　柾子

天

半夏生男の背中ばかり追う　恵美子

軸

愚かさを隠した糊のきいたシャツ

兼題「スイッチ」　鶴田　遠野　選

カープにもスイッチ入れたかオバマさん　哲男
スイッチに届くコードが付いてない　雅枝
神の手に人の命のオンとオフ　将文
このボタン押せば笑顔の妻になる　進
お喋りのオフスイッチは蟹だった　篤
ONとOFF時には逆に入れてみる　靖鬼
スイッチを切り替えB案で挑む　浩子
スイッチが壊れ心も部屋も闇　(平)美智子
よう喋る人やスイッチ切ったのに　大輪
お天気が決める明日のオンとオフ　将文
スイッチをときどき入れてくれる恋　(柿)和夫
幸せのスイッチ持って日々生きる　紀子
老春にスイッチ入れて初デート　紀華
二杯目を飲むとスイッチオンになる　信子
スイッチの故障と言えぬ物忘れ　敏治
スイッチ探す君が笑顔になれるまで　希久子
スイッチのオンとオフとで白寿まで　ふりこ
スイッチオン喋り出したら速射砲　寿之
手探りでスイッチ押せば非常ベル　博
核ボタンOFFにかかっている平和　哲子
愚痴小言に耳は自然にオフモード　英夫
スイッチが君のハートに届かない　(岩)明子
温暖化四季のスイッチ狂いだす　洋次郎
恥ずかしながら妻がスイッチ持て遊ぶ　としお
運不運あのスイッチを押してから　公輔
スマホ切りやっと人間取り戻す　洋

さあ後期スローライフへ切り替える　正彦
スイッチはいつもオンですマイハート　六点
スイッチが入らぬままに大器消え　正明
スイッチを入れて機能をたしかめる　唯敎
錠剤でオンにしているのは内緒　冨美子
スイッチの届かぬところで飲んでいる　千代
負けた日はすぐに灯を消す甲子園　茂
人を葬るスイッチ軽いはずがない　瑠美子
合い鍵の部屋にスイッチ見当たらぬ　哲矢
スイッチが入り昔の恋疼く　寿之
スイッチオンほんまにええの再稼動　(木)明子

佳

スイッチバックゆっくり答え出すつもり　柾子
八起き目のスイッチ妻の手を借りる　楓楽
数人が核のボタンを持つ地球　誠一
スイッチは第二ボタンの奥にある　耕治
スイッチオフ痴呆への道切っておく　妙

人

本音スイッチむずかしいのはタイミング　わこ

地

スイッチのどこを押しても女です　恵美子

天

地に還るいよいよ好きな生き方で　わこ

軸

後期高齢スイッチバックして歩む

兼題「いよいよ」　大堀　正明　選

ピンコロリいよいよなんかいりまへん　野　鶴
いよいよの時はボケてるだろうなあ　見　清
超変革いよいよ今が正念場　正　彦
つっかい棒いよいよ放す時がきた　わ　こ
エンディングノートを買った誕生日　弘　一
病床の妻が大きな息一つ　一　文
いよいよの前に奥歯をかみ締める　朱　夏
神様が僕を指さすガン告知　真理子
胎児からノック人間への船出　寿　之
呼ぶ人があればと医師がそっと言う　ひろ子
角曲がるいよいよ帰路のない旅路　久仁雄
おいしい酒だいよいよ家が遠くなる　瑠美子
いよいよの時も慌てぬ山の神　冨美子
今朝もまたいよいよですなという鏡　はこべ
いよいよへ弱気封じる咳払い　昌　代
決断をいよいよ迫る夜明け前　菊　江
ああ父も老いたりご飯粒こぼす　保　州
いよいよの時もヘソクリ出さぬ妻　一　歩
いよいよになれば魂売るつもり　楓　楽
止めとけに男いよいよ意地になる　進
襲名へいよいよの幕上がります　あや子
いよいよとなったらアデランスに縋る　いさお
いよいよになればよっこらしょと動く　蕉　子
いよいよかつらい話をする上司　遠　野
いよいよか四人に一人仲間入り　智　彦
その時は手を握ってと言うてある　(矢)五　月
米櫃の底がいよいよ見えだした　小　雪
いよいよですね百歳まではあと三日　大　輪
茄子きゅうりいよいよ私キリギリス　美津江
臨終へ時計の音が高くなる　進
いよいよとなれば鬼にも天女にも　美智代
いよいよと言われたくない誤字脱字　恵美子
いよいよの時も咲こうね精一杯　葉　子
いよいよが視野に入った鍵の束　冨美子
いよいよの時まで社員知らされず　篤
絵に描いた餅にもカビが生えてきた　とーな
生きざまはいよいよ顔に出る八十路　希久子
佳
名人と言われて神と勝負する　将　文
いよいよとなれば号泣で逃げる　公　輔
いよいよの時は役立つアナログ派　利　子
いよいよの覚悟できずにお遍路へ　ふりこ
ザワザワが止んだいよいよ幕があく　理　恵
人
両肩が重い　いよいよパパとなる　隆　彦
地
いよいよの覚悟に似あう花吹雪　慶　一
天
いよいよか　そうかと父は目を瞑る　大　輪
軸
貧乏神がいるといよいよ信じ込む

兼題「空（そら）」　小島　蘭幸　選

星空に亡友がいっぱい住んでいる　一　歩
星空を見ながら涼んでいた昭和　桃　花
人類の宿題　空の大掃除　篤
警報が鳴ると見上げてしまう空　瑠美子
ピョンと空またいで児らの雨上り　(矢)五　月
オバマの鶴世界の空を飛びたかろ　楓　楽
スマホさえあれば宇宙も飛べるとか　りゅうこ
目の奥に木曽の銀河をためている　章　子
お空からドームとオバマ見えますか　憲　彦
イギリスの空これからを祈ります　あや子
ちっぽけな悩み答えは空にある　(岩)明　子
平和は何処に空にミサイル地にはテロ　隆　充
怠けているとあいまいな空になる　小　雪
空から見ても東京揺れている気配　公　輔
曇天がいつもわたしに紛れ込む　あきこ
飛行機雲空のほころび縫っている　宏　造
空にはいつも君の笑顔が描けます　葉　子
晴天をノックしているくまモンの目　たかこ
雨上がりの空にこころを掴まれる　信　子
モアイ像見飽きないのか青い空　いさお
涼という暑中見舞いを空に書す　満　作
宇宙ゴミ人の欲望果てしない　たかこ
スカイツリー空に挨拶しましたか　扶美代
ドローンかも知れない七夕の夜空　浩　子

いつからだろう見上げる空が好きになる　わこ
九条があるから青い青い空　セツ子
飛び魚はきっとお空に恋してる　蕉子
空気みたいな人と暮していますまだ　いさお
雷おやじ身近に思う雲の峰　敏治
ゆっくりと空を見ながら帰ります　義
虹は亡母雷雨は亡父に違いない　(清)久美子
オバマ氏を迎えた青空の無言　(柿)和夫
神さまのことはなんにも言わぬ空　完司
スルスルと空からクモの糸おりる　由一
梅雨空を笑いに変える一行詩　武臣
十分ではないか青い空がある　ひとみ
大空に一等席を予約する　万紗子

佳

とんがった君もおんなじ空の下　ひとみ
空なんか見向きもしない深海魚　野鶴
スカイブルーのTシャツ恋に恋した日　柾子
悲しみを見つめあってる空と海　真理子
青空駐車したら切符をくれました　大輪

人

虹が出るまではわたしの空だった　義

地

離婚した日の青空を忘れない　楓楽

天

道楽に生きる夜明けの空が好き　森中惠美子

軸

路郎忌に生まれた孫と星まつり

句会燦燦

六月句会を読む　岩崎眞里子

地震予知大地の脈はまだとれず　真理子
この道を曲がればきっとある出口　忠子

北も南も揺れ止まぬ大地。加えて大雨の九州…。日本中が皆様の無事を祈っている。自然界を含めこの混迷の世に暮らしながら、それでも信じたい。出口は、明日へ続くこの道にあると。

胸張ると影堂々とついてくる　シマ子
振り向かず角を曲がった肩が泣く　朝子
どんと来い沖を見据える龍馬像　美籠

確かに、人間より影の方が気力を現している。だから角を曲がり塀の影に入った時、ホッとして影は泣く。それにしても、大海原を見続けている龍馬像の影はさぞ疲れているだろう。

脈があるホップステップジャンプする　昌代
おもて・うらどっちも私みなわたし　哲子
堂々と隠れるかくれんぼだから　義

命を刻む脈拍に長期休暇はないが、疲れはリズムに現れる。大ジャンプする表や着地乱れる裏、時々隠れんぼする脈も私である。でも律儀に戻って来てくれるからまだ生身でいられる。

曲がったことしてない人手を挙げて　たもつ
ロングランに反論はなしサザエさん　美津子
ヒットする歌は心に一直線　葉子

傷ついた事が無い人も、間違った事の無い人もいない。皆、微妙に曲がりながら生きている。その代表格サザエさんは、何時の時代でも真っ直ぐ心に届きみんなに愛されている。

柳壇

毎月24日締切・35句以内厳守
掲載は原稿到着順となります。
楷書で誤字のないようにお願いいたします。
編集部

川柳塔打吹（鳥取）　野口　節子報

バラバラと空家が目立つ過疎の町　久芽代
ニュートンも団結しろと丸い星　野　蒜
バラバラだが飲む話には皆がのり　悦　子
手も足も思考回路もバラバラだ　貴　恵
嬉しいが帰省する日を揃えてよ　道　子
核のゴミバラバラ海は泣いている　美知江
どんぐりが寄って意見が纏まらぬ　節　子
バラバラに咲いて一気に花吹雪　美ッ千
とりあえずバラバラだから民主主義　幹　啓
新緑と鳥の声とに誘われる　陽之助
誘われて博打で野球棒にふる　清
誘われて腑抜けにされた三次会　重　忠
花でさえ誘う準備に香り出す　恭　子
妻の手帳誘う仲間がひしめいて　紀美恵
金と暇あれば誘いにすぐ乗るよ　義　人
誘うなよまだ天国は行かないよ　瑞　子
誘われてイエスイエスの縄のれん　照　彦
段段とお声が掛からなくなった　紀の治
この町を出ようと誘うちぎれ雲　完　司
胸襟を開くと弾みだす心　重　利
井戸端で無くても弾む立話　公　恵
弾丸で守る平和はがらす製　滋
世渡りは弾力持って悠悠と　芙美子
パチパチと弾けておどすイカフライ　龍　枝
弾み過ぎぬ様に空気を抜いている　三津子
なけなしの弾が尽きたら高齢者　芳　光
烈火弾にんげんにあり破裂する　くにこ

川柳塔すみよし（大阪）　森松まつお報

無料だと聞いて躊躇の猜疑心　大　子
無料やて嬉しいけれど後こわい　美世子
無償の愛受けてる方も辛くなる　ゆみ子
老人無料の時は年齢ごまかさぬ　隆　昭
健康へなんぼわろてもタダでんねん　朝　子
サンプルを沢山貰い大散財　廣　子
無料ですスポンサーさん太っ腹　芳　香
肩たたき無料の孫の後ねだり　シマ子
笑顔なら無料あなたに差し上げる　一　歩
私無料御用の方はお知らせを　舞　夢
時を越え解説流る被爆地に　妙　子
黒を白とあえて言い張る解説者　日の出
予報士が悩み続ける梅雨の空　敏　晴
家計簿の赤字解説なら得意　(矢)五　月
解説をしたら野暮でしょ親父ギャグ　満知子
解説にこだわりがある講釈師　柳　弘
解説は理解するのが目的だ　公　平
呆けはったな同じ解説三度四度　たかこ
熱戦に水をかけてる解説者　由　一
誕生日ぐらいはボクがおごったる　勝　弘
我が家族同じ星座で同じ干支　大　輔
めずらしいものは真っ直ぐ仏壇に　克　博
珍品に噂が噂呼ぶ高値　美　籠
めずらしやポンと割ったら黄身二つ　福貴子
大山に包み込まれて夜明け前　志津子
出来ちゃったそれ入籍だお披露目だ　安　代
バタバタと店仕舞して玉の輿　半　銭
ゆっくりもしてはおれない余命表　保　州
べっぴんを連れバタバタ人を切る　重　信
バタバタとするんじゃないと寺の鐘　宏　造
もうばたばたすることもない棺の中　いさお
児は泣くし電話は鳴るし客も来る　まつお

川柳ふうもん吟社（鳥取）夏目　一粋報

九条がきっと地団駄踏むだろう　洋　々
煙突のけむりになってゆく命　賢　悟
古文書をめくるやさしいピンセット　三千代
恩讐を離れて春の絵を描こう　鬼　桜
地団駄を踏んで見つめる拉致の海　無　限
日の丸を背負う自覚がない天狗　義　徳
てにをはの向きを変えたいピンセット　(平)節　子
あっけなく今年も父の日が暮れる　毅
首んじゃこつかんでせめて来る女房　清　信
息止めて金箔をはぐピンセット　(山)節　子
呆気なく小指で首になりました　一　瑤
大鯰地団駄踏んで揺らしたか　芳　子
多数決に勝てず地団駄踏む野党　みゆき

悪ガキをつまみ出したいピンセット　茶人
喉仏拾う大きなピンセット　敏夫
首んじゃこ押さえられてる花名刺　地佳平
首んじゃこつかまれ亭主ゲロを吐く　回春子
母の日にくらべ父の日呆気ない　振作
家建てて子供育ててグッドバイ　野蒜
癌を摘むピンセットには神が棲む　とも湖
ピンセットで剥がすが如く愛薄れ　凱柳
ピンセットで摘めるほどの罪を持つ　金祥
経験を積んでも失恋はつらい　天翔
断捨離で何度も着ては又仕舞う　幸子
できるなら食べて太らぬ人になる　昌鼓
人生の終いだけでも美しく　圭一郎
地団駄を踏んだら鼻の差で一位　蟹郎
自慢した喉呆気なく鐘一つ　美恵子
悔しいが地団駄踏んだ敗戦記　妻子
通夜でみる人の一生あっけない　房江
砂の城波にのまれて呆気ない　勲章
軽はずみ元に戻らぬことがあり　清帆
蜷川さんのあっけない死へ世界泣く　孝二
ピンセットで抜いてやろうか核はとげ　善平
呆気なく三日坊主で禁酒解く　一粋

（「首んじゃこ」は方言「首根っこ」）

川柳塔みちのく（青森）　**稲見　則彦報**

一人っ子猫をオモチャにして遊び　井蛙
古里の「夕やけこやけ」身にしみる　京子
ぴたぴたと親子の絆おはぎ餅　花匠
少年の夢が転がるおもちゃ箱　芳生
後添いを迎えグッピー大はしゃぎ　風来坊
リカちゃんがすっぽんぽんで眠る夜　則彦
指揮棒の先に小鳥の歌がある　劦
頬叩く力士しだいに燃えてくる　慕情
ひとつずつ校歌が消える過疎の村　美鈴
なつメロがいいね妻とは同世代　隆樹
夕日落ち別れ話しの無人駅　一呑
文部省唱歌がとれぬ盆の窪　黙人
カタログが届くと歌い出す鸚鵡　ひとし
濡れ足でぴたぴた逃げる子の笑顔　初枝
過去のある我が足跡を浪が消す　小とみ
恋はまっさらあなたの歌をうたえない　夕香
慕うのは勝手同情お断り　のぶよし
あの人を慕ったことはまだ内緒　柳子
紙鉄砲作って遊んだ少年期　龍馬
身の程に合わせ歩幅をつめている　規子
鉄砲や戦車もあるぞおもちゃ箱　きよし
今朝も又愛犬慕う老いの徒歩　呑舟
漁火を慕い集まるイカの群れ　重虎
腹太り家計簿痩せる職の秋　つとむ
スマホより馴染んだガラケイ手放せぬ　ふさゑ
振り向けば銚子の数の歴史なり　花峯
節くれた指は持たない観音さま　氏加子
リストラでぽっくり折れる棒グラフ　一花
歯車のひとつ社長も会長も　霜石
筋書きの通りに行かぬ老いの道　洋子
半熟卵スパッと切っていざ夏へ　和香子

竹原川柳会（広島）　**古田　太虚報**

川柳に時をあずけてうれしい日　寛

牧野芳光選

デジタルの世にたじろがずペン習字　則彦
進む世にやっとスマホでしがみつく　薫
味噌汁が薄いそこそこ倦怠期　美知江
母はまだ独りで行けるコンビニへ　英子
秒針を止めて下さい五月闇　加央里
我が暮らし無駄は無いけど腹にある　五月
でもがある三角形の底あたり　美代子
味噌汁の豆腐が睨む朝寝坊　すみれ
母を看る話空気が動かない　栄子
連休が終わって毎日が無色　芳山

佳句地十選（7月号から）

矢倉五月選

ポジションはどこでもこなすでも補欠　洋志
江戸っ子に無い故里を持っている　慕情
横座りすれば自信がゆらぎ出す　アキ
口癖にならぬ程度にありがとう　シルク
ボクの名が「パナマ文書」に出てこない　勝弘
泣き真似をしつつ逃げ道考える　一瑤
詮索はよそうそれぞれある事情　ひとみ
守備範囲広くてエラーの数も増え　見清
卒業のない晩学にルーペ拭く　弘子
どの国で観ても素敵な青い空　順子

潮騒に抱かれひと時恋ヶ浜　弘子
時間忘れて遊べるものがありますか　蘭幸
三時にはバイクがニュース連れてくる　夢香
一粒の重さを語る砂時計　輝恵
想い出のドライフラワー語りかけ　汎美
川遊び岩にかぶさりこうら干し　半徳
胸の内書けないままにペン乾く　比呂子
筆太の墨の乾きを待つ清書　栄香
乾いた胸に詐欺師の言葉優しくて　淑子
拉致家族涙の乾くときがない　昭紀
明日は我が身介護の乾き効くサロン　慶子
背伸びしてみてもかなわぬ人がいる　笹舟
時々は背中を抱いてくださいね　千代美
背景が気になる友の旅写真　京子
バーゲンセール背伸びして見る程でない　規代
号泣は子供男は背で泣け　宣之
背伸びして誕生日ですマイク持つ　栄恵
一片の遺書かも知れぬ父の背　敬子
エスカレーター人生滲む背が並ぶ　幸子
夫の背を見て来た五十年たった　笑子
はいどうぞままごと遊び終わりなし　歩美
荒っぽい言葉の中にある本音　貞子
粛々とツバメに学ぶ処世術　厚子
暴れん坊寝たら天使に見えてくる　史子

城北川柳会（大阪）　近藤　正報

イメージと違い遠い孤独を秘めるバラ　義昭
太った医者にもっと痩せろと言われても　節子
ありがとうが生きてる母の蝶結び　柳弘
児に躾親は悔悟の北の森　縣筰
十代の大志いまも抱く傘寿　いさお
ボールペンより替え芯の方が高い　村博
酒止めと妻とヤブ医者手を結ぶ　五月
二番目に好きと悔しいことを言う　洋志
腹立ちをおかしさに変え吹き飛ばす　杁香
好奇心まだまだ明日を覗きたい　朝子
沖縄の空は怒りの色で染め　一歩
五線譜にあじさい色が跳ねる朝　麗
爪赤く染めて今夜は無洗米　榮子
おかしくもないのに騒いでいる孤独　賢子
灰色の広野に赤い趣味一つ　堅坊
明日へ翔ぶ夢を抱いてるカタツムリ　野鶴
園児達多彩な色で夢描く　高志
もう無理や箸転んでもおかしない　あさ子
パソコンが舌打ちばかり進まない　星雨
結び目を緩くしておく保身術　和夫
ケータイで操縦されている平和　直樹
美しく老いてピンクがよく似合う　集一
疑えば何やら笑顔までややこしい　弘委智
手話という心を結ぶ虹の橋　満作
忘れたいあれやこれにも色がある　美智子
ふる里の空の青さは日本一　たもつ
イメージを繋ぎ合わせた虹の橋　郁夫
ただいまの声聞く母の塩むすび　公子
目をつぶりグッドイメージ掘り起こす　武彦
古漬けも傘寿も噛めば味がある　志華子
結び目を諭吉に補強させている　満洲夫
紫陽花の雨七色の虹を呼ぶ　克己
夕闇に乙女の色香風の盆　千恵子
曲げてまで手を結びたくありません　勝弘
平和行進色とりどりの旗が揺れ　正

川柳塔唐津（佐賀）　仁部　四郎報

逝く道のすずむし達の葬送曲　實
カルテには患者の勘も大事です　四郎
被災地に黙黙と湧く自衛官　蜂朗
深々と頭を下げて舌を出し　高明
挑戦をあきらめる前にもう一度　節子

富柳会（大阪）　関　よしみ報

にこにこと言葉の棘を抜いて聞く　登子
人間の愚痴抱きためて明ける梅雨　伸雄
ひと言の力時には潤滑油　田鶴子
抱くだけで俺を癒してくれる猫　清
潤いに酔ってる紫の小瓶　慶子
凍てついた夜空煌めくのは愛か　壽峰
アジサイは恋の悩みの指南役　高鷲
独り居に雨の抱擁潤う風　朋子
被災地の心潤おす両陛下　一文
故郷は無賃乗車で行く蝶々　武人
偽りの日々を重ねて潤む過去　仁
曇天を笑いとばして逝く背中　恵
十字架を抱けば憎しみは遥か　奏子
少年の潤う瞳なら明日　寿之
逢いに来た海が朝から荒れている　アキ
ぎっくり腰へ酒がなんやら疼きだす　晴美
シグナルを送る蛍の相聞歌　よしみ

天辺のいつかを抱いている野心　欣之
潤っていますよ小銭ならどうぞ　森子

和歌山三幸川柳会　武本　碧報

HBほど実直な父でした　和子
学歴はあるがエンピツ削れない　あや
鉛筆を食べて広げる脳回路　ひろ子
鉛筆では様にならない遺言状　みね
鉛筆の芯から発芽する野心　菜摘
鉛筆の先に流れている昭和　富香
身を削る鉛筆人の様に似る　久
はっきりと言えず鉛筆尖らせる　美羽
下書きの鉛筆だけど自負がある　明子
鉛筆画描いて心和ませる　絹子
鉛筆の詫びてる文字が温かい　起世子
動揺をするとシャーペンよく折れる　次根
咲くよりも散る花思う歳になり　智三
干からびて森の滴を浴びにゆく　純子
一炊の夢かも知れぬ今日の幸　碧
主人公は僕さすがに一人っ子　章子
さすが鏡ありのままにか写さない　義泰
銀盤を流れるようにみずすまし　寛
ワンカップに花びら受けてさすが通　当代
さすがロボット家族になれる日も近い　あき子
大店を背負うおかみの柳腰　昇
匠の技きらりと光る町工場　敏照
びっしりの予定さすがにイエスマン　悦子
胃カメラにオペは今だと囁かれ　みつ江
ハグをして今三角が丸くなる　幹子

今ならばまだ間に合うと途中下車　義雄
許されて許して暮す今がある　昭枝
今日こそは怒るまいぞと介護中　よしこ
今日も又空気のように生きている　彦弘
育児放棄も目当てられぬ虐待死　弘子
ふたりきりスローライフにあるゆとり　俶子
ゆとりある人の背中に見る自信　千鶴
ベテランは勝負どころを知っている　日出男
どこまでもゆとり見せてる人の幅　准一
句読点打ったら湧いてくるゆとり　保州

南大阪川柳会　津守　柳伸報

三世代集い始める草野球　祥昭
子や孫にNISAの口座開く人　和雄
羨ましい生き方をするヒムカさん　栄子
戦乱の民が羨む日本国　国和
わたしはわたし人を羨むことはない　楓楽
お会いする日は本物が出かけます　修
本物は顔は見せない厚化粧　あさ子
本心かお世辞か見極めが大事　克己
食通が唸る本物まがいもの　なぎさ
本物の大阪弁だ情がある　敏治
胎教は決めておりますシューベルト　一歩
キャリアにもお辞儀教える叩き上げ　歌留多
楽な道教えることの良し悪し　いさお
避難場所子等にきっちり教えとく　ルイ子
知事でさえ公私知らぬと子に教え　郁夫
人の路ひと呼吸おくコツ教え　弘子
教え子の英会話みな通じない　東風

清純な友愛保つボランティア　更紗
初恋は清く破れるのが普通　篤
清貧を貫き邪魔は寄せつけぬ　柳伸
お立ち台したたる汗の野球帽　恭昌
一週間の唄の通りの七日間　昌紀
気がつくと記憶の糸が切れている　実
無意識に教育勅語口ずさむ　忠昭
結局は桑田真澄が勝ち残る　勝弘
老いひとり生きた重さを計りかね　弘委智
せせらぎで長閑に母は芹を摘む　志華子
錆付いた脳が五時から再稼働　博
昨日より少し光らせ生きている　たもつ

川柳ささやま（兵庫）　北澤　稠民報

怖いもの知らぬ今の子なお怖い　かほる
懐かしい乳の匂いの曾孫抱く　哲男
オバマさん被曝大地に花捧げ　稠民
よいことがあったか二階から口笛　真由
新聞休刊日ぽっかり穴が開いたよな　勇
手術前白衣の姿神に見え　開子
機械化へ苗も持たずに田植えすみ　可住
自家製の暦で畠に種を蒔く　幸子
人生のお釣りを生きる八十路坂　照代
人生はプラスマイナスくり返し　美智子
神は居る大地に一人風笑う　さゆ子
指も目もラップの端を探せない　善輔

川柳同友会みらい（鳥取）吉田　陽子報

予期しない言葉に胸が熱くなり　章子

核保有複雑なグルだと思う　美恵子
里の秋守る祭りに子が足りぬ　和之
八分目で話を終える丁度よし　みち子
踊り場の足踏み野心抱きながら　葵
万物の目覚め促す雨うれし　和代
歳月は泡沫の夢ばかり溜め　和郎
春らんまん散り際などを考える　真帆
二十一世紀枠優勝してもいいですか　みどり
非正規がまずリストラの的になる　信子
自助努力だけでは止まぬ雨しとど　陽子
列車行く牛の涙を溢れさせ　千恵子
散り際に全力かけている桜　一眸
人間という枠越えて鳥になる　華蓮
花冷えのそれから人を信じない　遊子
人間の列に居るぞとストレッチ　安子
お弔い現世の義理が触れてくる　公弘

川柳塔さかい（大阪）　村上　玄也報

鳴呼きょうもずるずると三次会　敏治
楽しんで来いと小遣い呉れる夢　さくら
温室に咲いて自然の山知らず　日の出
奈良盆地海が見たくて背伸びする　ヨシ枝
楽しんだ後の請求書がこわい　月子
日々好きな事出来て老いるもまた楽し　シルク
ありったけずけず言うてさあ去のか　扶美代
陽にすかし衣魚の数よむ一帳羅　世紀子
しとしとの雨を楽しむ文庫本　ひろ子
ぽつぽつと想い途切れず夜が更ける　半銭
人生の山は気付かぬまま過ぎた　かりん
ぽつぽつを辛抱強く聞く主治医　ゆみ子
山ガール山の怖さをまだ知らず　五月
酒入り死火山がらり活火山　澄空
また一つひと山売りの八百屋消え　素頓馬
雨上がり竿のしずくがぽつぽつと　妙子
アルバムを辿っています蝸牛　みつこ
くよくよを捨てろと山に嗤われる　玲子
亡夫よ見よ植えた杉苗山飾る　芳江
古着の山ケチと未練で積み上がる　永久
楽しいな毛生え薬が効いて来た　清
一つや二つあると楽しい内緒ごと　好
煩悩に向かい合ってる山籠もり　としお
楽しみを仕事にしたら辛くなる　憲
職退いて時間気にせぬ暮らし向き　雅明
楽しかった夢は眠る前に見る　時雄
引き返す決断だって要る登山　玄也
山ほどの資格があってフリーター　憲彦
休肝日おもちゃとられた子に還る　誠一
ぽつぽつと虫に食われた記憶力　和夫
ルンバのリズムに暫しは蝶になっている　俶子
もらい種どんな花かと水をやり　舞夢
山里に民家の明かりぽつぽつと　八千代
父を超え登りきれない山がある　唯教
ぽつぽつがざあーと来たのでお茶しましょ　天笑

高知川柳社　小川てるみ報

平和論冷めた視線へ点火して　哲史
褒めそやし孫のやる気に火を点ける　陸宏
気短の妻が握った導火線　てるみ
点火などしたら止まらぬ酒の量　圭二
点火して軌道に乗れぬままの恋　千鳥
胸の火を点して明日へ歩み出す　千恵子

川柳茶ばしら（愛知）　関本かつ子報

健康に恵まれ長寿腹八分　雅美
サバイバルレースゴールは見えてきた　遡行
仲良しになるあめちゃんを持ち歩き　美千代
嫌だとは言えぬマグマがたまりすぎ　まみ子
自分にも短所といつも言い聞かせ　かつ子
居酒屋で心ほどける国訛り　ヒロ
震災の苦労経験無駄にせず　洋二
誉め言葉直ぐに萎んで悪口に　辰男
自分さえしつけ出来ずに母となり　もこ
無位無冠縁がなかったトラの巻　光弘
巻いて良し握っても良い祭りすし　たけし
トピックス彼方此方世界飛び回る　マサ
夕食に手前勝手の手巻き寿し　靖博
夢うつつ想定外のめぐり逢い　和子
操った核にあやつられる悲劇　直樹
女子会の店の決め手はクチコミで　ともこ
マスコミの情報少し斜めから　ふみ
情報をうのみにはせず斜に構え　孝代
まあいいか自分に甘く目をつぶる　由夏
運動会母の手作り干瓢巻き　幸子
お年玉お母さんには預けない　正博
ネジ巻いて老人だけの米づくり　隆彦

もう一花咲かせるつもりネジを巻く　旅人
挨拶はしつけの初め声高く　明信
きつ過ぎずやわらか過ぎずしつけ糸　正美

川柳塔鹿野みか月（鳥取）福西　茶子報

朝顔が咲いて日本の夏になる　すみれ
朝顔のしぼんだ花は爺と婆　照彦
朝顔の苦労ばなしを聞く窓辺　茶子
あっぱれな男も此の世去って逝く　みさ子
ぶれてない朝顔の蔓左巻き　ゆり子
朝顔を見ると数えてしまいます　綾子
二度と無い生きた証へする感謝　富久江
ヘルペスが行列をして胴を巻く　重忠
あっぱれと言われて今は留置場　文道
恥の無い生活を好む鬼瓦　八重
三世代束ねて守る母の意地　実満
無いとゼロああやかこしい日本語　弘子
日々平和朝顔さりげなく開く　盛桜
あっぱれな働き米を守り抜く　小鹿
蔵は無いけれども貯金箱はある　完司
病無い借金もない金もない　孔美子
点取りは遠い昔の武勇伝　和子
通帳が○になったら別れましょう　富久江
敬老会の行列にシャッターを押す　蟹郎
無に返る時まで君に尽くしたい　螢
ヘルパーさん肉親のよう手際よい　恒
葬列のリズムの中に立ちつくす　満
行列は味が変われば伝説化　妻子
底のない箱のようです母の愛　拓庵
行列のできるお店は訳がある　かおる
京

川柳塔おっぱこ吟社（香川）川﨑ひかり報

土壇場で妻の強さを思い知る　初恵
水郷の旅情をかもす夫婦舟　放任
追い風に乗って翔びたい喜寿傘寿　いさむ
暁の波間に今日の陽が昇る　弘
倖せは夫婦茶碗を洗う時　よしみ
朝陽からもらうパワーで四股をふむ　ひかり

川柳大阪　山﨑　珠生報

説教に終わるやいなやゆるむ芯　功
湯河原に行くとすっかり気がゆるむ　まつお
鉛筆の先がゆるんでしゃべりだす　芳香
ゆるんでる貴方の顔に優しさが　美花
セコすぎる都知事に総理やめなはれ　司
就活生一目でわかる出で立ちで　福貴子
極楽に行くのも試験があるらしい　(鈴)いさお
面接で友裏切れるかと問われ　一歩
人生は毎日試験油断すな　和
旨そうに何でも食べる君が好き　珠生
究極のグルメは湯気の立つごはん　朝子
本物の食通だけが知る暖簾　(矢)五月
一品が安い私は鳥貴族　勝弘
給食にグルメ月一どうでしょう　美世子
痛風の痛み知ってるグルメ通　万紗子
G7何も決まらずグルメだけ　紀雄
夏なのに懐だけが冷えていく　美濃
ザルそばはキュット締めるが命です　かよこ
見て聞いて食べてグルメのど真ん中　柳弘
飢えと冷え闇から生き抜いた命　賢子
冷え性であなた居ないと眠れない　克己
子を産めぬ嫁は冷たい目で見られ　温子

京都塔の会　山田　葉子報

隠しても目もと手先が喋り出す　哲子
欠点をもう隠さない八十路坂　堅坊
バスツアー夫さかなに熟女たち　ふりこ
公表を出来ない恋の隠れ宿　欣之
おばちゃんの口を封じるカニツアー　美津子
元彼と元カノ出逢うツアーかな　円笑
打ち解けて楽しかったがこれっ切り　元一
不器用でいつも明日に遊ばれる　健一郎
ケータイの音が知らせた隠れんぼ　千賀子
老いの坂私が先に隠れんぼ　弘子
きっぱりとけじめ昨日を振り向かぬ　紀乃
白黒をきっぱりつけて孤立する　朝子
きっぱりと好きと嫌いは言っている　泰夫
そっと添える遊んでる手にある美学　公子
隠し子のままで良かった都知事の子　北舟
きっぱりと濁り消すため旅に出る　保子
遊び好きという一病を持っている　かずお
空想の世界で遊ぶ好奇心　光久
遊びではないだろうけどG7　求芽
しんどいとも思う遊んでる毎日　見清
婦唱夫随で恙なく行くバスツアー　比ろ志
ベルトコンベアー乗った心地のバスツアー　文代
母から娘に伝わってゆく隠し味　葉子

一言を隠さず言えば済む微罪　美籠
歳隠しエトはパンダと言っておく　忠子
睫毛が暴く左目の隠し事　弘之
おばあさん包み隠さず話す歳　啓子
照れ隠しに言うたジョークで座が和み　則彦
隠し味聞けばよかった母の味　万紗子
隠し事何もないのも嘘っぽい　正彦
五十年経ってハネムーンなぞる旅　英旺
雑念をきっぱり断った空の青　洋志
おホッホッホセレブの驕り見え隠れ　宏子
遊ぶのも疲れる年になりました　満子

はびきの市民川柳会（大阪）永田　章司報

美しい菌が男の骨を抜く　欣之
深刻な空気を包む無菌室　みつこ
商店街リンを鳴らして邪魔よ邪魔　光男
法違反精査精査と逃げる知事　仁
雑菌を糅にすくすく子供達　高鷲
目に見えぬ菌がうようよ腹の中　壽峰
ばい菌を撒き散らしてる春霞　シルク
相合傘好きなあなたの肩が濡れ　ちづる
違反など気にもしませんあの政府　雄太
バイキングタッパーウェアそっと出し　洋一
妻の留守違反行為を企てる　遠野
タバコ辞める言うてこっそりホタルする　ヨシ枝
雑菌の根強さ見せる梅雨の入り　美籠
青空へ新樹の風の駆け上る　美喜
長命の証元気な曾孫抱き　敏
赤信号誰も居ないな渡っとこ　さくら
突っ込んで来た自転車赤信号　アヤ子
酒飲んで飲めぬ夫がアッシー君　喜久子
9条を無視する制度違反です　千鶴子
晴雨兼用便利な傘を持ち歩く　美代子
雨のあと百均傘が捨てられる　フジ
落し物傘が一番多いとか　かつ美
藪蚊でも菌を持っている矜恃　清
アメリカの核の傘もう危ういぞ　ひろ介
ブレーキを踏み間違えてまっしぐら　一文
ヒロシマを焼いたあの日の黒い傘　いさお
運転中スマホもチューも違反です　六点
校則があるから犯す反逆児　章司

川柳塔わかやま吟社　川上　大輪報

梅雨最中まだまだ止まぬ妻の愚痴　紀子
紫陽花に梅雨の音符が弾んでる　和香
青梅雨に人のこころの置き所　めぐみ
哀愁が梅雨の傘から零れ落ち　寿子
梅雨だけど気持ちいつでも晴れマーク　ほのか
相合傘君と楽しむ梅雨さ中　徑子
大勝負互角の虫が光り出す　まさみ
ひいき目も互角と言えぬ実力差　准一
互角だと高を括っていた誤算　紀久子
腕は互角狡い武蔵が勝っただけ　愿
照れ隠しトートバッグの中にいる　英子
木から落ちしきりにゴリラ頭掻く　日出男
照れ笑いしながら恥を掻いてきた　あかね
照れ笑いして失敗を消しておく　大輪
五月晴れ負けるが勝ちと知ってから　夕胡
ゆびさきまで晴れ晴れ水にながす過去　あきこ
たった今ねばならないを捨ててきた　知香
舞い終えて仮面を脱いでゆく両手　小雪
オホホホホ今日は夫が留守ですの　保州
嘘ばれて心晴れ晴れすっとする　よしこ
障子に目玉やき今日の天気晴れ晴れと　弘子
大和君晴れ晴れ頼もしき未来　克子

岩美川柳会（鳥取）　山下　節子報

気が急くと字が踊り出す震えだす　重忠
俺の椅子一体どこにあるのやら　圭一郎
一本のペンに心を躍らせる　一粋
角のある椅子にまあるく腰を掛け　一瑤
一日の悪さざんげの手を洗う　天翔
Tシャツが梅雨の合間で陽と踊る　茶子
平凡な日々吉報に胸踊る　公子
傷口を洗ってくれた聞き上手　美恵子
いっつでもうれしいときは踊りましょ　蟹郎
一晩中踊り明かした地蔵盆　たぬ
前の席椅子がおいでと呼んでいる　菖子
定年の椅子に追憶深くする　清帆
認知症私はきっと街の華　幸安
川柳会出掛ける前に脳洗う　敏子
うろうろと天国行きの道探す　雅女
信頼のトップの椅子が大振れだ　弘子
一言に踊らされてる調子者　節子

プラザ川柳（大阪）　坂上　淳司報

物差しでピシャリ昔のおっ師匠はん　淳司

BSのシネマがロマン巻き戻す　修
物差しでは計り切れない亡母慈悲　克三
コルセット巻いて胃腸が虫の息　五月
かんぴょうが少し甘めの母の寿司　清乃
巻き戻し詫びの一言親不孝　正子
人間を計る物差しありません　一彌
知恵回る孫のつむじは左巻き　久美子
特価品友から友へスマホして　篤
物差しの単位が違う貧富の差　弘光
文春が掲載すると真実味　悦夫
ただ一度たたいた事が胸の傷　和代
渦の中オバマの鶴が舞い降りる　政夫

あかつき川柳会（大阪）山本昌代報

七歳の勇気を神に守られる　たもつ
きりり立つ一本杉に学ばねば　紀乃
海の字の中には母がいて深い　黒兎
3・11刻が止まったまま5年　克己
新しい判断したか妻家出　紅絵
忘れたらどうしょ君の顔君の声　千代美
折り鶴に託して核のない明日　浩子
ニホニューム化学苦手だけど快挙　愿
願い事唱える間無く流れ星　福貴子
送料で買える野菜を子に送る　哲男
忘れないでとライトアップ熊本城　満知子
メモの意味思い出せない予定表　堅坊
食べてるか母から届く夏野菜　栄子
一瞬の虹に砕けたわだかまり　久美子
オバマ氏の鶴は平和を忘れない　朝子

仏壇の陰から親の見えかくれ　見清
忘れ物大抵戻るいい国だ　篤
出先から帰れば鍵が鍵穴に　蕉子
天辺に立ち人生の有頂天　高鷲
七色の虹立つ梅雨の雨上がり　壽峰
先輩の罪をかぶって顔立てる　一文
アロンアルファ指が離れず困ってる　(櫻)秀夫
反骨のアリこそ真の愛国者　義泰
「忘れたは」とても便利な逃げ口上　喜代志
梅雨模様忘れたい事へばりつく　美智子
核ボタン持って広島慰霊する　康信
母の目で育児書を読む岩田帯　隆昭
蛍火がラブコールする五月闇　英夫
こんな元気親に感謝のDNA　惠美子
親という嬉しい役をやっている　穩夫
髪の毛を逆立て女性議員立つ　鮎子
彼を見た途端借金思い出す　(松)秀夫
呼び出し音三回親の無事を知る　敏子
発車した瞬間急行だと気付く　シマ子
子の戦死祝ってやるとアベが言う　ひろし

ほたる川柳同好会（大阪）水野黒兎報

半分わけさっと次男の手が伸びる　柳童
早いなあ今年半分過ぎました　堅坊
半分こ孫は大きい方をくれ　順子
カンパイにグラス半分一気飲み　正子
辛いこと半分持ってくれる夫　純子
半分は親に感謝の初賞与　容子
口数は妻の半分言い敗ける　黒兎

終電に駆け込み乗車ほっとする　奈津子
はかなさを蛍火に乗せ夏は来ぬ　美佐子
免許返し後部シートの乗り心地　輝
どうも俺車に乗ると人変る　信男
これで良しじっくり思案した結果　久子
大器晩成じっくり待って古稀となる　美智代
じっくりと思い出話蛙鳴く　守啓
じっくりと寄り添う嫁を姑ほめ　長一
いいあした予感している夕あかね　桂子
痛む膝あしたは楽になるかしら　春代
熟成の梅酒のような夫婦味　郁子

川柳塔なら大久保眞澄報

僕なんか三日に一度嘘を吐く　勝弘
助成金貰うと中毒にかかる　紀雄
愛という言葉に嘘を貼りつける　完次
降り注ぐ陽の笑顔から湧くファイト　ふりこ
すぐバレる嘘しかつけず好かれます　和夫
もう止そう水掛け論になりそうだ　甚之市
突然の告白嘘から出た真実　柳弘
過疎の村メインディッシュは星の雨　貫一
湧き水に森羅万象光り出す　喜太郎
結末はみんな許してあげる嘘　惠美子
蛍舞う里に静かに降る民話　國治
二日酔い酒より旨い朝の水　盛隆
絶対に降らせてならぬ放射能　富子
三途の川渡れるようにスイミング　優
嘘信じ投じた票は今憤怒　史郎
優しげなことばに潜む嘘の数　妙

くもり空春の訪れ黄砂降る　佳世子
政治家の嘘は不起訴の闇に消え　薫
嘘でいい加齢のせいと言わないで　奈津子
いい嘘は三度言われりゃ信じます　倫
ありがたく薬煎じる三輪の水　美代子
方便の嘘を許しているカルテ　順啓
間違えた燃えないゴミは水曜日　おたか
悪魔から貰う喜悦の処方箋　将文
降るほどのお世辞戴き生きてきた　博一
山紫水明ふいにこわれて水に泣く　萌子
ギャンブルの毒に溺れた蟻地獄　成子
口の毒少し残して生きてます　崇明
一抜け二抜けやがて一人の水の音　良一
70億水のやがてに危機が来る　弘子
火の玉が降った八月朝のこと　ダン吉
降る火の粉かぶった傷が痛みだす　敬子
星が降る小さな幸が眠る屋根　柾子
あたたかい嘘を並べる見舞客　辰雄
被災地の空頑張れと星の降る　恭昌

川柳塔まつえ吟社（島根）相見　柳歩報

根気良くそれがクラスの合言葉　紗季
一歩ずつ根気を入れて浮き上がる　ひふみ
まだあった根気に負けぬ意地がある　邦代
神様が見ていてくれたこの根気　孝子
まだ続くのん気根気の二人旅　堂太
参加した女子会仕切るマツコ・デラックス　美智子
町内会参加で垣根ぶっ壊す　久絵
はきなれぬスカートきめて参加する　妙子
早く手を打てば微震で済んだ仲　草庵
検査結果待つ間の鼓動震度3　千里
ガンバルケン！涙がにじむ大地震　雪代
深夜の地震跳ね起きたけどまた床へ　あきら
札束に傾く少しまた少し　芳山
ダイエットウエスト擦り少し笑み　注湖
出しゃばり過ぎて少し後悔するマイク　桂子
難聴で良かったことも少しあり　ゆき
金の事少し忘れて遊びたい　ちえこ
少しだけ愛していると嘘をつく　柳歩
脱水の花瓶に少しのビタミン剤　哲子
少しだけ気持ちが届くプレゼント　俊子
潤いを少し頂く鼻の下　たけし
パトカーに言いたいことが少しある　弘充
少し少しと言いつつコップ傾けて　涼子
言い過ぎて少し間をおきメールする　静枝
少し荷を下ろそうロバも老いてきた　博子
少しずつ亀裂ドドッと水浸し　とも子
俄か雨老いに予備費の車代　幸子
雨雲が縁の下から出ていった　青帆
神のめぐみか疲れをいやす今日の雨　左余
梅雨の気配どうぞ本気で泣くといい　畔

翠洋会（大阪）　佐々木満作報

何もかも終った雨も止んでいる　義
おだやかな流れで止めてほしい雨　理恵
宇宙人と思えば夫腹立たぬ　楓楽
積立てを今からしてる宇宙旅　舞夢
宇宙行くより地球きれいにする急務　敬子
宇宙から毛嫌いされている地球　恭昌
ロボットの夢は宇宙へ回り出す　弘子
どんなんか経験したい無重力　公平
百歳も宇宙レベルじゃ瞬く間　すみ子
宇宙とは神秘のかくれ住む世界　照子
UFOを真面目に信じ続けてる　げんえい
宇宙でも失恋らしい流れ星　善之
レジャー避けごろ寝するのがマイサンデー　和夫
サンデーもマンデーもない主婦の椅子　希久子
主婦廃業やっと手にする日曜日　眞澄
九条にも妻の愛にもない時効　富子
入れ歯填めたらスイッチ入るおじいさん　桃花
無印で自由気ままに生きてます　日の出
用件のみの父の便りに愛がある　捷也
意地っ張りなお強くなる歳の嵩　昭
ウエディング鳴らしてからの不即不離　蕉子
躾け方知らない親が多過ぎる　千歩
山の中孤独に耐えた七つの子　良子
十八歳選挙の孫に未来見て　紀子
万緑に生きる意欲が湧いてくる　志華子
ルーティンワーク出来なくなって来た齢　満作

わかあゆ川柳会（島根）　松本はるみ報

生きているから届くマイナンバー　好栄
結び紐あの人らしいおくり物　恵美子
若き日の服が着たくて風とおす　ハル子
ゆったりと風力発電山の上　安子
送られて古里七十年日が昏れる　はるみ
終りない主婦のチャレンジ多忙です　英子

寂しげに送る姿に振り向けず　かつ子
色々な思いが混じるドラ響く　昌

八尾市民川柳会（大阪）　土田　欣之報

吹っ切れた位置でゆっくり呼び戻す　加央里
四角から三角丸へ老いる影　寿之
地球儀を回してみても空がない　千里
二日酔い午後に回復赤のれん　清
バイキングはんなり食べる暇がない　紀雄
良い響きはばたく元素ニホニウム　朋子
大砲で打たれた様な友の檄　慶子
残照へ女はんなり紅を引く　仁
貧乏が居座る五円玉の筒　森子
自画像ははんなりとした色使い　恵
万華鏡くるり回せば別世界　壽峰
ポチ呼ぶ声とオレ呼ぶ声は違い過ぎ　耀一
中心に平和を置けば丸くなる　常男
流れ星夫婦でかけた願いごと　一文
七十も甘い言葉にまだゆれる　安男
一番星見付けた指の耀く子　高鶯
ふるさとは今も乱舞のほたる川　欣之

サークル檸檬（大阪）　松尾美智代報

明日は明日今日のノルマは無事終る　房子
途中下車しても明日は戻る家　義子
明日もまた目覚めますよう祈り寝る　昌紀
明日の風信じなさいと大落暉　光久
長所などないのに今も友でいる　久仁雄
明日の飯用意万端どこへ行く　哲夫
夕べに感謝明日に希望を持つ暮し　たもつ
明日又頑張ればいい月冴える　美智代
雪月花少しリズムは変えている　扶美代
明日のこと写す鏡がないものか　千代
すきま風吹くままにする馬の耳　蕉子
とびっきりの明日へ余力は溜めている　美籠
羅漢から明日を生きる気をもらう　智恵子
堂々と喋る真実らしくなる　希久子
明日こそと思わぬ夜もあるのだが　みつ子
雲よ雲明日も好いこと運んでね　いわゑ
前向いて明日の風と受け止める　楓楽

倉吉川柳会（鳥取）　竹信　照彦報

汗かいて頑張った事裏切らぬ　由紀子
汗臭い夫の勲章ほめてやる　紀美恵
汗をかく政治家消えて金儲け　次男
ひや汗の視線の先に毒蝮　萩江
緊張の汗は止まることを知らぬ　康子
貧しさも笑い飛ばした母の愛　智恵子
気が弱く笑顔つくってガードする　雄大
笑うこと探し毎日生きている　瑞子
にっこりと笑ってほとけさんになる　石花菜
笑いすぎ涙が出るのなぜかしら　玲子
笑う種あっちこっちで拾ってる　風露
井戸端で笑い袋が弾けそう　祐子
辛かったねよく頑張った大和くん　龍枝
北満で凍傷なった日の辛さ　重忠
ちさいのにぶゆに刺されて顔腫れる　けいこ
魚釣り辛い朝でも楽しみだ　泰輔
戦争の体験父は話さない　茂夫
辛い日を昭和の人は知っている　醉芙蓉
マンネリの沼を這い出すストレッチ　完司
吾輩ハストレッチ好き猫デアル　鬼一
お浄土まで歩いて行こうストレッチ　日出子
ストレッチ無くても伸びる鼻の下　野蒜
笑って喋ってきょうも脳味噌ストレッチ　茶子
軽薄なお笑いテレビ腹が立つ　照彦

川柳あまがさき（兵庫）　大浦　初音報

責任を取るのに迷う事はない　芳香
美女からの急な誘いで迷いだす　柳明
迷い道天を指さす道標　晶子
別れ際男は黙り背をむける　初音
沈黙を破るくしゃみで座が和み　紀恵
飽きもせず黙って釣ってる太公望　比ろ志
病気かと黙っていると聞いてくる　まつお
拳から弱い地金が出て困る　晴美
小学生薄目をあけて黙祷だ　佐紀子
ちぐはぐな会話譲らぬ祖母と孫　雪菜
しのびよる老の迷いに不整脈　紀華
女子会の悪口洩らす換気扇　歌留多
セレブたち鯖の味噌煮を知らんだろ　宏造
すし屋の湯のみ魚みな読みドヤ顔に　洋子
いわしにもちょっぴりプライドございます　楓花
水族館今夜の酒の当てよぎる　健二
バーちゃんが黙った呼吸確かめる　千賀子
ホタル狩り職務尋問された帰路　正和
うっかりと心を開く聞き上手　和子

留守電に分かりましたと返事する　耕　治
電子音に返事をしてる独り者　純
黙もくと網戸を洗う梅雨晴れ間　奮　水
角帽のマグロが闊歩するウメダ　靖　鬼
薫風に晒され右脳蘇る　ヨシエ
美人やし黙っていたらいい女　かずお
うっかりと言うてしもたと言う本音　見　清
六月の雨はこころに絡みつく　美　籠
うっかりと年取ったなといま思う　つね湖
雨上がり水色になる君と僕　ひとみ
今年こそ黙祷のないクラス会　り　こ

岸和田川柳会（大阪）　佐藤　幸子報

とっておきの言葉コラムからもらう　昭
認知症ちゃっかり者にないらしい　清
婿選び女の運の分れ道　喜代志
いい事はみんな自分がしたように　一　子
まだかいな試着に時間かかる妻　カズ子
不機嫌なロボットも居る近未来　香　代
この人ならと選んだはずが裏切られ　和　美
選り好み出来る程ある整骨院　五　月
そのうちに直るわ機嫌ケセラセラ　幸　子
タンポポの綿毛ほこほこ舞い上がる　信　二
借りた金妻はちゃっかり利息取る　隆　昭
延命治療重い選択まかされる　珠　子
機嫌良く即かず離れず夫婦仲　大　輔
ちゃっかりと丑の背中にいた子年　敏　治
新聞のコラム切り抜く受験生　忠　太
新入りがちゃっかり彼女手に入れた　久
割り当てはランドセルよと言ってくる　英　夫
煙草吸うコラムニストが毒を吐く　ふさゑ
同総会選ぶ程ない服迷う　弘　子
窓覗きアンネは何を見ていたか　益　男
君選び君しか見えぬ副作用　みつ江
新緑を従え空は上機嫌　三　成
ちゃっかりと国の財布で買うパジャマ　洋　二
金釘流なれど若しやと筆選ぶ　律　雄
空腹の熊は下山の道選ぶ　義　泰

川柳藤井寺（大阪）　鴨谷瑠美子報

金になるつもりなどない歩の気概　五　月
歩み寄る気配に風がやわらかい　まつお
見て聞いて試すこの世の歩き方　美　籠
私にいつも歩幅合わせてくれる人　婦美枝
一歩から何歩で止まる寿命計　絹　子
一歩後退二歩後退のわたし　勝　弘
ゆるやかに母と歩んだ介護の日　育　代
水あぶら歩幅合わせて五十年　フジ子
歩いてる真っ直ぐ道を歩いてる　彦　弘
一歩引く助走の間合い取りながら　信　二
不味くてもはっきり言えぬ新婚さん　喜代子
曖昧で公私混同つつかれる　雅　枝
曖昧のツケはオギャーに託される　みつこ
曖昧に答えて引いた重い幕　キーキー
別れた人の子か今の彼の子か　いさお
煮え切らぬ男で愛が冷めました　遠　野
曖昧はやさしさ人を傷つける　扶美代
近くまで来たと誘導やめたナビ　六　点
曖昧にできない妻のあの寝言　光　男
オバマ氏の折鶴頭下げている　瑠美子
頭から足の先まで酔っぱらう　一　文
吊り革にぶらぶら主義のない頭　美代子

大山滝句座（鳥取）　新家　完司報

年齢がずばりお尻に出てしまう　宏　章
懐が温いと金は出たがらぬ　孝　子
グワングワンと歩く短い足なれど　芳　山
飴玉を配ったからもう安心　寿　代
住む世界ちがう獣が里に出る　楓　花
窮まってオンアビラウンケンソワカ　芳　光
わたくしのガードレールがゆるむ夏　くにこ
退院と聞いて見舞いに駆けつける　紀の治
起きるにはまだ時間あり遅刻する　大　鯰
釣り糸がのんびり海と語り合う　麦　青
イチローもおれもおまえもひとり旅　石花菜
夏草やこの野郎めと乱れ刈り　照　彦
ネジ一個緩んだくらい丁度いい　雄　大
要らないと思えば捨てるものばかり　美ッ千
竹島もサザエ・アワビも日本籍　蟹　郎
大統領二礼二拍はせず帰り　野　蒜
風読んで飛び立つ時を考える　風　露
貼り紙が外れてくるよ壁も汗　けいこ
考えを少し変えたら楽になる　由紀子
我儘と天邪鬼いてくたびれる　幸　子
まだあるよ冒険心と好奇心　規　雄
特養の義母は今でも女学生　コスモス
青春は太宰マルクス反安保　道　唱

夢みてる歩き遍路をもう一度　鈴野
寝たきりが恐くて歩く一万歩　重忠
良い友が支えてくれる梨作り　久子
手に取ると失せる七色シャボン玉　完司

西宮北口川柳会（兵庫）　藤井　宏造報

ひと雨の欲しい二人の倦怠期　わこ
ゼロからのスタートとする深呼吸　千代
明日何が起こるか今日を精一杯　章子
せんべいを食べている間に席なくす　恭子
大輪のばらの自信が頼もしい　いわゑ
雑草はしたたか弱さあわせ持ち　義子
予知出来ぬ未来へ今はまず笑う　哲子
国仕切る一票私も持っている　弘子
仕切り屋に任せその場を丸くする　光子
父よりも仕切った母がえらかった　じろう
出掛ける日妻の好みに仕切られる　千賀子
何度目の仕切り直しかひとり旅　武彦
払いたい私の中にある仕切り　洋次郎
突っ張るか投げるか策を練る仕切り　茂
プライドがあり過ぎ仕切るやっかいさ　晶子
積立てを仕切り直して旅プラン　武臣
仕切っても黙っていたら箔が付く　勝弘
居酒屋に仕切りは無用皆仲間　正和
雑炊が芋が我慢を語り出す　美津子
あなたです我儘する癖つけたのは　みよし
やっぱり句会皆の気迫が快い　みつ子
両方に相槌打った悪しからず　文香
ちょぼちょぼの仲間の中に光る奴　盛夫
立ち飲みでちょぼちょぼ同士飲んでます　宏造
ちょぼちょぼがずぶとくなっていく汚職　りこ
ちょぼちょぼのメタボが競うミリ単位　浩司
ちょぼちょぼと脳に油を差して生き　宣子
年毎に時間の流れが速くなる　一徳
急がねば私の時間とけていく　紀華
あの恋が無駄だったとは言わせない　ひとみ
陣痛が波打ってくる母になる　順子
もう我慢しないと決めた母の乱　利子
ちょぼちょぼの意見ばかりが出る会議　和宏

六甲川柳会（兵庫）　市坪　武臣報

本当の友がいるかと指を折る　武彦
SLの車輪のような男が好き　盛夫
無事故です今日も安全縄電車　千賀子
ギシギシと八十路を進む大輪車　弘
口癒す笑みが溢れる日本食　洋一
味方でも時にぐさりと胸にくる　忠貞
金婚式車輪の違い乗り越えて　浩司
夫逝きて残る車輪のたよりなさ　英子
一輪車ピエロの業に泣き笑い　じろう
男女共車輪のごとく平衡に　芳江
大車輪働く蟻の冬支度　武臣
時の音に負けじつる巻く時計草　照子
私にはビール猫にはカツオ節　茂
駐禁のチョークに吐いた恨み言　敏夫
生つばを思わず飲んだメロンの値　道子
声なくても心が語るつんくさん　博史
誠実と熱意が価値を引き上げる　正彦
三世代最後は爺の知恵袋　文香
ときどきは車輪休めて古稀の坂　利子
有る物の値打ち見直す生活苦　洋次郎
雑草にひっそり虫のご邸宅　和宏
名前だけ変えていつもの祝辞ネタ　和郎
ペダル漕ぐ気分次第の回り道　美恵子
ギシギシと私の車輪言い出した　能子
消しゴムが思案のあとを知っている　美穂
蛇行してスピーチやっと締め括る　光久

川柳さんだ（兵庫）　田中　章子報

今欲しい優しいことば降るほどに　淑子
方言の減った日本狭くなる　博
一言が毒にもなれば薬にも　雅尚
てやんでえ江戸っ子弁にあほかいな　晃
子を叱る涙に言葉喉で止め　俊昭
今日は夏至漢字二文字で長い昼　隆
友だちの友だちだから丁寧語　ちあき
君のこと忘れていない母の指　一子
裁縫の指輪はずして得た余生　迪
言の葉を指折り数え五七五　宣子
妻の愚痴プチプチつぶし聞いている　祐康
言い訳の出来ぬ指紋のあとがある　美籠
留守中のメモにハートマーク書く　耕治
マークシート人の世決める白と黒　健彦
線引くと勉強した気になる不思議　雄太郎
エンドマークまだ逝くものか削除する　美智子
艶めいたマークの風と擦れ違う　哲夫
紅葉マーク落ち葉枯れ葉じゃきられる　つな子
監視カメラ闇をきっちりキャッチする　靖鬼
孫去んで障子に花のつぎを当て　哲男
マドンナの肩からのぞくサロンパス　好文

妻恋し背なに貼りたい湿布薬　勝正
求人の貼り紙が飛ぶ風の朝　野薫
何時までも年を取らない手配犯　健二
選挙ポスター笑顔も虚し過疎の村　徹
ばっさりを丸くおさめるお人柄　順子
寂聴は黒髪丸め法を説く　加代子
価値観の違いだからと切り捨てる　ひとみ
ロボットのようだねじいちゃんの入れ歯　花門
しっかりと歩幅整え夏の陣　ヨシエ
ニホニウム梅雨空晴らす和の快挙　キヨミ
少し派手にんまりとして鏡みる　歳子
存在感ゴキブリ退治だけとなり　修平
数珠を手にここは菖蒲の咲くお寺　千津子
投句する鼻歌交じりポストまで　富夫

豊中もくせい川柳会（大阪）藤井　則彦報

遅くても気にはしないと我が歩幅　時子
ニホンの名また知らしめたニホニウム　英旺
曲折の人生反芻する八十路　肇
伝統を重荷と感じない文化　求芽
かあさんにしっかり付ける迷い子札　公子
しっかりと他人に説教酔払い　健三
大きな声で歌ってならぬ子守歌　(永)玲子
ドームからオバマの鶴が翔び立った　健二
まさか俺が妻の重荷になったとは　真理子
横にもブレず縦にも伸びず定年日　比ろ志
振り返るあの日あのとき丸い膳　ヨシエ
マドンナが横に座った日の鼓動　雀舎
狼も時にやさしい声を出す　美津子
うっかりはしっかりを衝くジョークです　武彦
身の内の宝掘り出す五七五　堅坊
しっかりせよと言う戦友はもういない　靖鬼
横からは見えないものがあり夫婦　葉子
思いやりに触れて重荷も軽くなり　則彦
句作りのチビたエンピツこれも友　(岩)玲子
横顔に惚れて今さら断われず　満子
しっとりと化粧あじさい衣替え　満作
難しいことは言わない野のすみれ　千鶴子
妻が病み夫が縦を横にする　見清
大切に使おう限りある余生　久子
しっかりしてるとカルテに書いてある　耕治
医者を替え薬を替えてみる命　希久子
風紋の如き手の皺いとおしむ　歌留多
散歩道替えてしあわせ拾いたい　美佐子
金婚をすぎて夫婦は横並び　美智代
重荷にも動じぬイチローの凄さ　正彦
語り部の老いてしっかりした口調　黒兎

川柳ねやがわ（大阪）籠島　恵子報

散歩だと言って今宵も赤のれん　壽峰
まだ咲かせる八十路の古木に水をやる　薫
過信したらしいマスクへ風邪もらう　茜
森林の王者であったこの枯木　美智子
認知症にならぬと過信鍬ふるう　ルイ子
まあまあを生き甲斐とする蘇生術　麗
雨音の強弱を聞くノクターン　朝子
飽きもせず没句百題つみかさね　一
安全と信じすぎてる橋の上　秀雄
生き甲斐だよと言った夫を愛してる　弘一
枯木から新芽自然のエネルギー　忠央
枯木なりに今も真っ赤な血が巡る　賢子
補聴器を外し聞いてる妻の愚痴　洋
遺言書余白の箇所にあるドラマ　高鷲
温め合う絆子として親として　仁
生き甲斐はちまちま小金貯めること　あさ子
枯木にも花咲く春もやって来る　高志
時々は美女をハグして悲鳴聞く　修
プライドのかけらこぼれる車椅子　寿子
この頃はふらつく足に老を知る　美江
大阪は来ないと思う地震報　尚世
核を持ち自惚れ続く北のボン　祥昭
人生に生き甲斐あって寿命のび　鈍甲
生き甲斐に今夜も飲んだ旨い酒　弘風
美人湯に浸り安心していたに　かすみ
一合の酒チビリチビリと呑む余生　博泉
時折の木漏れ日だって生きる糧　恵子

川柳花の輪（大阪）岡本　薫報

アレコレと試すサプリに効果でず　陽
秀才が初めて落ちた教習所　勇太朗
帰宅した夫にたまに拗ねてみる　正太郎
新人さん背のびをせずにそのままで　やすの
試着室脱げなくなって買いました　あや乃
新人の背広馴れて五月晴れ　泰子
ニューフェイス母同伴で初出社　敬子
冥土とやら覗いて見たい試したい　昭好
半分を開けてしまった試し酒　薫
新人は入社式に親つれて　風
試食して仕方なく買う気の弱さ　みちる
生き様を試す時だと言い聞かせ　笑子

句会名	日時と題	会場と投句先
川柳さんだ	16日(火) 13時30分締切 氷・スリル・投げる いまいち・自由吟	JR「三田」駅前　キッピーモール6階 〒669-1545 三田市挟間が丘5－10－19　谷　祐康
岸和田川柳会	20日(土) 12時30分開場 星座・追う・いささか・ストレス	岸和田市立福祉総合センター 南海電車岸和田駅より徒歩5分 〒596-0067 岸和田市南町9－17－818　藤井康信
和歌山三幸川柳会	20日(土) 12時30分開場 荷物・戦う・酔う	和歌山商工会議所　4階　第3会議室 〒640-8570　ニュース和歌山編集部 「和歌山三幸川柳会」宛
川柳塔みちのく	20日(土) 17時締切 褒める・さっぱり・囃子	弘前市松森町73「レストラン・セーブル」℡0172-36-6614 〒036-8275 弘前市城西1-3-10 川柳塔みちのく事務局 稲見則彦 宛　℡0172-36-8605
川柳ねやがわ	21日(日) 13時締切 広告・言い訳・灯台・自由吟	産業会館　3F 〒572-0063 寝屋川市春日町9－9 高田博泉 内　川柳ねやがわ
川柳藤井寺	21日(日) 14時締切 蟻・シャワー・席題共選	藤井寺市立生涯学習センター・シュラホール 3F 近鉄南大阪線「藤井寺」駅下車南へ徒歩10分 〒583-0023 藤井寺さくら町2－2－201　髙田美代子
川柳塔わかやま吟社	21日(日) 14時10分締切 兼　題＝平和・満員・えらいこっちゃ 課題吟＝現在	和歌山ビッグ愛　〒640-8319 和歌山市手平2-1-2 兼　題　〒640-8453 和歌山市木ノ本890-12 宮口克子 課題吟　〒592-8349 堺市西区浜寺諏訪森町東2-208-5 桒原道夫
南大阪川柳会	22日(月) 18時開場 垢・やかましい・どきどき 揉める	大阪市立住まい情報センター　5F　研修室 地下鉄谷町線・堺筋線「天神橋6丁目」駅③号出口 〒540-0004 大阪市中央区玉造1-16-13-304 前たもつ
川柳塔すみよし	27日(土) 14時15分締切 無理・割る・はらはら	住吉区民センター 〒558-0054 大阪市住吉区帝塚山東2－4－9 古今堂蕉子
八尾市民川柳会	28日(日) 12時開場 **八尾市民川柳大会**	八尾文化会館　プリズムホール **川柳塔誌7月号　117ページ参照** 〒581-0083 八尾市永畑町2－1－7　土田欣之
はびきの市民川柳会	28日(日) 14時締切 逆・邪魔する・ビリ	陵南の森公民館 近鉄「高鷲」駅北東　徒歩10分 〒583-0864 羽曳野市羽曳が丘1-11-8　徳山みつこ
川柳ふうもん吟社	28日(日) 13時30分開場 燥(はしゃ)ぐ・ウイルス・なぜ	開発ビル　2F　ホール 〒689-0202 鳥取市美萩野2－171－3　中村金祥
京都塔の会	29日(月) 14時締切 クッション・ぴりぴり・談	京都ハートピア　地下鉄丸太町駅⑤出口すぐ 〒607-8231 京都市山科区勧修寺堂田70－16 桝本宏子
川柳たちばな	8月はお休み	立花公民館（尼崎市塚口町3－39－7） 〒661-0953 尼崎市東園田町3－49－5　藤井宏造

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所（06-6779-3490）へご連絡ください。

8月各地句会案内

（開催日順）

句会名	日時と題	会場と投句先
川柳塔 な　ら	4日(木) 14時締切 ビール・へとへと・冷	奈良市立中部公民館　4F 奈良市上三条23-4 近鉄奈良駅④番出口徒歩5分 〒633-0054 桜井市阿部787　松本方　安土理恵
川柳塔 まつえ 吟　社	5日(金) 13時30分締切 使う・丁寧・怠ける・ニセ(偽)	松江市雑賀公民館 〒690-1223 松江市美保関町笠浦222－1　相見柳歩
城　北 川柳会	6日(土) 14時締切 生える・ジグザグ・たまたま 自由吟	旭区老人福祉センター3F 地下鉄谷町線　千林大宮駅③番出口 〒536-0001 大阪市城東区古市1-8-14　江島谷勝弘
富柳会	6日(土) 14時締切 乾・木洩れ日・自由吟	富田林市立中央公民館 近鉄南大阪線「富田林」駅南口から西へ200m 〒584-0043 富田林市南大伴町4－1－10 川柳とんだばやし富柳会　池　森子
倉　吉 川柳会	6日(土) 14時締切 こだわる・それみろ・根	倉吉市明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡北栄町由良宿2072－17 谷口次男
川柳塔 さかい	7日(日) **出句締切** 12時30分 **夜市川柳大会**	堺市総合福祉会館　5階 **川柳塔誌7月号　117ページ参照** 〒590-0016 堺市堺区中田出井町3-4-31　村上玄也
西宮北口 川柳会	8日(月) 14時締切 税金・束ねる・ナンセンス 自由吟	西宮市立中央公民館　6F 阪急「西宮北口」駅南出口徒歩3分「プレラにしのみや」 〒663-8112 西宮市甲子園口北町27-4-602　梅澤盛夫
川　柳 あまがさき	9日(火) 14時締切 折れる・金・短い・自由吟	尼崎市女性センター・トレピエ 阪急「武庫之荘」駅南へ200m 〒661-0033 尼崎市南武庫之荘5－20－14　加川靖鬼
ほたる 川　柳 同好会	9日(火) 13時30分締切 車・作る・印象吟	豊中市立蛍池公民館 阪急・モノレール　蛍池駅前ビル　5F 〒561-0813 豊中市小曽根2－4－1　水野黒兎
あかつき 川柳会	12日(金) 14時締切 淋しい・星・歩調・時事吟	大阪保育運動センター（新谷町第1ビル2F） 地下鉄「谷町六丁目」駅③番出口南へ3分(道路向い側へ) 〒581-0014 八尾市中田2－312　前田紀雄
川柳大阪	13日(土) 14時締切 雷・とことん・響く	地下鉄・長堀鶴見緑地線　京橋駅「研修室」 〒534-0021 大阪市都島区都島本通4-11-6　山崎珠生
川柳塔 打　吹	13日(土) 14時締切 悪・拝む・もこもこ	倉吉市上灘町9　上灘公民館 〒682-0034 倉吉市大原637－3　牧野芳光 方 川柳塔打吹　事務局
豊　中 もくせい 川柳会	15日(月) 13時45分締切 耳打ち・支える・そこそこ 自由吟	豊中市中央公民館　3F 阪急宝塚線「曽根」駅　徒歩5分 〒569-0073 高槻市上本町5－26　初代正彦

柳界展望

★第16回春はくろぼこ川柳大会　同人成績。

秀　句　倉益　一瑤

笛吹いて下さい生きていて欲しい

秀　句　石谷美恵子

日めくりの一枚ずつを的にする

☆日本現代詩歌文学館2016年度常設展。第71回国民体く大会／希望郷いわて国体開催記念「スポーツと詩歌」2016年に左記の作品が展示された。期間2017年3月12日まで・問い合せ、電話0197－65－1728。

川上　大輪

ホップステップまでは自信があったのに

乗原　道夫

うつくしく強く地球を蹴る遊び

高瀬　霜石

父さんも運動会はビリだった

▽**柳界動向**△

○6月26日、「全日本川柳2016年愛媛大会」で、松尾和香さん（同人・和歌山市）が、15年連続参加表彰を受けた。同大会には小島蘭幸主幹・新家完司理事長・板尾岳人相談役・西出楓楽相談役・川上大輪副主幹ほか同人・誌友が多数参加した。

▽**出　版**△

○川柳句集『未完の絵』伊藤玲子著。新書判94頁。1200円＋税。かもめ舎川柳新書。

○エッセイ集『わたしのスター日記』。高瀬霜石著。イラスト柴田拓。B5判。178頁。1500円＋税。北方新社発行。

▽**お詫びして訂正**△

▼7月号＝P33下段20行目、句碑なら→句碑**なら**び。P48上段2行目、坂本加代→**平田実男**。P85中段20行目、敏治→敏**昭**。P95中段23行目、小久保和子→**古**久保。P113下段、「ふるさと川柳募集」課題「雪」→「**霧**」。P116新同人萩原狸月市住所、南あわじ市広田→南あわじ市広田**広田**。P117「第63回八尾市民川柳大会」、「真」伊澤壽峰→**井**澤壽峰。「愛」土屋耀一→土**谷**耀一。

▼7月号P80下段最終句、「母さんと叫んだだろう自爆テロ」は本人の申し出により削除。

▼**訃　報**▲

■小野句多留さん（同人・横浜市）は5月3日逝去享年79。

▽**新誌友紹介**△

加西市　紹介者　**山端なつみ**

篠山市　紹介者　**長谷川善輔**

篠山市　紹介者　**岸下さゆ子**

鳥取県　紹介者　**門村　幸子**

北野　哲男

北野　哲男

北澤　稠民

堺　市　紹介者　新家　完司　**松永　庄三**

常任理事会＝7月6日㈬①二賞選者と最終確認②同人総会の式次第確認③高野山合祀日程④定例確事項

次回＝8月5日㈫AM10時～

波多野五楽庵句碑建立の募金について

発起人　福士　慕情（川柳塔みちのく主幹）
斉藤　　勉（　　同　　前主幹）
波多野厚緑（波多野五楽庵　長男）

◆**建立日**　平成28年10月15日（午後二時から除幕式）

◆**建立地**　石神山勝岳院（弘前市西茂森町1の17の1）

◆**募　金**　一口、2000円（複数口可）

◆**締切り**　**平成28年8月31日**

◆**送り先**　〒036-8275　弘前市城西1-9-5　福士慕情　宛
☎0172-37-1806

◆**郵便振替口座**　02300-7-36673

川柳塔みちのく

編集後記

★波の音よき思い出を繰り返し　薫風

★路郎賞・川柳塔賞応募の季節になりました。オリンピックも路郎賞・川柳塔賞も参加することに意義があると思いませんか。本誌巻末に応募用紙が添付されています。ご応募をお待ちしています。

★学生時代テレビ局で視聴率調査のアルバイトをしたことがある。日曜日の正午、無作為に開いた電話帳で片っぱしから電話をかける。当時の電話帳には住所・氏名が掲載されていた。今のように個人情報云々とうるさい時代ではなかった。

★「もしもし○○テレビです。今何チャンネルをご覧ですか」。のんびりしたものである。テレビに付けられた機器が一分の猶予も無く視聴率をはじき出す現代、テレビが面白くなくなった。ことに民放が酷い。

★たまたま早朝と深夜の通販をいくつか観て呆れた。膨大な時間の浪費、お金の無駄。またドラマに割り込んでくる細切れのCMの多さに呆れて、思わずスイッチを切ることも。テレビを観る時間が減り、読書の時間が増えたことを喜ぶ。

★日曜日はアニメの「ちびまる子ちゃん」「サザエさん」を楽しむ。ばあさんがひとり、けらけら笑っている図は我ながらゾッとしないでもないが心底笑える。「ちびまる子ちゃん」も「サザエさん」も家族が集まるのはお茶の間だ。「ほっとした処に置いてあるみかん」小出智子先生の作品。お茶の間の卓袱台には蜜柑やお煎餅がよく似合う。

★ちびまる子ちゃんには小市民のささやかな暮らしの哀歓が描かれている。モモエちゃんにあこがれヒデキに熱狂するまる子は、かつての私だ。何でもない平凡な日常の愛おしさを、大切さを、私はアニメから教わった。

（朱夏）

□大阪の伝統ある句会が、長年続けて来た「天の天」を選ぶのを止めた。その理由は、「天の天」になった作者は嬉しいだろうが、最下位になった天の作者は気落ちする。各題の天はあくまでも天である。と、いうものである。たまたまであるが「川柳塔」467号（昭和41年5月号）に載っていた薫風先生の小論「手前味噌」を読んだ。「…句会出席全員で選出する『天の天』の句は、必ずしも一等の句にその栄誉が与えられるとは限らず、かえって第一等の句が落選する場合の方が多いのである。確実な選力眼によって、句会出席者は指導啓発することに、『天の天』の意義があるのであって、単に興味を添えるぐらいの意味で行われるのであれば、かえって害になるのではなかろうか。…」と。あれから50年、薫風先生の一考が生きていたのかと思ってしまった。

（勝弘）

ひとこと

戦利品―尾道の句碑

川柳大会で名誉以外の戦利品を得たことがあります。

中四国5市による文学ルート川柳で佳作賞となり、その副賞が三千円のギフト券。更に舞台上で表彰されるとのこと。二度とないことだからと、会場となる尾道に出かけました。

前泊で観光の町を散策、そして坂道の途中で麻生路郎・葭乃ご夫妻の句碑を見つけました。

当時私は川柳塔の誌友でしたが、この地にお二人の句碑があることを知りませんでした。思いもよらない出会いでした。

旅費に3万円を使って3千円を手にしました。それに加えて、ご夫妻に直結する川柳塔との縁を改めて感じたこともまた、戦利品のひとつとなりました。（吉村久仁雄）

川柳塔（同人）・水煙抄（誌友）投句用紙

種目「　　」発表（10月号）　地名

市都
県府道　姓雅号

◎8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

きりとりせん

同人・誌友　マルで囲んでください。

投句先　〒543-0052 大阪市天王寺区大道1丁目14番17号 花野ビル201

「川柳塔」への投句について

(1) 川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友（誌代半年分以上前納の定期購読者）に限り、本誌綴込みの投句用紙を使用してください。

(2) 愛染帖・檸檬抄・一路集・インスピレーション・ナビ（印象吟）への投句は、同人・誌友に限ります。初歩教室は誌友のみとします。愛染帖・一路集・初歩教室は川柳塔柳箋（本社事務所取り扱い）、檸檬抄は本紙綴込みの投句用紙を使用してください。

(3) 各欄への投句は、必ず氏名と住所（県・市名）を明記してください。

(4) 各欄への投句数および**投句締切期日の厳守**をお願いします。ファックスでの投句は御遠慮下さい。

川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにお願いいたします。

檸檬抄投句用紙

「疑　う」（8月15日締切）

10月号発表

安土　理恵 選 ――共選―― 北野　哲男 選

◎楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

きりとりせん

B　A

地名

県府　市道都　姓雅号

切らないで下さい

B　A

地名

県府　市道都　姓雅号

左右に同じ句を書いて下さい

二賞選考

応募用紙

	路郎賞（川柳塔欄・同人）
	川柳塔賞（水煙抄欄・誌友）

○印を入れてください。

きりとりせん

月	月	月	月	月
頁	頁	頁	頁	頁

締切　8月10日(月)必着

◎下段に掲載月と掲載頁を記載のこと。
◎裏ページの要項を読んで応募してください。

地名

姓・雅号

応募要項

① 川柳塔欄・水煙抄欄に六カ月以上、出句した人に応募資格を認める。

② 平成27年9月号から平成28年8月号までの自分の入選句から5句を選ぶ

路郎賞――同人は川柳塔欄から応募

川柳塔賞――誌友は水煙抄欄から応募

③ 5句と掲載月、掲載頁を楷書で書き、8月10日㈬必着のこと

④ P96・P97を参照して下さい。

作品募集

10月号発表（8月15日締切）

川柳塔（8句）小島蘭幸選
水煙抄（8句）西出楓楽選
愛染帖（2句）新家完司選
檸檬抄「疑　う」（2句）北野哲男　安土理恵　共選
インスピレーション・ナビ（2句）大西泰世選
「もてなす」根岸方子選
「ひとこと」菊地政勝選
一路集（2句）
初歩教室「手　本」（3句）山口光久担当

11月号
檸檬抄「塩　」
一路集「乾　く」「羽　根」
初歩教室「スリル」

本社8月句会

とき　8月5日㈮　13時開場・13時40分締切
ところ　アウィーナ大阪　4階　金剛の間
天王寺区石ケ辻町19－12　電06・6772・1441
おはなし「戦中の小学校と川柳」江見見清
席題「　」出口セツ子選
兼題「選　ぶ」石田隆彦選
「くるり」松尾美智代選
「　記　」加島由一選
「スタート」西出楓楽選
「外　国」小島蘭幸選
（各題2句以内）
会費　1000円　**投句料**　500円（切手可）

本社9月句会

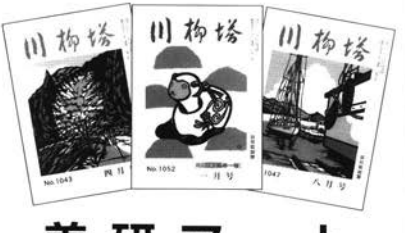
7日（水）午後1時から
兼題「病　気」「ふたつ」「歪　む」「ヒヤリ」「目　先」

第35年度　夜市川柳募集

第3回「抜　く」　三宅保州選
ハガキに3句　**8月20日**締切
投句先　〒593-8305　堺市西区堀上緑町2-16-3
河内天笑方　**川柳塔さかい**

定価　八百円（送料86円）
半年分　五千円（送料共）
一年分　九千八百円（同）
二〇一六年（平成二十八年）八月一日発行
発行人　小島和幸
編集人　木本朱夏
印刷所　美研アート
〒543-0052
大阪市天王寺区大道一－一四－一七
花野ビル201号室
発行所　川柳塔社
電話（〇六）六七七九－三四九〇番
振替　〇〇九八〇－四－二九八四七九番

川柳・俳句・エッセイ・小説
新聞・広告・ポスター・伝票等
あなたの思いをかたちにします。



美研アート
〒530-0022 大阪市北区浪花町9-4
TEL（06）6372－1178
FAX（06）6372－1196
E-mail：bikenart@ea.mbn.or.jp

川柳塔のホームページアドレス　http://www.senryutou.com/

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
平成二十八年八月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通巻一〇七一号 川柳塔 八月号
定価 八百円（送料 八十六円）

オニザキの プレミアムロースト
つきごま
杵つき製法の「すりごま」

袋を開けた瞬間に広がる、香ばしい薫り。舌と記憶にしっかりと残る、深いコク。料理をより美味しくするゴマを作りたい、真っすぐな想いから生まれた逸品。それが「プレミアムロースト」。素材本来の良さを余すこと無く引き出した、オニザキの自信作をお届けします。

株式会社 オニザキコーポレーションセールス
〒862-0951 熊本市中央区上水前寺1-6-41 OCOビルディング
TEL 0120-30-5050

心を尽くし 思いを尽くし 知性を尽くし
力を尽くして全人的に仕える医療と福祉

医療法人社団 湯川胃腸病院

消化器科 放射線科 脳神経外科
緩和ケア（ホスピス）
デイサービスセンター併設

大阪市天王寺区堂ヶ芝2-10-2 TEL 06-6771-4861
http://www.yukawa.or.jp

雑誌 05703－8